150
358

通俗安心決定鈔鼓吹 全

明治廿六年六月

京都 興教書院發行

017332-000-3

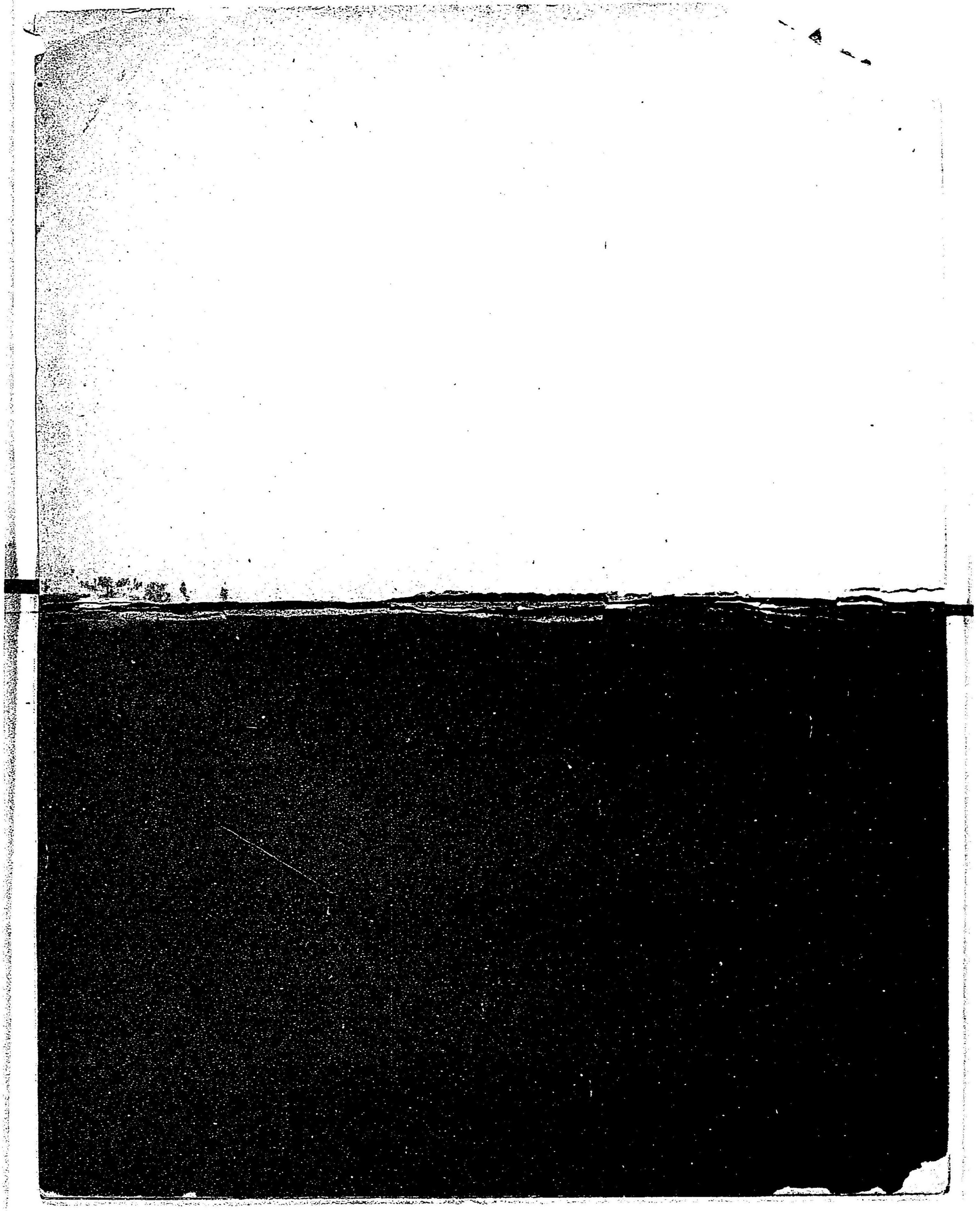
特18-212

安心決定鈔鼓吹（通俗）

佐々木　慧雲／著

M26.6

ABF-0018



特18
212

東京圖書館藏

安心決定鈔鼓吹

全

安心決定鈔皷吹目次

第一　題の四義幷字義
第二　安心の多義
第三　達磨安心の話頭
第四　當流安心の字意
第五　涅槃經十六分の佛性
第六　曹娥碑の銘
第七　宗旨安心領解の分別
第八　元祖聖人信の勸進幷細釋
第九　鴈鴈龜去の緣
第十　決定の名義
第十一　貪泉水
第十二　卷を分の沙汰
第十三　選者の名を辨ず
第十四　三國にわたりて選者の名の無有
第十五　宗名の所立
第十六　極樂は是報化二土の中にいづれ何ぞやの辨幷四土の記
第十七　眞宗の名義並多義の說
第十八　宗の字義付宗の三義の細釋
第十九　行者に自他二流の別あるの辨
第二十　前後所知の要述
第廿一　愚癡の居士無益の事ゐ日をくらすの述
第廿二　法藏四十八願ををこし玉るの因緣

第廿三　法藏の字義
第廿四　精進修行の爲の寶珠を求の譬へ
第廿五　四十八願の中ゟ勝劣の辨
第廿六　弘誓に惣別の二意
第廿七　太施太子の緣
第廿八　雉野火をけすの緣
第廿九　彌陀の本願名數の多少
第三十　四十七の願はつゐにゝ第十八の願ゟ皈するの引文細釋
第卅一　法然聖人決定往生の信相
第卅二　自力他力二種の信心
第三十三　十念の多說
第三十四　法然聖人悲母に遣さるゝ安心の
第三十五　念卽是唱の辨述
第三十六　名號兩字の沙汰
第三十七　鴝鵒谷鳥の往生
第三十八　願行雙須の釋義
第三十九　往生の名義幷往生は是成佛と一躰異名の妙述
第四十　機法一躰は宗旨の要義たる術
第四十一　佛意に成せらるゝ往生に三世の別あるの辨
第四十二　四種十劫の評論
第四十三　佛は衆生の父母たるの辨
第四十四　阿含經の六力
第四十五　慚愧の二字の沙汰
第四十六　楊震か四知
第四十七　五百塵點劫の引文幷細釋
第四十八　釋迦婆婆八千返の往來幷八は極滿にとるの述
第四十九　公明儀牛に對して琴を彈ず
第五十　機の字の義意
第五十一　他力の二義
第五十二　闡提の名義
第五十三　法滅百歲幷彌陀利益
第五十四　釋迦捨生の地の多少
第五十五　釋迦難行苦行の相
第五十六　凡夫の名字幷多說
第五十七　季札徐君が塚上に劍をかけてあたへし緣
第五十八　邯鄲の學步
第五十九　法然聖人疑煩惱を示玉へる法語
第六十　不思議智の四重八對
第六十一　名躰不二の辨
第六十二　歸命の多說
第六十三　釋迦因位ゟ羅刹の牙ゟ入て半偈を聞の緣
第六十四　發願と廻向との分別
第六十五　必得往生の辨幷ゟ必の字の釋義
第六十六　失念の二義
第六十七　領解の字義

第六十八　淨土の三經本願念を以正躰となし玉へるの要術
第六十九　菩提薩埵の名義
第七十　極樂の名義
第七十一　極樂穢土苦樂對辨
第七十二　他佛の辨別幷おひつしの字義
第七十三　他作自受の辨
第七十四　十界因果の相
第七十五　涅槃七種の機幷お隨釋
第七十六　齊の桓公の仁白鳥おはぐくめるの沙汰
第七十七　聞法の德義幷お宗旨の聞名
第七十八　彌陀の形像おむかひ又名號を
第七十九　宿善開發して彌陀佛おをいて歡喜心を生ずるの辨
第八十　念佛三昧の多說
第八十一　身の字義
第八十二　四大所成の細釋
第八十三　四大の名義幷お表相
第八十四　極微塵の所解
第八十五　煩惱幷に隨煩惱の所解
第八十六　白毫相幷に千輻輪相の引文
第八十七　道心の二字幷に四威儀の註
第八十八　金剛智の傳
第八十九　月光童子水肉悟道となふの要術

第九十　法進水觀の相
第九十一　佛躰所具の功德に四義あるの辨
第九十二　名義相應の念佛は正しく是れ決定往生の相たるの辨　述
第九十三　自他流の三心に異中の同同中の異あるの辨識
第九十四　證空上人機法一躰の例文
第九十五　自力念佛の相をあらはす
第九十六　白氏文集行路難の詩
第九十七　法界の三義
第九十八　倩娘離魂のものがたり
第九十九　善導佛意おかなへるの妙釋
第百　佛願他力を以て衆生に施與し玉ふの證經論にあるの引文
第百一　極惡深重の機いひとへお彌陀の本願に乘ずるの辨
第百二　法滅百歲の時彌陀利物たるの相
第百三　宿善開發の機に遲速あるの述
第百四　五正行用不の妙術
第百五　恭敬兩字の辨別
第百六　禪門佛の字の詰頭
第百七　淨土の化生と此土の化生と同名異躰たるの辨　述
第百八　他力大信心の名義
第百九　當躰の蓮華幷に十界互具の法數のたとみ

第百十　心蓮華の證文
第百十一　蓮華不レ染二汚泥一引證
第百十二　同一念佛に就て彼此兩土の分別
第百十三　九品の行業實は是念佛たるの述
第百十四　司馬牛兄弟なきを憂るの細釋
第百十五　見佛の多說
第百十六　三種慈悲幷に無緣の細釋
第百十七　骨髓の慈悲幷に皮肉骨の三等慈
第百十八　三毒煩惱の名義付毒の字義
第百十九　彌陀五智の配屬
第百二十　眞丹十七代の名
第百廿一　傳大士の傳
第百廿二　傳大士理佛と同く坐するの偈
第百廿三　無爲の字義付り引文
第百廿四　大小乘無爲の辨
第百廿五　姑蘇臺蔵陽宮の反滅
第百廿六　大願業力の引文隨釋
第百廿七　四人愚昧の願望
第百廿八　聖道門四種不退の名義
第百廿九　淨土五不退緣
第百四十　功德の名義
第百四十一　名号高德の辨幷に万德の引文
第百四十二　自業自得果の引文
第百四十三　法華の諸法從本來。常自寂滅相得悟の述
第百四十四　香嚴和尚擊竹悟道
第百四十五　自力道心難修たるの述
第百四十六　自情の慣習捨がたきの述
第百四十七　觀經兩經三心三信の分別
第百四十八　機法一躰の行者は忘不忘の念わらざるの辨述
第百四十九　念稱是同の了簡
第百五十　横竪二出の判述
第百五十一　名號は無爲無漏たるの辨
第百五十二　五種雜行幷五種正行の名義
第百五十三　正定業の細釋
第百五十四　無導智の名義
第百五十五　王家の力士額上の寶珠を失ふ聖道門自力淨土門他力の分別

第百五十七　自力他力強弱の辨述
第百五十八　阿彌陀は光明たるの述
第百五十九　阿彌陀の三字にもろ〳〵の功德を具足すと云ふ引文多説
第百　六十　彌陀經隱顯の兩説
第百六十一　下品下生の得生幷十惡の名字
第百六十二　下三品違次近の三方便
第百六十三　破戒十惡輕重の判
第百六十四　下中品の一念は意念口稱の中には何ぞやの述
第百六十五　下品下生の得生幷猛火の多説
第百六十六　群疑論无記往生の引文
第百六十七　宿生の因は善惡共に今生に顯る
第百六十八　經意の念佛と意念と同異の分別
第百六十九　料簡の引文付隨釋
第百　七十　唯稱佛名は生天の因たるの引文
第百七十一　人中に生ずる十種の因業
第百七十二　往生論五念門の中の歸命讚十方等の十字は南無阿彌陀佛と一躰たるの妙述
第百七十三　日月兩輪の本地
第百七十四　喜受往生の相
第百七十五　觀佛經の六譬
第百七十六　心王心所の分別
第百七十七　薪火のたとへの所依

以上目次終

〔一〕題名四義

安心決定鈔鼓吹本之一

凡そ此鈔を和解せんと欲するに。諸經論の例にまかせて三とす。一には大意をのへ。二には題名をしるす。三には章をひらいて義を釋せるなり○初に大意とは。いはゆる世間に淨土の行人を見るに。彌陀に依し念佛をとといへども。多くは是機をかへりみて以て起行を專らとし。佛願佛力のむねを信せず。故に願行ともに佛意の所施たる事をしらざれば。機法一體の領解を[illegible]らず。此等の機分のあやまりをあらため。まことの信心にそゝめ入しめんために此の鈔の[illegible]へるなり　○二に題名とは

安心決定鈔本[illegible]

[illegible]諸經論の題名を置事。古今の定論たるなり。然れども古は奥にのみあつて首に。[illegible]近來の彌天法師と云ふあり。諸經論の題みな奥にありて人見るにくるしめるを以て。奥にあるを書のはじめにをき玉へるなり。是について四義をまうけて解せり。一にはまづ題目を見れば是はいつれの部ぞとしるなり。二には智者ありて題目の文字を見て

〔一〕安心の多義

一部の始中終を畧ししるなり。三には是は何と云ふ經論ぞと。はや〳〵文中ゐいらずして簡別して知るなり。四ゐい題務にいそがはしき衆生。題目の文字を見て益ゐおつかるなり已上例せば阿彌陀經と聞て其の得益ゐるがごとし。今の抄のごときんば。題を見て安心決定す是れ其の益を得る義なり。故に題い一部の惣標にして其の義味こと〳〵くこもりぬ。誰論ゐ云。名極二於題目一。形講二於方圓一。いふこゝろはもろ〳〵の書籍い題目の字ゐきまり形は方と圓とにつくとといへり。されば題はひたゐと訓して。人を見るゐは先つ題額を見よ。此のときはや誰人としるなり書を見るゐは先つ外題を見よ。はやく其の書の終始を略してしるなり。故にしる聖教の題目はなをし人のひたゐのごとし。古人云。見レ人先見レ額。見レ書先見レ題と此意なり。此等の諸義ゐより。へるなり 〆安心と云ふ事。異義まち〳〵にこゝろうるなり。されば異流ゐは安い定なり置なり止なりなんと〻云ふて。阿彌陀如來の超世無上の本願のことはりを聞いて。先つ十方に淨土ありといへとも九方の淨土をすて〻西方極樂の一土を願ひ求め。次に一切諸佛ゐまちまちたりといへとも。我等が機分に相應せず。阿彌陀佛い是れ下機相應のほとけなりと深く信

〔三〕達摩安心の話頭

して偏ゐ皈依するなり。さて後ゐは十方諸佛ゐ名号是れ多といへとも。皆機情悟解の觀法なりと云ふて。せて〻是を行せず。彌陀の名号ゐをいてい文字はわづかゐ六字たりといへともこの中に諸佛の願行所有功德こと〳〵く籠り。これ又行するに行住坐臥を論せず。時處諸緣をきらはず唯是易行易修なりと此の一法ゐ結皈そるなり。此の三つを行者の心裏に思ひ定むるを安心と云ふなり。此ときは。心をさだむるとも。心をとゝむるとも。心ををくとも訓ずるなり。又た天台家ゐ安心の名目あり。天台玄義に云。定慧均停故名二安心一。と此のこゝろは定慧の二法平等ゐ修して心をやすんじて能く佛道を修そるなりといへり。此のときは安心を心をやすくそと訓せり 〆せて又禪門に達摩安心の話則あり。そのかみ禪宗の初祖ゐ達摩大師と云ふあり。嵩山の少林寺ゐまし〳〵て九年のあいだ。面壁して坐禪し終日默然たり。人更に師の意をはかりしる事なし。其のころ神光と云ふ僧あり博達强起なり。毎になげきて云く。孔子老子のをしへは禮樂の事のみなり。又易莊子のたぐひはいまだ妙理をつくすにあらずと云ふなり。時に達摩大師少林寺に居住せりと聞て。即ち彼ゐ往て朝暮ゐ奉事す。然とも師面壁不言ゐして一言も教誡し玉へる事なし。神光自らをもへらく。古を聞

〔四〕當流安心の宇意

に佛道をもとむるゐは。骨をくだき髓をとり血をいだし崖より身をなぐるなんど云ふなり古ゐさゐ如レ是。況や我又た何人ぞやと云て。求法のこゝろざしありしゐ即ち其の年十二月九日の夜なりけるゐ。庭上ゐたちてうごかず。其の夜。大ゐ雪ふりて明ころをひには雪つもりて膝をすぎけるなり。師是を見ていよ〳〵汝ぢ久く雪中ゐ立て何事をかもとむる。神光の云く惟願は師。慈悲をたれ甘露の門をひらいて廣く群類を度し玉へと。師云。諸佛無上の妙道は輕心慢心を以ては中々もとめがたしと。光此の語を聞て。ひそかに利刀をとりて自らの左の臂をきりて師の前にをけり。師是を見てこの者ゐ是れ佛法の器量たる事をしりて擧示して曰く。諸佛の法印。人ゐしたがうて得にゐらずと。光の云。我心安からず乞ふ師。我が為に心をやすんじ玉へと。師の云。心を將來れ汝が心を安んぜんと。光の云く。覓レ心了不可得なりと。師の云く我與レ汝安心竟と。此の則のごときんば心裏ゐ有耶無耶の見ある分ゐ安心にゐあらず。心性もと不可得なりと識情ゐわたらざるを安心とは云なり。此ときは心をやすんずると訓するなり。上來ゐ是異流他門の安心のさたなり 〔今當流依用の安心ゐしからず。唯た安き心と訓して義をゐからひ勘化すべきものなり。是について先つ聖

〔五〕涅槃經十六分佛性

道門のをしへ安心ならざる事をしりて。淨土門のすゝめやすき安心たることはりを存知すべきなり。其の安心ならざるをしへと云ふは。倉卒に得心しがたきを云なり 〔涅槃經のこゝろゐよるゐ。熙連受持不誹謗。一恒愛樂。二讀誦。三恒淺義並初會。四一五八第二依。六七十二四三依。八恒十六第四依已上 このこゝろは天竺に熙連河と云ふ河あり彼の河の沙の數はと諸佛のみもとゐありて菩提心ををこして經典を受持し誹謗せざるなり。さて二恒河沙の沙の數はと諸佛のほとりにありて。菩提心ををこし經典を愛樂し。さて三恒河沙の間は法を誹謗せず。受持し讀誦し書寫するなり。是を初依の人とふなり。四恒河沙の間。菩提心ををこせるは十六分の佛性の中ゐ一分を得なり。五恒河沙の菩提心ををこせるは八分の佛性を得なり。是を二依の人と云なり。六恒河沙の間の發菩提心は。十二分の佛性を得なり。七恒河沙は十四分の佛性を得なり。是を第三依の人と云ふなり。八恒河沙の間。菩提心ををこせるは十六分の佛性を得るなり。是を第四依の人と云ふなり。此 即 難行にして佛性たやすく心得がたき故なり。此はこれ安心の修行ゐあらざる故なり。其の故いかんぞと云ふに自力をもつて佛道をもとむる故なり。讀文ゐ三恒河沙の諸佛の。出世のみもとゐありしとき。大菩提心

ををこせども○自力かなはて流轉せりとの玉へる此の謂なり○或ひ小乘には三生六十劫○四生百劫の劫數をへて漸く斷惑證理せり○大乘ゐは一地より一地にいたるに三大阿僧祇を經といへり皆是易心の修行にあらざるなり○無門のいはゆる其れ或は未レ然直待二當來一問二彌勒一此のこゝろは學者に死活自在の用を示すゐ直下に心ゐ安〳〵納得せる事あたはずんば○未來ゐいたりて彌勒の出世を待て此義を問へといゐるなり○是亦安心の修行ゐあらざる故なり○上來の諸義をかんがうるゐ自力の所修にして智慧に差別ある故なり 〆 邯鄲の淳と云もの江南ゐをいて○曹娥が石碑をつくりて建たりけるを○蔡邕と云ふもの其の石碑の後ゐ題して黃絹幼婦外孫○虀臼の八字あり○其の後ゐ楊脩字德祖と云ふて學術をこのみぬる俊才なるあり○楊脩曹操とともに江南にいたりて○石碑の後の八字を見て曹操○楊修に問て云く汝此の八字の意を知やいなや○修の曰く我いかゐも其の理をしるなりと○曹操の云く汝ち言事なかれ○朕も是を分別し見と○かくのごとくして行く事三十里にして其の理を案じ出せり○しからば楊修八字の義理をいへとありしかば○修か云○黃絹は絲の色なり○即ち絕の字なり○幼婦は少女なり○即ち妙の字なり○外孫は女子なり好の字なり○虀臼は受レ辛○即はち辭の字なり○具足して絕妙の好辭なり○碑の銘を稱美したる語なり○俗ゐ言○有智無智挍三十里○(漢書に見にたり)此即有智無智に差別ある故に安く心得ると○安く心得ざるとのかはりはあるなり○聖道の自力難行も亦復かくのごとし○機情自分の智を以て○佛道をもとむる故に安心不安心のかはりはあるなり○今彌陀の本願たる他力易行の法門と云は○一切善惡凡夫得生者とあれは○善人惡人のへたてなく○有智無智のゑらひなく○唯本願のことわりを聽聞して徃生治定と存知そる事は○更に智慧の力を以て心得ゐあらず○坐禪入定の義にもあらず○已がはからひを出さず○本願弘誓力ゐもとつき○やすく〳〵と信心領解せしめ○一念歸命のとき佛意の御方より我等をたすけ玉へる計なり○此即ち心得やそのをしなにてあるなり○是を一流の安心とは云ふなり○爰をこそ易行とも易修とも又は他力とも云ふなり○今此の安き心ふなり○此の度の後生の一大事をきはむる事○一流の至極なる故ゐ顯して安心とはの玉へるなり 〆 されは此の安心にもとづくこと○何の造作もなしといへとも○動は自のはからひにひかれて○本願他力にうとくなり一大專の安心を取りうしなふ事あり○御書ゐ云然常沒凡愚流轉群生无上妙果不レ難レ成○眞實信樂實難レ獲○何以故乃

由ニ如來加威力ニ故ニ已上此の御文の意は。一切流轉の凡夫。彌陀大悲の願力に乘して南無阿彌陀佛と申す事は。佛意よりたのませらるる御名なりと深く信して往生一定と思ひ居たる行者ハ。露の命をハりねると。やかて極樂寶利ゐ往生して无上の妙果をうる事は。何の造作もなき安事ゐて候ひとも。眞實の信樂をうる事なりがたき故なり。其眞實の信樂と云ふハ。別の子細候はず。我等が智慧才覺をはなれて願力の信にもよをされて。身も心も佛意になげうつばかりなり。此卽安き意ゐあらすや。然に何事ゐ眞實の信樂ゐなりぬる事のかたさそと云ふに。己れが少智をいたして云く。いかに如來に加威力のあり。大悲廣慧のましますとも。行者の方ゐ自分の智慧をいださずんば。往生は得がたしと思へるが故なり。されば此たび無上の妙果を成そる事凡夫淺智の力を以て及ふ事なしの故ゐ上地たる文殊。普賢。龍樹。天親の聖者達も。皆智慧をすてゝ本願をたのみ。往生の素懷を遂られ玉ひさとなり。幸なるかな我等凡夫は。本より智慧はなく才覺はなし。まことに是本願相應の機なり。往生極樂何のうたがひ候べき。賴母敷彌陀の本願かなと信するのみなり 〆 宗祖聖人の御言ゐ云。善人さら往生す況や惡人をやと。此こゝろは善人達のすてがたき智慧

をそてゝ。本願をたのみ往生せられたまひぬ。まして惡人は本より出すべき智慧なき故ゐ。本願にさへもとずけば往生さらにうたがひなきなりとの義なり。さればこそ聖道門を學せる人。淨土門に入て念佛の法門を修すると事はそてがたきものなり。そのかみ聖道門を學せる人。淨土門に入て念佛の法門を修すると いへとも。本ならひにたる執情によつて。眞なる念佛の行にはあらざるなり。是によつて黑谷上人ののの玉はく聖道門をすてゝ淨土門ゐ入。念佛を信せん人は唯。愚癡。道綽。善導の教相によるべしとあるも。自力機情の智慧をはなれて本願念佛を行せよとなり 〆 昔し一つの池あり。是に鴈と龜と常になれしたしみて居けるが。旱天にあふて池水こと〳〵く渴涸せりとさゐもろ〳〵の鴈。龜に謂ていはく數年こゝゐおつて馴あそふといへとも今ハ渴池たる故ゐ。他の池水のある處ゐ行なりと云ふ龜か云く各のは羽翼を具し玉へる故に空をかけりて立ち去り玉へるが。我ゐをいては爲方なし。哀れ各の方便をなして我をも以て往玉はれと云ふ。ときに一つの鴈の云く。爰ゐ思量せる事ありとて一つの枚（箸のやうなるもの）を以て其の中を龜にくわさせ。兩端をは我々くわえて空を飛行べしと約言して。虛空を行くに不祥童ども下より是を見て鴈々龜去と呼なり。龜是を聞て腹立て。汝等は何事を云ぞといらへぬれば

〔十〕決定の名義

口わけるを以て下おをちて其身をうしなふといへり（雜寶藏經に見にたり）今彌陀の本願い智慧をはなれて極樂に往生すとあるお○智慧の口をひらきて已がはからひをいだして○種種に分別し解智するを以の故に○淨土お生せすして生死海お沒溺せるは○龜の口をひらひて其身を損せるおあらずや○但し宗旨お一つの智慧と云ふ事のあるなり○黒谷上人のの玉はく○源空は愈非遑使の別當なんぞの位にてそ往生はせんずれ○本の法然房にては往生はゐせし○故に年來ならひたる智慧は往生のためおは要お立べからず○去ども習ひたる甲斐おは角心得たる計なりと○愛を信心の智慧とはの玉へるなり已上所レ詮○題の意は彌陀の本願一流の最要なり謂く智慧もいらず才覺もなく○出家發心の形ともならず坐禪工夫の心をもなさず○唯安々と信心領解する心を安心とは云ふなり 〆決定とは心安の一とほりを治定と聽聞して餘に心をかたむけざるを云ふなり○十地論に云○雖レ在二於大海及刼盡火中一決定信無レ疑○此等を決定とは云ふなり○但し是は自力の決定信おして今のこゝろおはあらざるなり○然れども自力他力の差別はあれども決定の言をとり玉ふ本據は○一家善導深信の釋中お決定の言あり○然ともこの中お一流相傳の心ろより見るに第二深

〔十一〕貪泉水

信の釋に二者決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生無疑無慮乘彼願力定得往生となり○此卽今の決定の相なり○正く題の熟語を思ふに般舟讃の安心定意生安樂の釋文より出るとみたり○さて此相おをいてはたとひ異覺異見別解別行の人ありて○安心領解の人に向て○いかお他力ふよると云とも機の方に起行のはげましなくんば往生すべからずと○種々お疑難といへとも彼お少も他力信心のこゝろをうばゝれざるを決定とは云ふなり○故に決定とは確乎不レ抜の謂なりとあつて○たとへば生板お釘を打て抜ざるがごとくなりといへり 〆そのかみ廣州に一つの泉水あり是を貪泉と云ふ○古老のいはく此の水を飲者いたとひ清廉の人たりといへとも忽に貪欲を起なり○ときに吳隱之と云ふ人○此の州の太守となれり○此の人清潔廉貞にして○此の水を幾度のみ玉ふといへども少も貪欲心をばをこし玉はざるなり○是によつて隱之詩賦あり古人曰ふ此水一歃懷三千金○試使夷齊飲終當レ不レ易レ心（已上水衡記に見にたり）今此の意を思ふに隱之及ひ白夷叔齊なんぞはまことの淸潔の士たる故お貪泉を飲といへとも終に心をかへて貪心をこることなし○世人の淸廉と云ふはまことの淸直ならさる故お○此水を飲と貪欲をこるなり○なをし自

〔十二〕巻をわくるの沙汰

力雖善の念佛者のたぐひなるべし。今安心決定の行人はしからず。なをし隱之伯夷等のごとくいかなる留難を聞ても心をかへさるべきなりと云云鈔とは畧取なり又謄寫也。宗鏡錄序解ゐ云。鈔刪レ繁補レ闕之義也。今いふこゝろは安心決定のことはり淨土門にをいて色色ゐ沙汰せられ候ひて分別しがたきに。一流聖人の御敎誡。二尊三佛の素意にかなひ。往生淨土の法門掌をさしてあきらかなるをや。其至極を云ふゐ信心ひとつゐ定たりとはいへとも。別て是をいへば其の義多門ゐをよぶ於レ中。又要を云ふゐしげきをばけづりさり。又足ざるところをば補ひなして。今の聖敎となし玉へり。故に鈔と云ふなり。本とは此の御書は本末あり。今は始めたるを以て本と云ふ。次下の末に對するの詞なり惣して 図巻數を分る事紙の多少によりて定めがたし。但し又表せる事もありぬ易檢辭傳の上下二卷。老子の道德二經の上下卷等是なり。今の本末二卷い其の表裏ありや。又唯た紙の多少ゐしたがふて分るや。謂くしりがたし。今愚推を以て考るに其のかたぐりあると見えたり。此の書の要たる事。機法不二を以てす。本は佛意ゐ約し末は機情ゐ屬せ。本末機法二つたるゐ似れとも。佛邊に機法不二の發願廻向あり。機邊ゐ機法不二の眞實信樂あり。全く是れ機法一躰の

〔十三〕選者の名を辨ぞ

安心決定鈔の南無阿彌陀佛なりと云 図問ふ此の書の作者誰人ゐてさふらうや。又何事に選者の名をしるさいるぞや。答ふ此の書は法印權大僧都覺如上人の作なり。選者の名を誌ざることは。一類の機に對して率爾に誌したまふが故也。かるがゆへに敬重繪ゐ云く。たまく津を問ひたてまつる者には。西方の通津をしめし給ふとき。後日の廢忘をたそけんとてしるし給ふべきよし。申し請る輩ゐは一紙のうち片時の程なぞにて。いと思案ふもをよばず。たい率爾に筆をそめらるゝ事。潛遁あまたあり。後にその名を題せられて執持鈔。願願鈔最要鈔。本願鈔など号せらるると云 しからば後に誌したまふ願号これ多し。況んや選号をや此の書ゐ選号なしといへとも覺如上人の御製作と云ふ者の必せり疑ぶべからず。或がいわく存覺の作なりと。そのゆへは蓮如上人の聞書に常樂臺是を選ずとありといへども憚ならず。又是を選ずとは聞書を誌したまふなるべし。問此の書。覺如上人の作と云ふ例證如何。答ふ當家の淨典目錄に覺如上人の御作と云 豈に他ゐ證を求んや。徃而可レ見 図さて選者の名をのせざる事は三國に其の説あり。天竺には作者の名をおかも。眞丹ゐは南山律師より有無不定なり。因人重法は涅槃の極誡なる故に。本朝又は震旦の例にまかも。況や此の書に

〔十四〕三國ゐわたりて選者の名の有無

をいては其の名を記す事あらじ。其の故は一流安心のをもむきは。上ゐふかく佛を尊んで下に機のはからひをたてぬなり。是を以てしんぬ今いかめしく名をのせて其の徳を表せんや。能々はからひ信ずべきものをやと云云 後ゐ鈔を開て義を釋そるとは。初淨土眞宗より終りたきゝゐ火をつけぬるのたとへにいたるまでを云ふなり。此中ゐをいて諸書の例によるゐ三段あり。然ども書によりて序。正。流通の三つ具足せるあり。又序。正わつて流通なきあり。又正宗流通わつて序分なきあり。此の鈔のごときんば三段の義定めがたし。但し義分を取て云ふに。初より信せしめんがためと云ふまでは序分ゐあたり。此願を禮讃にと云ふより女人を正機とそるゐたとふるまでは正宗分。たきゝに火をつけつれば已下は流通分歟。

〔十五〕宗名の所立

○初ゐ序分ゐ

淨土眞宗の行者は。まつ本願のおこりを存知すべきなり。

問淨土眞宗とは一流の宗名なり。惣して自他宗ともに德義ゐ約して宗名を立るなり。先つ台家の意は所依の經によつては法華宗と云ひ。所尊の法体ゐよれば圓宗と云ひ。若し又能求の人に約して天台宗と云ふなり。華嚴宗。佛心宗皆な是れ如レ是例なり。應レ知（今の總名は眞宗の下に解す）

〔十六〕極樂は報化二土の中ゐ何ぞやの辨述幷四土の說

問淨土とは具ゐは清淨國土と云ふ。攝論ゐ云。所居之土無二於五濁一如二玻瓈珂等一。名二清淨土一已諸經要集ゐ云。世界皎潔目レ之爲レ淨。卽淨所一居名レ之爲レ土。已上凡そ天台に四土を判せり。一ゐは寂光土。是は諸佛の所居なり。二には實報無障导土。是は菩薩の所居なり。三ゐは方便有餘土。是は二乘の所居なり。四には同居土。是い凡夫聖人同くゐじはりて居する土なり。此中ゐをいて今わぐるところの極樂淨土い。何れに攝そるぞと云ふゐ。諸師多い方便同居の二土の中なりといへり。此等は超世無上たる別願不共の淨土なる事をしらざるがいたそところなり。曇鸞。道綽。善導の妙釋ゐよるに。極樂は報身報土なり。且一家善導の意によるゐ。玄義分に云。問曰彌陀淨國爲一當是報是化。答曰是報非レ化云一何得レ知。如二大乘同性經一說一西方安樂阿彌陀佛是報佛報土又た無量壽經ゐ云。法藏比丘在二世饒王佛所一行二菩薩道一時。發二四十八願一一一願言。若我得レ佛十方衆生稱二我名號一願レ生二我國一。下至三十念一若不レ生者不レ取二正覺一。今既成佛卽是酬因之身也。又た觀經の中の上輩の三人。臨二命終時一皆言下阿彌陀佛及與二化佛一來中迎此人上。然報身兼レ化共來授レ手。故名爲

〔十七〕眞宗の名義並お多義の說

レ與二此文一證故知是報已今此釋のこゝろは同二性經一は正く是極樂は是報土と云ふの證文なり○壽經と觀經とい文を引て道理お約して證をとりて○今の淨土は報身報土たる事をしらせ玉へり○然お諸師多くは極樂を化土と云ふ事は○五乘ひとしく徃生して凡聖同く居せるか故なり○爰を善導判して曰く○問曰彼佛及土既言レ報者○報法高妙小聖難レ階○垢障凡夫云何得レ入○答曰若論二衆生垢障一實難二欣趣一○正由二託下註二佛願一以作二強緣一○致レ使二五乘齊入一○所レ詮諸師おやまりて化土と云こと五乘佛願お託して徃生する事をしらさるが故なり○今安心決定の行者おをいてハたとひ十惡五逆の罪人なりとも○又は五障三從の女人たりと云ふとも○佛願に依託するを以の故お○やすくと報土に徃生するなり○故に所期を擧て淨土とは云ふなり

〔八〕眞宗とは正く當流宗旨門の德名なり○然お淨土門の流義せち〳〵に派たりといへとも○眞宗とつのり玉へる事は元祖善聖人の開基し玉ふの名なり○但し眞宗の名義捨劣得勝して段々是ある事なり○一に云○宗密盂蘭盆經の疏に云○良由二眞宗未レ至一周孔一且使レ繫レ心○此てゝろハ佛教いまた眞丹お來らざれば○先周公且孔子なんどの儒道に心をかけて道を行ひしが○天竺より眞宗たる佛經の來りしより周公孔子の書をば學せざるとなり○此ときは如來所說の一代諸經をさして眞宗と云なり○然は外典の經書をハ邪と云ひ假と云ふなり○齊朝の大衍法師四敎を立て如來一代の說敎を攝せ○一には因緣敎○二ハは假名敎○三にハ不眞敎○四ハは眞敎已今眞敎を以て眞宗と云ふなり○此の師のごときんば權門たる法相宗を眞宗と云ふなり○又者闍法師のごときんば六宗を立て一代をさむ○一ハは異執を以て因緣宗とす○二にハ成實を以て假名宗とす○三には大品大論を以て誑相宗とす○四ハは涅槃及ひ華嚴を以て常住宗とす○五には法華を以て眞宗とす○六ハは大集を以て圓宗とすと已上此は竟夫乘を以て眞宗とす○此等に眞宗の名をゆるす事は唯是れ宗旨門建立の說にして○如來の本意たる眞宗ハはあらざるなり○今ま正く淨土門を眞宗と云事は○彌陀の本願たる念佛の法門を以て眞實の宗旨とは云ふなり○其の故ハ釋迦如來○無勝淨土をいでゝ○閻浮同居の塵ハまじはり玉ふ事は○唯彌陀如來の本願海を說んがためなり○經お云○如來以無盖大悲○矜哀三界○所以出興於世○光闡道敎○欲極群萌○惠以眞實之利己上抄主聖人は如來所以興出世○唯說彌陀本願海と此のごとくより○思ふに出世一代の眞宗と云は○念佛の一法おさはまり候ふな

〔十八〕宗の字義付たり字の三義の細釋

り○されば眞宗の據と云は卽ち出世の本懷たる惠以眞實之利の文是なり○此文のさすところ念佛の一法たる事あきらけきものをや○是を以て善導は眞宗難レ遇との玉ひ○五會法事讃に念佛成佛是眞宗と釋せらるゝなり○其家にをいて元主尊重とするを宗とするなり○靈芝の云○宗は是れ主の義一經之主矣○戒度の聞持記ゐ云○以レ主釋レ宗乃有三義○一者獨尊義天無二日國無二王故○二者統攝義如二綱之綱一如二裘之領一○三者歸趣義星必拱レ北○水定朝レ東故○今經之主備三玆三義一講者臨レ文詳而說レ之已いわゆる念佛ゐは此の三義をそなふ○故ゐ宗主を以て眞宗とは云ふなり○凡そ三義のこゝろは天ゐ二つの日なく○國にゐ二りの王なし唯一獨尊なり○念佛ゐ一切三昧の中の王ゐして肩をならぶる法なき故ゐ獨尊と云ふなり○又網の大づなをうごかせば○あらゆる網の目うごくなり○裘のくびそでを引たつれば裘みな擧るものなり○一聲南無阿彌陀佛となへわくれば○諸善萬行うごきわたるなり○是を統攝と云ふなり○又た北ゐ星ゐり星の王たるを以ての故ゐ○もろ〳〵の星是にむかふて禮をなすなり○大唐は東の方の地形ひさよを

〔十九〕行者に自他二流の別あるの辨

以の故ゐ○もろ〳〵の水東ゐゐつまるなり○念佛ゐゐいあらゆる功德のをさまりたるを歸趣と云ふなり○如レ是德義をそなへたる念佛を以て宗主ととるを眞宗と云ふなり 行者とは念佛を行ずる者を行者とは云ふなり○道生法師云〳〵○淨土行者行到二淨土一矣○行者とは自力他力能行所行のかゝりある事なり○凡そ三世の諸佛に自行他行あり○自證明宗にくらければ他を益するゐ由なきのことわりなるにより○先つ自の開覺をとけ玉ふを自行と云ふなり○さて此の自行成就の上ゐ權智悲門に下て敎法を他ゐあたゑ玉ふを他行と云ふなり○此の他行を行ずるについて○機のかたゐはげみをなして勇猛ゐ行ずるなり○是を自力の行とも能行とも云ふなり○是は聖道門ならびに定散自力の念佛者の上ゐある事なり○さて彌陀の御本願當流の正意と申そゝ○左にてゝ候ハず○今日本願力にもとずき南無と歸命する一念の信は○まことゐ是行者の心をおこし○如來をたのみたてまつるゐ似たれども○あなたゐ十劫已前に我等ゐ廻向し發願し玉へる行を○今行ずる故ゐ自の行ゐはあらず○唯これ他力の信行なり○されば行者のよからんともあしからんともはからふ事ゐは候はず○唯如來の御方より南無阿彌陀佛とたのましめ玉ふ行なれば自然とは申そなり○是を他力の行とも所行とも云

〔二十〕前後所知の要述

ふなり○今淨土眞宗の行者とい○他力所行の行を行ずる人を行者と云ふなりと云 ☒先づ本願のをこりを存知そべきなりとい○先知とは眞宗の行者ゐの正き御そゝめなり○此のすゝめは儒釋兩道ゐある事なり○大學ゐ云○物有二本末一事有二終始一知レ所二先後一則近レ道○このこゝろは萬の事ゐわたりて前後あるなり○先ゐすべき事を後ゐし○後にそべき事を先ゐするときは物ごとに成就する事なし○儒の道も正く勤めをこなはざれぞも○三綱領の前後を能くわきまへ知ば○はや道にちかきなりといへり ☒我れむかし比丘たりしとき○居士あつて大會をまうけて一切の人にはぞこしぬるを見て○此丘貧なるを以ての故に○彼の大會の處をのそみて行けるゐ○途中ゐ大なる橋のありけるをわたりけるが○此橋の上ゐをいて多の人の往來するを見て○人々ゐ問て云く○此の橋をば何と云ふ山より來れるや○又此の橋の材木ゐ何と云ふ山より來れるや○又此河の水上ゐ何といふ國○何と云ふ山より出きたると問ふほどに○日も漸暮ゐ及ぶときに○智人あつてかたりて云く○居士汝ちを請に何ぞ先づ至るべきところゐいたらずして益なき事に日をくらすぞといはれて○彼の比丘會處ゐいたるといへり（方等陀羅尼經に見えたり）是等も先づそべき事の後ゐしたるなり○爰にをいて當流門人たらん行

〔廿一〕愚痴の居士無益の事ゐ日をくらすの述

〔廿二〕法藏四十八願ををてし玉へるの因緣

者ゐをいてハ○先づ本願のをこりを能々聽聞して信を領解せらるゝこと專要なり○御本書に言レ聞二佛願生一起之本末一無レ有二疑心一曰レ聞との玉へるも○今此こゝろばなにてあるなり ☒さて本願のをこりといふハ○或とき釋迦如來五根ゐよろこばしき姿をあらはし玉へるを○阿難是を見て問て云く○今日如來の御すがたつゐに見たてまつる事なし○我今はかり思ふに過去か未來か現在か諸佛を憶念し玉へるとなり○阿難のい汝ち一分の智見を以問ふ歟○又諸天人來りて汝にをしへて問たてまつるなり○ときに佛○阿難ゐ告玉ハく誰をしゆるものもなし○唯た我が智見を以て問たてまつるなり○ときに佛○阿難ゐ告玉ハく○過去久遠無量不可思議無數劫のいわしにゐ佛○世にいで玉へり○即ち定光佛と云ふなり○さて此の如來滅度し玉ひて○次に佛出世ましま○世ます○是を光遠と云ふ是又滅度をとり玉へるなり○如レ是次第ゐ佛出世して五十三佛をとをさて佛け世ゐ出玉ふ○其の名を世自在王佛と申たてまつりにけり○其のときに國王あり○龍珍王と云ふ○世自在王佛の說法を聞て無上菩提心を起し○國をもすて財をもすて王位をもすてゝ出家し玉て○其の名を法藏と云ふなり ☒法藏とは所聞の法敎護持して失せずと云ふて○一たび法を聞て忘失せざる事○庫藏の

ものを失せざるがごとくなる故に法藏と云名をつかせ玉ふなり。此のとき高才勇哲興世超異と云ふて。世の人ゐすぐれたる才智才能たるなり。さて世自在王佛を禮し佛足を稽首して云く願くハ佛。我ためゐひろく經法を說玉ハれ。我說のごとく修行してもろ〳〵の有情の生死苦惱の根本を稅すく嚴無量なる妙土をとりをさめ。我れ卽成佛して

〔廿四〕精進修行のための寶珠をもとむるの譬說

ハんとなり。自在王佛のの玉はく。我れ佛王をしゆるゐ及ばず。汝ぢ一分の智力を以てしるべしと（このこゝろは法藏の志の原源をしらんためなり）法藏。自在王佛ゐの玉はく。諸佛淨土の境界深廣にして我が智の及ぶところゐあらず。唯ねがハくハ廣く諸佛如來の淨土の行相を說玉ハれ。我聞をハらば說ごとく修行し願望を成就し滿足せんとなり 爾とき世自在王佛法藏のこゝろざしの深き事をしろしめして。先づ法藏のためゐ一つのたとへを說ての玉はく大海のあらんゐ其の海底ゐ寶珠のありしゐ。一人してはかりがたしといへども劫をつくして事ひさしきときは。つゐに底をつくして彼の妙寶珠をうるがごとく。若し人とありて至心に精進修行して佛道をもとむるゐ。何れの願か成せざる事あらんや。汝も此こゝろざしゐて佛道をもとめよとありつて 卽。世自在王佛。法藏のためにひろく二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡及び諸

佛の報土化土の相こと〳〵く現してあたへたまふに。法藏一々ゐ所現の淨穢の諸相を見て。無上殊勝の願ををこして世自在王佛のみもとを立さりて。しづかなるところゐ五劫が間安坐して思惟し玉へり。其の思惟の相ハ二百一十億の佛土の中ゐ。善をばならひとり惡をばならびすて〻本願とし玉へり。是選擇本願とは云ふなり。其の願中の所詮は一切善惡の凡夫聖人ゐわたるといへども。願中ゐは凡夫を以て本とせり。是を元曉の本爲凡夫兼爲聖人といへると加才も釋し玉へるなり。然は法藏五劫の御思惟は。十方三世の諸佛の本願ゐなきところの凡夫を。やす〳〵淨土門に引入し玉はんの願躰なり。如レ是の相をよく〳〵工案まし〳〵て。又世自在王佛のみもとに立かへり。此丘白佛唯垂聽察如我所願當具說之とありつて。法藏比丘世自在王佛ゐの玉ハく。我のぞむところの本願ハ是なり。よく〳〵聞めせと云て。初め無三惡趣の願よりをはり得三法忍の願まで。かたり玉へり。さて是より御修行ゐをもむかせられて。兆載永劫の難作能作難捨能捨の御苦惱ましく〳〵て。一願成就していハ凡夫往生のため。一行滿足ましく〳〵ては衆生成佛のためなりとて。願行ともゐ淸淨眞實の心をもて成就ましく〳〵て。今日の阿彌陀佛と云ふ覺躰といならしめ玉ふなり。此とき介諸衆生

〔廿五〕四十八願の中に勝劣の辨

功徳成就と云て。一切衆生に願行ともにあたへ玉はるなり。是によつて一切衆生本願力にたすけられて淨土ゑは往生をるぞと。阿彌陀如來の因行果徳のはじめをはりを聽聞し存じぬるを。眞宗念佛の行者の先。用心にあるべき事なりとの玉へり。是ハ勸化門のをもむき聽聞そべきの次第を初にの玉へる。惣標の詞なるべとし云。

弘誓は四十八なれども。第十八の願を本意とす。餘の四十七はこの願を信ぜしめんがためなり。

上ゑ本願のをこりと云て。爰ゑ本願の名數をあぐるなり。第十八已下ハ願中にをいて願体の勝劣を辨ずるなり 〆是ゑついて。第十八の願をば王本願と云ひ。殘る四十七の願をば臣下の願と云ふとたとへ玉へり。又ハ第十八の願は生因念佛の願と云へり。聖人の至心信樂願爲因との玉へる是なり。四十七の願ハ第十八願中上。唯明下專念彌陀名号得上レ生矣。

け玉へるなり定善義ゑ云。如下無量壽經四十八選擇集に云。凡四十八願皆雖二本願一。殊以二念佛一爲二往生規一。故善導の釋に云。弘誓多門四十八。偏標二念佛一最爲レ親。人能念レ佛佛還念。專心想レ

〔廿六〕弘誓の惣別の二意

〔廿七〕

〔は〕佛佛知レ人已。故知四十八願之中既以二念佛往生之願一而爲二本願中之王一也矣。此等のこゝろを以て思ふに第十八の願にハ十方衆生とあつて。口稱念佛の行人をば一機ももらし玉はぬを以てなり。善導。法然の御こゝろ皆以て如レ是。其外諸師のこゝろは用捨あるべきものなり。今更親鸞眞佛の領解のこゝろ。善導法然と符節を合たるがごとくにて一毫もたがふ事なしとしるべきものなり 〆弘誓とは天台弘決に云。弘者廣也誓者約也。釋名に曰。誓ハ制也矣。是ゑ惣別の二つあり。度斷知證の四弘誓願あり。是は一切の佛菩薩通惣してをこし玉へる是を惣願と云ふなり。又諸佛別々ゑ願ををこし玉ふ是を別願と云ふ釋迦の五百の大願。藥師の十二の上願等是なり。今は是彌陀の別願をさして弘願とハ云ふなり。されば惣願ゑてもあれ別願ゑてもあれ。勇猛精進の行ゑあらずんば成就しがたきなり。梵網の古迹ゑ云。雖レ發二大願一若不レ要レ心串習之惡難レ可レ棄之。傾レ貝酌レ海潤レ羽灑レ林獲レ珠感レ帝之至莫レ不レ由二於誓願一。是故制二立要契之戒一。已此のこゝろはたとひ大願ををこすと云ふとも心に必ずとちかひを立ずんば成ずる事あらず。貝を以て海をくみ。羽をうるをして林火をけす事あらじ 〆大施太子と云ふまし〳〵ぬ。國の人民の貧苦ゑなやまし

大子太施の緣

されて○朝夕をすぐしがたきをわれれみ玉ひて○海中に入て如意珠を採得て國民のたすけとし玉へり○海神寶珠をうははる事をなげきて○太子ひる寢し玉へる隙をうかゝうて龍宮に取かへるなり○太子目さめてをどろき○瞥をたて〻大海を抒はして珠をとりかへさんとて○一つの貝を以て大海をくみて○其の海水を他須彌世界ゐすつるなり諸天○是を見て問て云く○汝いかんしてか大海水を汲つくさん事あらんやと○太子答て云く○生〻生ゐ休ずんば何そくみつくさゝる事なからんやと○諸天其の精進不退なる念を聞て○神力をくはゑ助くむ故ゐ○海水半分ゐなりぬ○龍神是を見て今はかなはじと思ふて○珠を人界にかへしぬるとなり（天台弘決集解等の意なり）

〔廿八〕雉野火をけその緣

○昔○野火ありて林をやく事あり○此の林の中ゐ一つの雉あり○林の焚うせん事をなげきて水中ゐ飛入て己か羽をうるをして來て林中の大火をけさんとす○火は大にして水はそくなし往來にくたびるれとも少も苦とせざりき○天の帝釋來て問て云く○汝ち何等をかなしやの雉答て曰く我れ此の林のやくる事をすくう此れ即ち衆生をあはれむ故なり○我ゐ身力あり云何か懈怠のこゝろをおこして此の火をけさるゝやと○帝釋問て云く○汝いかゐ懈怠なくけすとも幾ときゐかいたるべきと○雉の云我れ死するを以てかざりとせと云ふ○天帝の云○汝か心ろ爾といへとも誰か證據とし知んやとありしかば○雉即ち誓願をたて〻乳が心まことにしていつはりならずんば火即ちきゆべしとなり○是ゐよつて淨居天菩薩の弘誓をしりて○即雉のために火を滅なり○古より今にいたりて此の林火のためゐやかるゝ事なしといへり（智度論の十七にあり）此二件のたぐひを弘誓願といふなり是等はみな是諸佛誓願の相なり○況や今日阿彌陀如來の誓願い諸佛起發の大願なり○少緣の事ゐはあらざると知玉ふべきものなり

〔廿九〕彌陀本願の名數の多少

○四十八といふ譯人の意樂にある事なり○如來會と無量壽經とゐは四十八願なり○平等覺經と大阿彌陀經とゐは願を二十四大乘莊嚴經には三十六願を擧玉へり○一準ならざるをや○今は唯康僧鎧の譯經ゐしたがひて四十八願と云ふなり○十八願とは古來よりの不審せるやうは○此願は加來誓願の中の樞要なり○故に王本願と云ひ○或は此願の念佛を一切三昧の中の寶王ともはめしめ王ふなり○爾は第一にも願せず○又しからずば願のをはりにもをかずして○第十八番目の願にちかひ玉ふやとなり○之を答ふるとして色々ゐ所標を以て解せらるゝ事多かりき○恐い私の料簡にして依用にたらさるものをや○一般師は生起次第ゐ約して判せり○正等ゐして此義よろしき

をやと云 ㊀四十七は此願を信せしめんがためとは。敎行證無量壽經に云。法藏比丘在二世饒王佛所一。行二菩薩道一時發二四十八願一。一々願言若得レ佛十方衆生。稱二我名字一願レ生二我國一。下至三十念一若不レ生者不レ取二正覺一。已上六要鈔に云。一々者問所引文者第十八也。一一之言其義如何。答。第十八願爲二之願王一。是卽衆生生因願故餘四十七皆欣慕願。一一願中隨一隨二有二欣慕機一。發二願生心一一一可レ歸二生因願一。故以二一一願皆不一レ可レ離二第十八願一。故言二一一而引二此願一耳有レ以。已上此本末の釋のごとくるを以て思ふに四十七の願ありといへども。つねには第十八の願を結歸して往生をとくるなり。凡そ網をはりて鳥をとるに一目を以得事はなし。多くの羅の目なければ又鳥を得事なし。然ども鳥をとるところは唯一つの目にかゝるなり（准南子に出たり）今も亦しかなり。四十八の網の目ありといへども。正く往生淨土の網の目は第十八の願の一目をかぎり候なり此願を信とは凡そ信とふ疑ひ對するの言はなり。故に一念の疑心なく本願念佛を信じて往生一定と存ずるを云ふなり。されば信の字を人と言との文字をわかせて信の一字となせり。然ば人の言におまかせてうたがはさるご信とは云ふなり。故に信をばまかするとも。まことゝも訓ぜるなり。いふこゝろハ阿彌陀如來。第十八の願おもひ玉へるやうは。十方の衆生我がをしえのごとく信せん行者。若し淨土に往生せずんば。我阿彌陀と云ふ佛にならじと。若不生者不取正覺のちかひのましますを今日。是を聞て露はぶもうたがひなく信ずるを云ふなり。爰を飯命の一念と

〔廿一〕法然上人決定往生の信相

〔廿二〕

はいへり。よつて元祖聖人。飯命の兩字を釋して本願招喚之勅命也との玉へり。此れ卽ち此の願力の信おもよつて今ま第十八の本願念佛を信ずるなり。されば此の信心おもよつて口に南无阿彌陀佛といふ御名は唱いたさるゝなり。是を願力の信心おも名号を具足そとはの玉へるなり。此ときを往生決定とは云ふなり ㊀法然上人のの玉へく。決定往生の信たゝとて人ごとおゝ欺事ありき。いはれなき事なり。凡夫の心は決定なし。決定へ卽ち名号なり。されば決定往生の信たゝずとも口にまかせて名号をとなへなば往生そべし。往生といふはよるべからず。唯名号おもよつて往生せるなり。決定往生の信をたちて往生すべしといへるへ猶。心本おかへるなり。心本をうちそて〳〵一向に名号によりて往生そとこゝろうれば。我決定の信もをこるなり 已 ㊀大凡そ信を沙汰そるおも自力他力のかはり目ある事なり。

自力の信とは初より信にいたる事にいわらず。先づうたがふて其の上に信にもとづくなり。たとへば本來自性たる個々圓成の佛性をさとりしならんと欲するときわ。頂め思ふやうは迷悟凡聖元是二つなり。いかにして一味の理にいたらんとうたがひ。又煩惱は八万四千わ及ぶ。何として斷盡し理を證する事あらん。なんぞと云て様々にうたがひををこして此のうたがひのつきはてゝ後。まことの信にもとづくなり。是はうたがひを以うたがひはなれて信心の人となるなり。是は聖道自力の信と云ふなり。今此信は通途自力の信にはあらず本願他力の信心なり。此の信は得やそき信心わて候。なも。多くい自力執情の機なる故わ。此信になりぬる事かたし。聖人の一代諸經の信よりも弘願の信樂なをかたしとの玉へるも此意なり。さて今ま弘願他力の信と云ふ事。別の子細は候はず。初より疑のこゝろなければ又信ずると云ふ念もなし。唯ひとへに思やうは我等は一切諸佛の願行ふもも。化導にもはづれたる身わてさふらふとも。阿彌陀如來の不可思議の願力にたすけられて。淨土わ往生する事のうれしやかたじけなやと。已か身わ引うけて念佛申し居たるを他力の信心と云ふなり。此即願も行も自のなをところわあらず。唯是れ他力なりとあるも此ことわりにて候な

り。如レ是たぐひを。今の第十八の本願を信する念佛の行者とい云ふなりと云云。

○二に章を開て文を釋す。此より已下女人を正機ととるわたとふるなりまでわ正宗分なり

この願を禮讚に。釋したまふに。若我成佛。十方衆生稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺といへり。

已下は是正宗分。於レ中初より信すれば佛躰わかへり稱すれば佛躰にかへるなりまでい。正く安心決定の義なり。自力他力より女人を正機とするまでい別して因と果との義をあらはせなり。此願とは上の十八の願をさして云なり。禮讚とは具わは往生禮讚と云ふ。善導大師の五部九卷の壁一なり。問直わ本願の文を擧ずして。わつらはしく取意たる人師の釋文を引玉へるや。答禮讚を引玉ふ事深意あると見えたり。私に是をかんがうるわ。經文幽なるときは。論師人師の賀顯し玉へる事は尋常の茶飯たるものなり。今も亦爾なり。其の故い文中の乃至十念とあるを諸師さまくに沙汰せらるゝなり。彌勒所問經わは慈等の十念を以て淨土わ往生せりと。是を以て今の願の十念なりと心得らるゝ人もあり。又請觀音

經の意ゐよつて十息を以て十念とすといへり○此こゝろ毎日朝早早に西ゐ向て正しく立て掌をあはせ○聲をつらねて南無阿彌陀佛○南無阿彌陀佛と一聲をつゞくす間を一念と云ふ如レ是する事○十度そるを十念と云なり○或は西方に向ふて十たび指を折て專念そるを十念と云なり○或は此十念は觀念の念佛なりといへり○故に其相定がたし爰に善導大師念佛三昧發得し玉ひて佛意をさくり玉ひて○本願の十念は口に唯南無阿彌陀佛ととなふる戞なりと○諸師の謬解をあらためて稱我名號下至十聲と釋し玉へり○此義をあらはさんためゐ直に本願をあげずして禮讃を引玉へるなり○若我成佛とは本經には設我得佛とあり同なりや異なりや○謂全く一同なり○設とは若なり○とも不定のことばなり況や如來會ゐ若我成佛とあり更ゐ論そる事にゝあらざるなり○問阿彌陀如來○決定 成佛うたがふところなし何そ不定の詞をおいて若我とはの玉へるや○答 最も決定 成佛あらそうへきにあらざれとも○因位にあつて遠く佛果をさせ故ゐ若我と云て卑下の詞をおき玉へるなり○さて若我成 佛と云佛躰ゝ○自他受用の報身の中ゐは何れぞと云ふに若我は自受用身○得佛は他受用身と定めらるゝなり○問ふ此の文正く本願の取意なり○然ゐ本經ゐ至心等の三心あり○此即三 經の極要な

り○故に宗旨門の目足たりと云何の意を以て三心をば擧ざるや○答是ゐ異流ゐ會釋ありといへとも○大やうゐして其義つまびらかならず○其故は諸師のこゝろは○三心を以て唯心の義とばかり存せらるゝ故に○今畧去し玉へるなり○此三心の中に 自ら行 躰を具足し玉へるなり○されば見に三心を唯心とは見玉ゝざるなり○此三心と乃至十念と○皆是口稱 名號 不レ具三願 力 信 心一也との結へるも此等のこゝろなり○下ゐ引給へる言南无者卽是歸命○亦是發 願廻向之義の釋を以てしるべし○いはゆる御 釋ゐ○眞 實 信 心 必 具三名 号一名 號 一往見るときは○南無の二字は安心のみゐして三心にあたるなり○加樣なるときは唯心のやうなりといへとも○此二字は彌陀成覺のときに○此中に一切衆生の往生の相を具足しをさめて○今日我等衆生にあたゐましまそなり○是を發願廻向とは云なり○すてゐ往生の相の定ぬる事ゝ心行相須にあらざれば成せず○されば十劫已前ゐ往生 治定のそがたをあたゐたまはるを發願廻向との玉へるは此南無の中ゐあらずして何ぞや○此固實あるを以ての故ゐ稱 我名号下至十聲の釋義を以て至心等の三心と乃至十念とゝ皆是口稱の行躰たることをしらせ給へる妙釋たり仰でなを信ぞべきなり○されば淨土門のをしゐおは稱 名念佛のほかは候は

〔廿四〕法然聖人悲母につかはさるゝ安心の消息

ず 〇法然聖人母御前への御消息に云。遊俗等思ふべし。我身ゝはかしこき事ゝ一念もなし。佛の御願ゝよらずばかゝるあさましきもの〻往生の大事をとくべきやと存じて。阿彌陀佛の悲願をゝふぎ他力をたのみて稱名をいたすべきなり。是を本願をたのむとは云なり。すべて佛たすけさせたまへると思ひて。名號をとなふるゝもぎたることはなきなり。此ほかによき事をおもふともそれも憍慢のこゝろなり。わしきことを思ふとも是また妄念なり。すべからく佛の御ちかひをたのみて往生をいのるべきなり。佛のちからをたのむといふは。心のうちの觀念にもあらず。唯本願に歸依して名號をとなふるをとなはち本願たのむとはいふなり。稱名のほかゝ決定往生の正因なし。稱名のほかゝ決定往生の正行なし乃至稱名のほかゝ正業もなく。觀念もなく。信心も智慧も正念も三心も四修もなきなり。故ゝ佛の本願も稱名を本とし給へり。厭離穢土のこゝろも稱名の中ゝあり。法藏菩薩のむかしの他力本願のゆへに。最もあふぎたてまつるべし。若これよりおくふかき事を存じさふらはゝ。今生にゝ日本六十餘州の大小の神祇のばちをかうむり。來生には彌陀の四十八願ゝもれさふらひて无間地獄にをつべくさふらう云〻。問稱我等の二

〔廿五〕念即是唱の辨述

句の釋義は唯是自解佛願の妙釋とのみ意得るや。又一家よりどころありて釋成し給へるや。答三昧發得の內證よりおらはるゝ釋義たりといへども。元是聖教量ゝ見ゆる事なり 問すでゝ願文ゝ十念とあるを。成就の文ゝ諸有衆生聞其名號乃至一念とあり。又寶積經ゝは聞我名已と說玉ひ。平等覺經ゝは聞我名字とあり皆是名號或は名字等とあり。口稱念佛ゝあらずして何ぞや。況や本願念佛を覩經ゝは令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛と說玉へる。是等の文證あるときは更ゝさうところなきなり。問文證必然たりといへども十念と云ときは意念なり。聲稱は是口業なり。心口各別なり何を以てか十念を十聲とは釋し玉へるや。答思風發言胸臆二言宣流二唇齒一なんどゝあつて思ひむねゝあるときは。必す口ゝあらはれていふものなり。故ゝ知る意念は是口稱なることを。其上。懷感禪師。三昧發得して念聲是一を釋し給へるゝ。大集經の大念大見佛。小念小見佛の文を引て大念は大聲。小念ハ小聲なりと判せり。善導懷感ともゝ三昧發得の師なり。豈に是謬解の釋義あらんや。夢々うたがふべからざるものをやと云 〇名號とハ名と號と其意少し異あり。華嚴の大疏ゝ云。召レ躰曰レ名 表レ德曰レ號 名別號通。一切諸佛通具三十號一名二釋迦一尊則不

〔廿六〕名号両字の沙汰

レ同。故ニ隨レ機就レ德以立二別名一。既表レ德之名則亦名亦號。依主釋也。已上この義も今の意ゐ通ずといへども。今家聖人ゐ一義あり。謂く名の字は因位のときのなを名といふ。號の字は果位のときのなを號といふ。已上今をかんがうるに。十劫正覺の曉天ゐ因行の萬德を成就ましまして。果位ゐのほり玉へるをこそ南無阿彌陀佛とは申し候ふなり。然ゝ因行果德一致なる南無阿彌陀佛を名號とはいふなり。下至十聲とゝ乃至十念と全く同じきなり。其相。選擇集ゐつまびらかなり。十聲とゝ必ず十を以てかぎりとそるにあらず。上を云ふときは一形をつくすといひ。下を云ふときは十聲一聲等ゐいたるなり。故ゐ乃至十念乃至一念と云て。群にはぶかぎりいなし。故ゐ乃至と云なり。若不生者不取正覺は誓なり。若我成佛は願なり。首尾合して彌陀の誓願とは云なり。正覺とゝ正は本覺なり。覺ゝ始覺なり。始本一致なるところを正覺と云なり。

この文のこゝろは。十方衆生願行成就して。往生せばわれも佛にならん。衆生往生せずば。われ正覺をとらじとなり。かるがゆへに。佛の正覺は。われらが往生するとせざるとにあるべきなり。

〔是ゝ所引の禮讃の文義のを解して勸進し給るなり。十方衆生とは本願の萬機普益の義をあらわせる心なるべし。其故ゝ十方とゝ東西南北四維上下なり。されば十方のことばには一方としていまするゝ事なし。さて衆生と云ふときは六道四生の間。いきとせいけるもの一つとしてもるゝ事なし。如レ是十方衆生と云て一機もすてゝ濟度し玉ふ事は。さらゐ諸佛ゐなきところの本願なり於レ中人間ゝ萬物の靈生ゐして最も尊貴なるものなり。此の最尊たる人間にをいても。賢愚貴賤老幼男女ゐいたるまでさま〴〵ゝり。機分いろ〳〵ゝりて濟度しがたきものなるに。況や地獄餓鬼畜生等ゐいたるまで殘さず化益し玉ふ。是を十方衆生とはいへるなり其の證をいはい〕

〔古。潭州に人ゝり。一の鸛鶴をやしなふ。此鳥ゝ其の形鴨に似ていなはだ賢し。其の舌のはしをきりてをしゆるゐ言語を以それば。能く人語をまなびて眞似そるものなり。たま〳〵僧を見るに此僧阿彌陀佛を稱ふ。此鳥是を聞て共ゐ阿彌陀佛を念するなり。此人をもるゝらく念佛そる鳥なりとて彼の僧にはぶこしぬ。後にいたりて立ぶこゝろに亡そ。此僧をもへらく是は通途の鳥にあらず。念佛功德の鳥なりとて。小棺をつくりて埋ぬ。幾くならざるゐ塚中より一つの蓮華生せり。僧ゐやしみ思て塚を發て見るに。小棺の

中より出たり○さて小棺をひらいて見るお鵠鶴の口中より生せり（龍舒淨土文自信錄に見ゐたり）明お知りぬ十方衆生の誓益いつはりならざるをや 願行成就とい○決定往生の信因の相なり。いはゆる願あつて行なきは其願むなしくして由なきなり○人あつて佛果を成せんと願ばかりにては○其の願むなしくして成ずることなし○又何の分もなく行法を修するい其の所期の願なき故お○行たゝひとりお○して至ところなしたとへば牛よく車を挽といへども御者と云ふて牛つかひなきときは思ところにいたることなし○牛の行は願なり御者をば行にたとふるなり（智度論の七に見ゐたり）故に願行具足せざれば佛果を成ずる事なし○是いこれ聖道淨土通用の法門なり○今淨土門お願行具足の相を明に○玄義分に云○今此觀經中十聲稱佛即有二十願十行具足一云何具足○言二南無一者即是歸命○亦是發願廻向之義○言二阿彌陀佛一者即是其行○以二斯義一故必得二往生一（具には下にいた）此南無阿彌陀佛お十願十行具足せるにつきて○此願行をわけて沙汰そるときに○異流には願は機の方にあり行は佛の方にありといへり○當流聖人の御相傳お○は願行ともお佛邊おゆづりて見玉ふなり○故に今の願行成就わ○一往願わ機をわ

げまとに似たりといへども○功を本おをして見るお佛意の願行なり○是を願行成就と云なり○具おわ次下にいたりて知べし○問阿彌陀如來衆生の往生の定不定を以て佛邊の正覺の成不成をきわめ玉へりと云事○今さらかお凡夫往生の相と又彌陀の成等正覺の相といかんか心得しるべきや○答選擇集に此問答ありといへども今更文理を以ていはゝ○四十八願は法藏比丘饒王佛のみもとにて因願をかたり給へる分齊お○て。成就の相おさらかならざるなり○ときに釋迦出世し玉ひて一一本願成就と云がふべきおあらず○彌陀の成覺わ是決定往生○又決定たる事おきらけきものをや。

しかるに○十方衆生いまだ往生せざるさきに正覺を成することは。こゝろへがたきことなり。しかれどもわれらが往生を。すでに。滿してわれらが往生にかはりて。願と行とを。圓

囚この一節わ問答なり○はじめよりしかれどもよりしたゝめ給ふまでわ其の答なり○但し下おいたりても此答の意氣をのべて○所詮わ第十八の願

の他力易行のごとくいり。機法一体のありさまを知せ玉へるなり。先づ不審のこゝろ上ゐでに。衆生往生せずばわれ正覺をとらじとあるよりをこれり。謂く衆生いまだ往生せざるさきに彌陀すでゐ正覺し玉へり。然ば前後相違せるとの義なりさて答の意は菩薩の本意は他前自後を以せり。故ゐまづ所化の機をおげて如レ是機往生せずんば。我れ正覺ならじとあらかじめ決定の相をあらはせり。然ども佛の方に衆生の往生そべき願行をしたゝめて置給はねば。何によつてか往生することを得ん如レ是意得ねれば義をのづから明白なるをや。

十方衆生の。願行圓滿して。往生成就せしとき。機法一躰の。南無阿彌陀佛の正覺を。成じ玉ひしなり。

〆此一節ゐ上にいふところのごとく。一切衆生極楽浄土ゐ往生せずば。我阿彌陀と云はとげにならじとなり。今すでに衆生往生せしゐよつて正〳〵成覺を遂しめ玉へり。前後の會釋い次上のごとし

〆問往生とは即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍遶住處生蓮華中寶座之とおつて。此娑婆世界をさでゝ彼極樂世界に往て。蓮華の中ゐ寶座のありしに。其中ゐ生するを往生と云なりしかるに。淨土ゐ往生そるは佛果を成そるの義なり。然ば直ゐ成佛といはずして何ぞわづらいしく往生と云や。さでに念佛成佛是眞宗とおつて。此土にをいて念佛申し居たる當躰をおさへて。成佛と釋し玉へるもあるに。何ぞ淨土得生のものを成佛といはずして往生とはいへるやとなり。答是については淨土門ゐ固實のある事ゐて候なり。所詮は往生のはかに成佛なく。成佛のはかゐ往生なしとしるへし。故ゐ先哲の云く往生諸宗悟道得法異稱也と（具に別紙に記せり）

〆機法一躰とは此一句本願の正意。當流聖人の御勸化の極要たり。ことゐ此の法語の一篇の始中終。此一句をのへ玉へるなり。其故は淨土門の法流まち〳〵にわかれ。異義蘭菊ゐみだれて日々のすゝめを以て執情の美をのみつのりすゝむるなり。然ゐ此機法一躰のことわりをさたかゐをしねざるは。本願他力の旨にかなはず。やゝもそれば機のはからひを先とそる故ゐ機法一躰の釋義に〳〵らきなり。一宗元祖聖人のごときんい二尊三佛の本意にかなひ。善導法然の相傳ゐまかせて廣玉ふ法門なり。此法門にをいては。修し行ずるところは機のはからひかと存ずれとも。全く機のなすところにあらず。功をもとゐゆづりて見るゐ唯是佛願の御はからひなり。此御はからひゐまかせて念佛申し居たるは。行者の方には毛頭ばかりもはからひは候はず。全躰南無阿彌陀佛のすがたなり。爰を機法一躰と

は云なり。古人廬室生レ白いへり。此こゝろは心地の藏量をはなれて安閑無事のときは。まことに室家ゐ何もなく室室として一白色なるがごときなり。今機法一躰の行者も亦爾なり。身も心も佛ゐうちまかせて。稱名念佛せしむる行人は。五臟六腑一處とてし南無阿彌陀佛ならざることなし。是を佛躰と云なり。しかりといへとも行人の當体は凡夫の機の方なり。例せば「年の中ゐ春は來にけり一とせを去年とやいはん今年とやいはん」とよめるも是春といはんとすれば年の中なり。又冬かと云んとそれば春なり。今も爾なり凡夫といはんとすれば身も心も南無阿彌陀佛なるときは。凡身皆是佛身なり又佛身かと存ずれば。いまた是凡体なり。佛身とやいはん凡身とやいはん。更に機法さためがたきを。機法一躰の念佛の行者とい申とな り。爰を善導大師の釋に云。衆生起レ行口常稱レ佛佛即聞レ之。身常禮二敬一佛一佛即知レ之。衆生憶二念佛一者佛亦憶二念衆生一。彼此三業不二相捨一離故名二親縁一也。いはゆる本願他力に乘じて。口には南無阿彌陀佛ととなへ。身ゐい阿彌陀佛を恭敬し禮拜し。心にい阿彌陀佛を念じて身口意の三業にわたれず。彌陀を信じぬれば行者の身と口と意と。阿彌陀佛の御身と御口と御意と一同に

して相はなれざるなり。此等を機法一躰といふ云なり。但し機法一躰の本據は經の諸佛如來是法界身入二一切衆生心想中一の文なり。此文義等は下にいたりてしるべし。然に今は南無阿彌陀佛の中にをいて機法一躰の理をしらせ給へり。是亦下ゐしるせり。かるがゆへに佛い正覺のほかは。凡夫の往生はなきなり。十方衆生の往生の成就せしとき。佛い正覺をなるゆへに佛の正覺となしと。われらが往生の成就せしとは同時なり。

此一段は衆生の往生の成就しぬるとき。佛の正覺なりしを釋し玉へり。かるがゆへゐとは上をうくるの詞なり。今正く上をうくるとは佛の正覺なりし已下の詞なり。さて佛の正覺と衆生の往生と同時と云事。能能しるべし。其故は十劫已前。御正覺のみぎりの玉へるやうは我上來こころさせ本願は。十方衆生をして安々と。淨土ゐ往生せしめんとの誓願なり。是によつて五劫に思をつくし。兆載永劫の御修行ましくて。因願すでに成就して無上覺王と名のり出給ふ。此の御正覺の當躰。とりもなをさず衆生往生の相なり。爰を同時とはの玉へるなり。若し凡夫二乘なんどの誓願ならば。不決定の義もあ

るべし。諸佛法王たる阿彌陀如來の無上の誓願なんぞうたがうところあらんや。此同時の相あるを以ての故に。覺躰の南無阿彌陀佛を釋して言南無者等といへり。下おありしるべし。

佛のかたよりは往生を成せしめどゝも。衆生がこのことはりをしることを不同なれば。すでに往生する人もあり。いま。往生する人もあり。まさに往生すべき人もあり。機によりて。三世は不同なれども。彌陀のかはりて成就せし正覺の一念のほかは。さらに。機よりいさゝかもそふることはなきなり。

〔此一截の大意は。一切衆生の往生のすがたをば十劫已前。正覺を成せしめ給ふときお。如來一體の御方に成就ましくて候しが。機根お遲速の不同あるによつて。過去おをいて往生する人もあり。又は現在にして往生そる人もあるなり。又は未來おいたりて往生そる人もあるなり。如レ是機根おより。て。往生に三世のかはりは候ども。十劫正覺のみぎりお彌陀如來の一切衆生になりかはらせ給ひて。往生治定の相はあなたに成就ましくす。故お機の方にい少ばかりも往生のたねとてはなさゝいるなり。已今當とは。已は過去なり。今は現在なり。當は未來なり。三世往生の文ありいさゝかとは。聊の字なり聊は且畧の義なりとてわらましのことなり。しかれとも今は少の義に用なり。そふるとい添の字なり。添は益なりと云てます事なり。機のそふるとは機の方には往生のたねとてい少も力をそゑます。事なく。佛意の御ちからばかりにて往生するぞとなり。

たとへば。日いづれば。刹那に十方のやみ。こと〳〵くはれ。月いづれば。法界の水。同時にかげをうつすがごとし。月はいでゝかげを水にやどす。日はいでゝ。やみのはれぬことあるべからず。かるがゆへに。日いでたるか。いでざるかを。おもふべし。やみはれざるか。はれたるかを。うたがふべからず。佛は正覺。なりたまはざるかを。うべきか。うべからざるかを。うたがふべからず。凡夫の往生を。分別すべし。

〔此一截は譬およせて事をあらいそなり。其故は凡夫は理お約してをしゆるときは。共意にかなはず。

通じがたし。故に佛も法說にかなはざる機あは譬喩說を以て度し給ふ。今も爾なり。如來正覺の成不成。衆生の往生の定不定のことわり。上來ねんごろに示し給へども。機分にをいて解知しがたからん事を思召て。自前現在の境をとりて以て如來の正覺。衆生の往生の決定したる事をしめし給へるなり。

衆生往生せずは。佛にならじとちかひたまひし。法藏比丘の十劫にすでに。成佛したまへり。佛躰よりは。すでに往生をつたなく。今日までしらずして。むなしく流轉しけるなり。

此一截い如來の御方に。凡夫往生の相は成就し玉ひけるを。衆生あやまりて今日までまよひたるそと逃懷し玉へるなり。例せば大通智勝佛のとき。及ひ十六王子覆講法華の砌より。緣をむすびし衆生の。今日までまよへるがごとし

十劫成佛といふ古來より四種の十劫をおかせり。一には常演の十劫。是は三世常恒の十劫ゐして唯是無差別の境界なり。二ゐは延促劫智の十劫。是い長短自在ゐして七日を無量とし。無量を七日とせし等なり。三にゐ赴機の十劫とは。是は機の感見ゐ應してしめす十劫なり。四にい單の十劫とは。是は唯ひとへゐ

彌陀如來。我等衆生のために十劫已前に。御正覺ならしめ給ふと信しぬるを云なり。此の四種の中ゐい。當流のこゝろは何れを依用そるぞと云ゐ。多い赴機の十劫なりといへり。予かそうてん相傳の一途は單の十劫なりと云。具ゐに予が選擇本義ゐありとなり。劫といふ小劫中劫大劫と三等あり。於い中十小劫と云。十大劫と云て差別あれとも。今爰ゐは大小をば論ずべからず。唯久しき事とのみしるべし〔具には別紙にわり〕流轉とは流は漂流。遷流の義なり。轉は展轉。轉變の義なり。たとへは無始より以來。三界六道ゐたゝよひまよへる事。いやき流ゐたゝよひめぐるがごとし。唯識論ゐ云。恒轉如二瀑流一已と云ゐ。上と於二因果相續不一レ斷假二立流轉一矣。

かるがゆへに。般舟讚にはおほきにすべからく。慚愧ずべし。釋迦如來は。まことにこれ慈悲の父母なりといへり。

此一截より下。淨土の修しやをきことも信ぜらるゝなりと。云にいたりて。善導の般舟讚の文を引て。文のかをかなるところを解して。釋迦佛の恩德のふかき事を擧なり。其故い釋迦如來。此土にたび〳〵出世したまひて。彌陀如來の教化の衆生のためになりかいりて。五劫に思を

〔四十三〕佛は衆生の父母たるの辨

〔四十四〕

つくし兆載永劫の間○御辛勞おそばしぬる事を說て○一切衆生お開しめ玉ふ事○度々おて候に○其說を聞ながら信せず行せずして○空く過行事を大おいづべしとなり○般舟讃に云○大須臾にくさんをすべしやめによらいはひつにこれ慚愧○釋迦如來實是慈悲父母○種種方便發起我等無上信心○又說二種種方便一敎門非二一○但爲二我等倒見凡夫一已○この文のこゝろを釋しやわらげしめし玉ふなり○於レ中今いの初の三句をのべ玉へり○又次下の文いの下にいたりて兩度おの引玉へり○文の下にいたりてしるべし○慚愧とは唯識論おに云○云何爲レ慚○依二自力一崇二重賢善一爲レ性對二治無慚一止二息惡行一爲レ業乃至云何爲レ愧○依二世間力一輕二拒暴惡一爲レ性○對二治無愧一止二息惡行一爲レ業（已上具には法苑珠林慚愧部に見にたり）○慈悲父母といの慈悲と小と中と大との差別あり○今は佛の慈悲なる故おに大慈悲と云○慈いの與樂の義○悲は拔苦の義なり○釋迦は是三界に獨尊おして○一切衆生をば我一子のごとく思召して○三途の牢獄おくるしめらるを拔て○涅槃無爲の樂をあたえたまふを以て釋迦いの是○一切衆生のために慈悲の父母なりとの給へるなり○釋迦を一切衆生の父母と云事○佛は大慈悲を以て本とし給へる故なり○

〔四十四〕

阿含の六方

凡阿含經のこゝろおよるに○力用おに六あり○一おは小兒いの腹立ときは○氣おあはざるときは啼を以て力とせ○二おいの女人は瞋を以て力とせ○三おいの國王は常に憍慢心を以て力とし○四にいの出家比丘は能ものに堪忍するを以て力とし○五おは羅漢は常おに精進修行をるを以て力とし○諸佛は大慈大悲を以て力とし玉へり○爰に知ぬ釋迦如來も大慈悲を以て力とし給へる故おに○御身の御苦勞をもかへりみず○閻浮五欲の里おに細々おに出給ひて○種種に方便說敎し給へるなり○故おに釋迦を一切衆生のためには○慈悲の父母と釋し給へるなり○すでに菩薩の初地の聖位おのぼり給へるをすて○極愛一子地の慈悲人となれるといへり○況や佛果位にいたり○極大の聖人○何ぞ慈悲の父母ならざらんや○故に佛は一切衆生をは赤子のごとく思ふともの玉へるなり○さて佛いの衆生の父母といへる事○法華經に云○今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子已上又涅槃經云○善男子如來常爲二一切衆生一而作二父母一所以者何一切衆生種々形類二足四足多足無足○佛以二一音一而爲說法○彼彼異類各自得解○各各欵曰如來今日爲レ我說法○以二是義一故名爲二父母一已○爰おいふ父母といの釋迦一佛おかざりて判せり○然に聖人本意をさぐり得て○釋迦牟尼は慈悲の父母○種種に善巧し玉ひて○我等か無上の信心を○發起

せしめ給ひけりと讃し給へるなり。此意は釋迦出世の本懐は。彌陀如來の本願海を說んとなり。故お本意お約して釋迦彌陀は慈悲の父母と釋し給ひて。釋迦は父。彌陀は母なりとなり。此聖人の御心おもとづきて。慙愧の二字等。已下の細釋は出來るなり。

慙愧の二字をは。天にはぢ人にはづとし釋し。自にはぢ他にはづとし釋せり。

是より下。おほきにはづべしと云なりと云までは所レ引の般舟讃の文を細釋し玉へるなり。惣して此般舟讃の文を註釋せらるゝ事。是れ多といへども。皆な是れ一往の面ばかりをしるして。二尊出世の本意をしらざるなり。眞なるかな文のまゝに義をとるとは諸佛の怨なりといへる先言。此等の義なるべし。先今の一截は引文おしたがふて慚愧の二字を釋せり。

槃涅經に云く。慙者羞レ人。愧者羞レ天。是名二慙愧一矣。天台弘決お云。慙者內自愧恥。愧者不レ令二他作一。已上。此二文およつて慙愧の二字を註脚し給へるなり。さて天と云ひ人と云ひ。自と云ひ他と云ひ。實お見て知るなり。人お顯お見て知るなり。文自といたとひ他人いしらずといへども。自にをいてあやまるときは如何かかくすべきものをや。古人も心にとはゞいかゞ答へんなく

ゞといへる此類なるべし。他は本より人の知ところなり。何ぞ恥ざる心なからんや若し人として慚愧の心なからんは畜生と同じと佛の說給へるなり。

人あり。東萊といへるところの太守となつて。昌邑と云ものあり。本王密。昌邑の令となる事お揚震といへるに王密と云ものあり。本王密。昌邑の令となつて。昌邑と云ところを過行けるに昌邑の令〔守護人なり〕いへるおよつて進あげられしなり。ときお揚震はもとより清白貞廉にして。私に蓄なきを故お其身清貧なり。王密をもおらく我如レ是そふみあげられし事い。ひとへに揚震の恩賞なり。此たび報せんと思ふて黃金千斤を懷の中お入て。震の所にいたりてひそかお送なり。震か云。我君王お逸たる才能あるを知る。故に薦て令となるそなり。我か性公廉おして私なし。君王我震に何の才能ありと云ことをしらず。因て汝の金をうくる事おらしとなり。王密かさねて云く今ま夜もくれに及て誰も知るものなし。唯平に受しめ給へといふなり。震の云何そ知者なしとはいはるゝぞ。すてお天知る人と知る我知る汝ぢ知る更にかくそところなしと云て逐ふうけざるなり。王密大に恥て立去ぬとなり〔漢書に見たり〕。此等を天に恥ぢ。人お恥ぢ自に恥ぢ他お恥る人とい云なり。

なにごとを。おほきに。はづべしといふに。彌陀は兆載永劫のあひだ。無善の凡夫にかはりて。願行をはげまし。釋尊は五百塵點劫のむかしより。八千遍まで。世にいでゝかゝる不思議の誓願を。われらにしらせんとしたまふを。いままでさとらざることをはづべし。

〔四十七〕五百塵点劫の引文細釋

此一截ハ。上にハ唯慚愧の二字を註せるのみ。此おはひろうつると云おついて三義おより釋し玉へり。今ハ其ハじめなり。今爰にいたりてハ慚愧の二字ハ。別して二尊出世の正意おはおいず。聞ざる事をいづべしとなり。さて是より通途の所釋おちかふて佛意隨自の妙釋なり。心をとゞめてしるべし。大やうおしては心得がたき事なり。兆載永劫とは無量壽經おに云。於不思議。兆載永劫。積植菩隨。无量德行已。兆載とハ算數の名なり。大般若經おに云。一二三四五六七八九十。一十百千万億兆載姟垓孃。溝澗正載已上。於レ中。中間の兆と終りの載とをとりて兆載と云なり。問。如レ是なるときハ彌陀の修行ハ算數にをちぬ。其故は二乘なんどの三大僧祇劫よりハ遥に近き事なり。何ぞ彌陀如來無量劫の御修行といはんや。答是ハ先つ言辭をあらハして其久き事をしらせり。謂く兆載の二つを出す事ハ。算數の量をしらせて實ハ是無量劫なる。故お下お永劫の二字をおき給へるなり。例せば阿僧祇は六十數の數量お落といへとも。上に無量無邊といへるおて。其かきりなき事をあらハせることきなり〔彌陀經の中にあり〕

〔四十七〕五百塵点劫の引文細釋

五百塵點劫とは法華壽量品おに云。譬如下五百千萬億那由他阿僧祇三千大千世界。假令有レ人抹爲二微塵一如レ是東行盡レ是微塵。過二於東方五百千萬億那由他阿僧祇國一乃下二一塵一如レ是東行盡レ是微塵。諸善男子於レ意云何。是諸世界可レ得二思惟校計一知二其數一乎。乃至諸世界若著二微塵一及不レ著者盡以爲レ塵。一塵一劫。我成佛以來復過二於此一百千萬億那由他阿僧祇一已。このこゝろは三千大千世界の草木を。ことごとくやきて墨おつくり。扨て三千大千世界の海水を以て硯の水とし。是お筆を以て一劫をそぎて一点をくたし。又一劫を過ては一点して。此墨を点しつくしたるを一の塵点劫と云なり。如レ是する事。五百遍なるを五百塵点劫と云なり。八千返とは。釋迦此土出現の數を云なり。梵網經おに云。吾今來二此世界一八千返。爲二此娑婆世界一主二坐金剛華光王座一已。さて釋迦出世の數を八千返とかぎる事。其故あるかと云ふに。是古來より未決なりと云てさだかお極めたる事なし。予是をかんかうるお。唯是大數

〔四十八〕釋迦八千反の往來幷に八の數は極滿おとるの述

〔四十九〕公明儀牛ゐ對して琴を蝉ず

ゐ約して限量ゐはかざるべからず。其故は八と云は滿數ゐとる事。易の納甲の傳ゐ九は。陽の極滿なり。九の陽數うごけるが。退て靜なるときは陰數八となるなり。是を八の極滿と云なり。されば三河の國の八橋と云も。唯橋の數の多きに約して滿數をとりて。八橋といへる例のごとくならんのみ。世ゐいてゝかゝる不思議とは。此釋義明めがたし。其故は釋迦の出世し玉へる事は幾度ゐもせよ論ずる事なし。其中ゐ一切衆生の機分無量なるべし。其中ゐ彌陀有緣にあらざる機ゐ對して說ときは。其詮なかるべし。〔四〕いおしお魯の賢士に公明儀と云あり。牛に對して琴を彈そるに。淸角の操なるを弄せしかば。牛の意に應せざるを以て牛何ともをもはそして。唯食をくらふて居たり。是は琴の音を牛の耳に聞ざるにいあらざれども。己が耳ゐ合ざるか故なり。さて轉じかへて蚊虻の鳴聲。母牛の子牛に乳を飮するの鳴弾せしかば。尾をふりてをどりあがりて琴の音を聞なり。是は耳にかなふが故なり〔事苑に見たり〕今佛出世し玉ひて。機ゐ應ぜざる彌陀の敎願を說玉はゝ。牛に對して淸角の操を弄するがごとくならん。此義を答ゐ。佛佛の出世は更ゐかかる事なし。法華經に云。如三三世諸佛說二法之儀一式。我今亦如レ是說二無分別法一已。一家善導の釋に云。一切如來設二方

便一亦同二今日釋迦尊一已此等の文によるに。三世諸佛の出世化導の儀式。少もたがふ事なし。況や釋迦一佛の化導にをいて何のかはる事あらんや。いはゆる佛佛の出世ごとに五時の次第あり。聖道門淨土門の差別あり。故に知ぬ釋迦如來の八千返の出世ごとゐ。阿彌陀如來の往生願不可思議なる事を說玉はざる事なし。是によりて度々の釋迦如來の出世に逢ぬる時節もあらんに。今まで聞ずして流轉せし事を。大になげきはづべしとなり。

機より成する。大小乘の行ならば。法はたゞなれども。機ぞよばねば。ちからなしといふこともありぬべし。

上ゐは佛出世にあはざる事をはづべしと云なり。次にこれより信せずしらざることを。おはいゐはづべしと云ふて大ゐはづべしとなり。次にこれより信せの名願たる他力本願のことはりを聽聞そといへども。信せず行せずしてむなしく過ぎ行く事を大ゐいづべしとなり。此二截い先つ機情自力の事をあかして。佛意他力の相を示なり。

謂く機情より成就そるところの。大乘小乘の行法ならば。所修の法い何はをすくれたりとも。我等が機分つたなくして及ばぬと云なげきもあるべけれども。他力本願はしからず。法

〔五十〕機の字義

い最上乘ぉして一切三昧の王たり○信じ行ずるには一切の善人悪人のえらびなく○行住坐臥を論せず○何のわづらひもなきに○此御法を聞ながら○信せず行ぜざることをはづべしとなり ☒機とは可發爲レ義云て○機をばやはづと訓ず○いふこゝろは矢を發は括より射いだ

そなり○人の機分より樣々の事の○をこりはじむるに約して機とは云なり○又一義には機をはたものと訓ず○いはく工女ぉつて機より○綾羅錦繡の色々を織いだせどとく○人の機分より無量の義を思ひいだせぉれたとへて機とは云なり○大乘小乘とは筆削記ぉ云○乘者運載荷負之義○聲聞乘三四諦之法○緣覺乘三十二因緣法○菩薩乘三六度之法已上大乘とは釋要鈔ぉ曰○大乘者運三大機一至三大果一故小乘者運三小機一至三小果一故已上○謂大乘小乘の斷惑證理○昇進位階等○其相いなはだひろし○別ぉ是をしるべし○法いたなりとい○法は大小乘の所修の法なりったとへといふ勝の字なり○こゝぉいふこゝろい念佛の法門よりそぐれたると云ぉいあらず○大小乘能修の人のこゝろより思ふにい已れか所修の行法を殊勝とおもへるを云なり○

いまの他力の願行は○行は佛體にはげみて○功を无善のわれらにゆづりて○謗法闡提の機○法滅百歲の機まで○成ぜずといふことなき功德なり○

〔五十一〕他力の二義

☒この一段は今我等のうるところの法は○聖道自力よりはかはりて○願行ともぉ佛の御方に御成就まし〳〵て○衆生ぉゆづり玉へるによつて○ここなたには何の智惠も才覺もいらず○唯佛願ぉ依託するばかりぉて○稱名念佛するを他力の願行とは云なり○その他力の願行は○卽ち南無阿彌陀佛是なり○さて他力易行所被の機と云は○上は十四佛國の大菩薩より○下は五百有界の凡夫にいたるまでなり○中にをいて諸佛ぉなきところをあげて○他力たる事を示し玉へり○夫につきて二つあり○謗法闡提の機に約して云ふ○是い正像末の三時に渡り○法滅百歲は時に約して云ふ○是は唯だ却末ぉかぎるなり ☒他力とい古來より二義あり○一ぉは人々具足したる○個々圓成の眞如一理あり○此一理內に薰ずるぉより○一華を佛ぉ供養する念もをこり○一稱南無佛の聲も口よりあらいるゝなり○此內薰をさして他力と云なり○然ども此上に行者○戒定慧の三學をはげまして佛果を成するなり○是をば他力の自力と云なり○二にい眞如內薰の他力の上ぉ○彌陀如來願行ともにあなたぉ成して○行者のために增上緣となり玉ふなり○故ぉ今の他力とい他力の中の他力なり○論註に云○劣夫跨レ驢不レ上

從二轉輪王一行一便乘二虛空一遊二四天下一無レ所二障导一。如レ是等名爲二他力一矣。空海云。亘石得レ舟者過二深海一於萬里一。蚊虻附レ鳳者翔二高天一於九空一已。今の他力と云ふも此等の類なるべし。行者の方ゟは少も行法に力を出す事なし。いかや青蠅は寸分より高くあがる事なしといへども千丈もある松ゟよりかゝるときは。おのれが力をそへざれども高くのぼるがごときなり。されば佛の御方に願行ともゟ成就しまし〳〵て。我等衆生にあたたまはるゟよりて。他力の願行と云ふなり。謗法と云ふは誹謗正法なり。正觀記に云。內懷二邪見一不二與レ理合一名爲レ謗。誹謂口出二惡言一也已上論註ゟ云。何等相是誹謗正法。答曰若言下無レ佛無二佛法一無二菩薩一無二菩薩法一。如レ是等見若心自解。若從レ他受二其心一決定。皆名二誹謗正法一矣。此をなはち一切惡業の中ゟ尤も量き罪なり。故ゟ誹謗正法の罪人ハ。必ず無間地獄に墮在して永く出期ある事なし。若し其の地獄やぶるゝ事ありといへども又他のやぶれざる無間地獄ゟをくられて。塵劫のあひだくるしみをうけるぞと法華經。大般若經等の中に說玉へり。闡提とハ梵語なり。此ゟは信不具と云なり。又ハ無信とも云なり。いふこゝろハ諸佛菩薩ゟつて。何はゞ敎化說戒し

玉ふといへども。少も耳ゟも聞いれず。信をもをこす事なし。故ゟ此ものを永不成佛とはのたまへるなり。故ゟ涅槃經ゟ云。闡提如二焦種一雖レ遇二甘露一百千万劫終。不レ生レ芽一。闡提輩亦復如レ是。已ハ上。又云如二朽敗子一不レ能レ生レ芽。一闡提輩亦復如レ是已上。たとへば煮焦たる種。又ハ古米なんどのふたゝび生ずることはなきなり。今闡提の人も亦復如レ是。諸佛の化道ゟあづからざる故に。佛性の根芽の生ぜざる事。焦種又は朽敗子のごとしとたとへ玉へり。是ゟよつて又涅槃經に云。一闡提者不レ信二因果一無レ有二慚愧一。不レ信二業報一。不レ見二現在及未來世一。不レ親二善友一。不レ隨二諸佛所說敎戒一如レ是人名二一闡提一。諸佛世尊所レ不レ能レ治矣。然に涅槃經ゟ諸佛の化し玉ハざる機を三種の病人といへり。一に謗正法。二には五逆罪。三ゟは一闡提なり。今爰ゟ五逆罪をいはざるは何讀よるしからざる。故ゟ謗法闡提と釋し玉へるなり。されば此の三機は諸佛の化導にもるゝといへども。今彌陀の本願は如レ是重罪のもの。自のはからひをなさずといへども唯願力に乘じ歸命しぬればやと〳〵と極樂に往生をとるなり。さて此三機化益の相は。五逆ハ觀經下下品の說に見えたり。謗法得生は懸師の論註善導の玄儀分の中ゟ見えたり。闡提得生ハ法事讚

に云。謗法闡提廻心皆往とあり。其上第十八の願文ふ十方衆生と嘗ひ玉へり。此中にいかなる機かもれ候べき。こと〴〵く淨土往生いたす事。目出度事にあらずやと云〻法滅百歳の機とは。是は時ふ約して難化の相をあらはせり故に法滅百歳の時の機と。百歳の下ふ時と云字を入て見れば能く理が聞ゆるなり。無量壽經ふ云。當來之世經道滅盡。我以三慈悲哀愍ふ特留二此經一止住百歳。其有二衆生一値二斯經一者。隨二意所願一。皆可レ得レ已上此文ふつきて。古來よりさま〴〵ふ沙汰ありて。諸師の意ろ一途ならず。今天台大師。慈恩大師道綽禪師。善導大師のこゝろふよりて末法一万年の後の。人命十歳の間の百年なりと心得べきなり。大方此相を云ふふ現在賢劫と云に八十増減劫あるに。釋迦如來ハ第九の減劫人壽百歳のときふ出世し玉へり。さて如來入滅より後五百年の間を正法と云ふなり。此間は人。上根利智なるを以ての故に教もあり。修行することもあり。證果する人もあるなり。夫より下つかた。人の根性をとろうる故ふ教あり修行あり證果をとる人なし。是を像法と云ふなり。像い似なりと註して教行は正法のときの人に似たれども。證果の人なきなり。此間をふる事千年なり。さて正像千五百年とさて後を末法万年と云なり。此間は教はあれども。人こと〴〵く下衰するを以ての故ふ。行證する人はかつてなきなり。此末法一万年の後の百歳を法滅のときと云て。佛法こと〴〵く滅して此時節には饑饉災。疾病災。刀兵災と云ふて。三つの災をこりて唯苦ふのみせめられて。佛道を修そべきやうなきなり。まして經卷はろびうせて世間にいなし。ましてをしゆる人ハなし。故ふ人みな惡趣の果をまぬかるべき身なるふ。爰に邂逅の導師出さたりて。念佛の法門をおしへ玉へるによりて。人てと〴〵是を聞て口稱念佛して極樂に往生しけるとなんいへり。此ときに淨土の三部經ばかり世にのこりてある故ふ。導師此經の所詮たる念佛をとりてすゝめ玉へるなり。故ふ經ふは特留二此經一とあれども。法然上人は特留二念佛一とは釋し玉へるなり。故に法然上人和字の書に云。特留此經者念佛行留二人口一百年間可二聞傳一。故云二爾時聞一念皆當得生彼一。是秘藏義也。輒不レ可レ申已。上問人口ふとゝまる故ふ持留念佛といはゝ聖道諸宗の法も人口ふとゝまるべし。何宗旨門の規摸とするや。答たとひ諸宗の法。人口ふとゝまるといへども機にかへり修行せざれば其の功成せず。然ふ此ときふハ患にさはられて解脫の種うゆる事なし。念佛の法門いしかならず唯開のみばかりおていかなる。苦患の

中ゐも○口ゐまかせて念佛申そなり○故ゐ彌陀の本願ゐは此とき尤利益大なり○此卽諸佛の本願ゐなきところなり已上いはゆる謗法闡提の機○法滅百歲の時分の苦受逼迫の機まで○やそ〳〵と往生すべき功德を○彌陀の御方ゐ成就ましまして○我等衆生にあたゑ玉はるゝなり功德とは經ゐ積功累德と云へり○仁王鈔ゐ云○施レ功名レ功飯レ已曰レ德已上

このことはりを○愍勤につげたまふことを○信せずしらざることを○おほきにはづべしといふなり○

㊀上のごとく他力の願行のことはりを念比に說て○我等衆生ゐ告しらしめ玉へども○聞ても聞さるがごとく○見ても見ざるがごとくして○信ををこさゝる事ハ○まことに三惡道よりいじめて來たらん我等ゐておらんかと大にはづべしとなり○愍勤とは字彙ゐ委曲の貞と註してくいしくともねんごろとも訓ずるなり○法華句解に云○愍勤愍賢勤重已上○

三千大千世界に○芥子ばかりも○釋尊の身命をすてたまわぬところなし○

㊀是より後ゐ大ゐはづべしと云ゐいたるまでは釋迦如來○此土ゐ生をうけたまふところ○まこと芥子ばかりも生じ給ハざるはなし○何事ゐ處處のこさず生をうけ給ふぞと云ふゐ○別の事ゐ候はず彌陀の本願を○說きかせ給ハんがためなりとなり○是は釋迦如來の御辛勞御苦勞ましくて○度々閻浮ゐいで給ひし御恩のはぢをも大にはづべしとなり○法華提婆品ゐ云く○

智積菩薩言○我見二釋迦一如來○於二無量劫一難行苦行○積レ功累レ德求二菩薩道一未二曾止息一○觀二三千大千界一○乃至無レ有下如二芥子一許非中是菩薩捨二身命一處上已○

又百緣經にも出たり○三千大千世界とハ一佛主領の地を云なり○千の四大州○千の日月○千の須彌○千の六欲天○千の梵天等是を小千世界と云なり○又此小千世界を千ゐつめたるを中千世界と云なり○又此中千世界を千ゐつめたるを大千世界と云なり○此三をとり合て三千大千世界と云なり○

みなこれ○他力を信ぜざるわれらに○信心をおこさしめんと○かはりて難行苦行して○緣をむすび○劫をかさねたまひしなり○この廣大の御こゝろざしを○しらざることを○おほきにはづべしといふなり○

㊀みなこれとは釋迦如來○三千大千世界ゐ細々ゐ○死かはり生かわりて處々ゐ出て○あられ

ぬ御苦勞をなしまし〳〵し事をさして云なり。さて何事に角ゝ難行苦行をなし玉ふといふに別の事にゝあらず。一切衆生に他力易行の法門を說きかせて。安〳〵極樂淨土ゟ往生せしめんとなり。○されば釋迦如來の御苦勞のほど。其かずりしる事なし。寶積經ゟ云。佛言四大海水猶可二測量一。我於二往昔一行二菩薩道一捨二己身血一不レ可二稱計一。須彌山王猶可二度量一。我於二往昔一捨二己身肉一不レ可二計量一。已上。如レ是佛恩のほどを報せんとならば。自力執情のわ命をそて〳〵報ずべきに。今はしからず。釋迦の御恩のほどを信じて。極樂に往生をとぐるばかりなり。此るでゝろをそて〳〵。出世の本懷たる他力本願を信じて。極樂に往生をとぐるばかりなり。此すなはち佛恩を報ずるなり。○廣大とは元と易の詞なり。天を廣と即佛恩のこゝろざしを思ひ大ゟはぢぬる人と云なり。○廣大とは元と易の詞なり。天を廣と云ひ地を大と云なり。今は此語をかりて釋迦如來の御恩のかぎりなきを廣大と云なり。

このこゝろを。あらはさんとて。種種の方便をして。無上の信心を發起すと。釋せり。

○是ゝ般舟を引て其義を釋せり。又今此文ゝ次下の文なり。種種方便發二起我等无上信心一。このこゝろとは。一切衆生ゟ。无上の信心を發起せさせ給はるとの義なり。種種方便とゝ

ゝ華嚴經に云。爲レ盡二知一切世界所有衆生一種種方便乃欲レ盡二知一切方便網一。故發二阿耨菩提心一矣。大集經に云。能調二衆生一悉令レ順二向阿耨多羅三藐三菩提一。是名二方便一。已。無上の信心とは。大集經に云。勤二修无上信心一者。即能獲二得於菩提一矣。此等の文のこゝろなり。今いはゆる釋迦如來ゝ種種の生をうけたび〳〵ゟ往來し給ふときゟ。大小權實等の法を說給ふことは權假の方便なり。本意は唯だ是れ彌陀如來の超世の本願を說給はんがためなり。其相は次下の細釋の心なり。

无上の信心といふは。他力の三信なり。

○是は引文の隨釋なり。是又諸師の判せざるところなり。無上とは華嚴大疏ゟ云。道不レ可レ加曰二無上一矣。今は彌陀過上の上の無上なり。大經の無上功德と云ふゝ。一切の有上小利ゟ對しての玉へるなり。さて本願の三信を無上との玉へる事は信心に勝劣の差別あり。一代諸教の信心ゝ唯是自力なり。機情の上の信なる故に。凶分の說なる故に劣なり。さて淨土門の中ゟ定散自力の三心は。他力といへども機分ゟいげまその信なる故ゟ劣なり。第十八の願の三信ゝ行者のはからふ信ゟあらず。佛願

他力の信なり○故ゐ是ハ○果分不可説の信なり○因て無上の信心と云なり○此の相聖人御聖教の中ゐ散してありまさゐしるべし○

つぎに○種々の方便をとゝ○教文ひとつにあらずといふは○諸經隨機の得益なり○

〆是は次上ゐ引ところの○般舟讃の文の次下なる故ゐつきと云ふなり○種種等よりあらずまで○引文なり○文ゐ云○又 説二種 種 方便一教門 非レ一 但 爲二我 倒見一故○ いふはよりは隨釋なり○教文とハ本書には教門につくる○此ときは經教の門戸と云義なり○ 故ゐ相違にあらざるなり但し教門にして義を解すべきなり○諸經隨機とハ初め華嚴よりをはり○法華涅槃ゐいたる五時の經教ハ○如來出世の本懐ゐあらずといへども○機ゐしたがひ玉へる方便の説を云なり○此中ゐは大小權實○種々の經々あるなり是を非一と云なり○

凡夫は○左右なく○他力の信心を○獲得することゝ、めたし○

〆是よりは凡夫ハ心を決定そる事かたし○故ゐ自力他力の信をそゝめ玉へるの下なり 〆凡夫とは梵ゐは波羅必栗託仇那と云此には愚生と云○

謂く愚癡闇冥にして智惠あることなく○但我見をこして无漏を生ずることなき故ふ○又小兒別生とも云○愚癡如二小兒不レ同二聖生一也矣○或毛道とも云ふ是は行心不定なること○輕毛の風にしたがふて○東西になびくがごとくなる故にとなり○又ハ凡夫とも云ふ是は義翻なり○此の意ハ凡は廣雅に輕也○是は凡夫は輕微にして○聖人に同せざるが故ゐ○彌勒所問經論ゐ云○遠二離聖人法一染二著身見等一住二五欲資生一故名二凡夫人一此意歟○又弘決に云○凡者常也亦非レ一也○庶品多故已○莊子ゐ云○凡夫之人將二有レ限之身一求二無限之物一意常不レ定也○千字文の註に云○中人之性隨レ習則改○逢レ善爲レ善逢レ惡爲レ惡○以二心不定一逐レ物意移已○是等は凡夫の性は○意つねゐさだまらざるとの謂なり○上の毛道凡夫といへる是なり○如レ是 意のうつりかはりて○定まらざる凡夫たるゐよつて○他力の信たやすく成じがたしといへるなり○左右なくとハ左右ともかうもと和訓せり○但し今は造作なくと云義なり○言心ハ何かと前後左右をかへりみるは造作のゆく義なり○故ゐ無造作なるを無二左右一と云なり○信心獲得すと云は○獲得とは二字ともふうると訓せり○たとへば他人より金銀珠寶等を得たるを云なり○然ども聖人の御

〔五十七〕季子徐君か墳上に劒をかくるの緣

意二義おとれり○言く獲の字は囚位のときうるを獲といふ○得の字ハ果位のときおいたりてうることを得といふなり已○此こゝろは法藏伏位のむかし○十劫正覺のときお○十方衆生おして願し廻向し玉へるとき○我等に信をさづけ玉へるときうるといへども正くわたると云は○今日宿善開發して○まことの他力の信心を此身おゐて○往生淨土の眞因のさだまりたるときを得と云ふなり 〔図〕むかし延陵の季子と云ものの西の方晉に聘使に行るときお贐劒を帶てけり○とりしお徐君○季子か贐劒を見て○言おいはざれとも意おもとめんことをねがへり○季子其のねがへる色を見れとも○上國の使ひたる故お此劒をほどこすことなし○然とも心おはあたゆるの思をなせり○さて晉に往て要事をつとめ反さお○徐君がところお立よりけるに徐すでお死ぬ○爰にをいて劒をぬいて徐君が子おおたゝしかば○此子うくべき理なしと云てうけさるなり○因て劒を持て徐君が墓の上お○樹のあしかけて去りぬ〔史記に見たり〕○季子が心のゆるしておたゝんと思ふが○今の獲の字のこゝろ○さて劒をぬいて塚の上おかけしは○今の得の字のこゝろなり○

しかるに○自力の成しがたきことを○きくとき○他力の易行を信ぜられ○聖道の難行をきくとき○淨土の修しやすきことを信ぜらるゝなり○

〔図〕是は凡夫たるもの○他力の信心得がたき事をほしめして難行易行對をあげて○今の他力の信心をそゝめ玉へるなり○其故は世俗の人人をもおらく○聖道の修行とて何そ修しがたき事あらんやと云なり○これによりて修して見るときお○(其なりがたき事のしるゝなり○たとへば川の流を見て○此川はさまではやきとは見ざるなり○是およりて筏を下して見るに急流とは思ざるなり○さて此筏を川上お引あぐるときはさても早川かなと○此ときおしらるゝなり○筏を下をば他力おとり○筏をのはすをば自力難行にたとへてしるべし○さて又天をながめてさのみ高とは見ねざるお○山の峯おあがりてあらば○大やう梯を以てのぼるべきとをもはるゝなり○さて山頂にのぼりて見れば平地おて見たるより○なを天の高く見ゆるなり○又此地ゝさまで厚とをばへさるに○深谷に入て見るに地のかぎりをしらず○此ときそでに地のあつき事をしるなり○是又山頂おのぼりていよ〳〵高く○谷のふかきお入て地のあつきとしるゝ○自力難行ゝ修して見たるとき○いよ〳〵難解難入なるおたとふるなり已○爰○

〔五十八〕 邯鄲の學歩

に當流相傳の心得ある事なり。其故は必ず自力修行をせよと云のをしらずては候はず。唯是他力信心をそゝめ玉はんための。教誡のことばなるべし。若し強て自力修行をそるときは。まことの信心をも取うしなふものなり 〔図〕昔し人あつて。邯鄲は歩行ならふ。何はさまなびならへとも。つゐに似たることもなく。あまつさへ故の國にての歩をもわすれて。歸さまには匍匐してかへるといへり（班氏か叙傳に見えたり）。今も亦爾なり。今時の我人。聖道の修行をしたりとも其行法につかれはて。還て流轉の業因にしづむべきなり。

をはよそ。佛のかたよりは。なにのわづらひもなく。成就したまへる往生を。われら煩惱にくるはされて。ひさしく流轉して。不思議の佛智を。信受せず。

此一段は我等が往生を。佛智の方ゟ御就成ましませとも。疑煩惱ゟくるはされて。信せずして流轉せる事をかせり。おほよそとは大凡とかく。これは漢書の藝文志より出たる辭なり。言。惣合したるとき發端にをく詞なり。大抵大概みな此類なり。助語辭に曰。大凡一概

〔五十九〕 法然上人疑煩惱を示玉へる法語

總說之意矣。されば今大むねを云ゟ。一切衆生の往生をば佛の御方に。十劫已前ゟ御成就なされしと云ふ意なり。煩惱ゟくるはされてといふ疑煩惱なり。經ゟ疑惑不レ信といへる故に

〔図〕法然上人云く。念佛往生のうたがひのことゝ。本より衆生は煩惱具足の身と云ひながら。ことさら疑煩惱とて。うたがひをもちて躰として。不信なりしゟよりて佛道ならず。過去遠遠より生死に輪廻しされる事にて候。念佛往生につきて人ごとゟ。機と法とゟうたがひをなしさふらう。機とは我身。法とは念佛。機をうたがふとまうすは。我等がやうなるつたなき凡夫の。妄念妄執のみおほき心にてゐ。いかにしてか極樂にまいるべきとうたがひ。また念佛をば佛ゟいおほろけの大事ゟてなりがたき事ゟてさふらうなるを。やすくと南無阿彌陀佛とまうして死ば。極樂ゟ往生するとまうすこと。まことしからずと疑ふ。これみなことはりふてさふらう。たゝしこの念佛は本より煩惱具足の。凡夫をたすけんとの御ちかひふてさうらへば。我心の不信懈怠なるゆへにも。南無阿彌陀佛と唱こゑは往生にてさふらう已上。

不思議佛智等とは。大經の不了佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。无等無倫。最上勝智。於二此諸智一。疑惑不レ信の意なり。佛智は惣智なり實智なり。不思議智等の四智は別智なり權智

なり。今は佛智不思議智の二智をあげたまふなり。問しからば惣別次第ゐ約して。佛智不思議といはざるそや。答前後いくるしからず唯是言の左右のみ。故に讃文に佛智不思議を信すればとあり。又は不思議の佛智を信するをともの玉へるなり ※不思議智とは。是に四重八對ありこゝゐは以レ少作レ多。謂く少の六字の名號を以て多善根とそ。二には以レ多作レ少。謂く多生の繫縛。身に近いてはの多罪を一念を以て消滅せしむる故に。三には以レ近爲レ遠。謂く多生の繫縛。身に近いてはなれざるを。一念ゐ卽ち遠離する故に。四ゐは以レ遠爲レ近。謂く淨土ゝ十万億程。遠といへども一念に卽ち生ずる故に。五には以レ輕爲レ重。謂く口稱念佛は是かろきに似れども。深重ゐして虛からざる故に。六ゐは以レ重爲レ輕。謂く極重の罪業。一念の廻心ゐ轉して。輕微となさしむる故に。七には以レ長爲レ短。謂く長劫の流轉。刹那ゐ成佛する故ゐ。八には以レ短爲レ長。謂く一世の勤苦なりといへども。淨土ゐ往生すれば。長生不退の快樂をうくる故にと云(安樂土襲安樂云云集の意なり)如レ是の益をうる事。佛智の不思議にてあるなり。是をうたがう故に遠劫よりこのかた流轉せるとなり。

かるがゆへに。三世の衆生の。歸命の念も。正覺の一念にかへり。十方の有情の。稱念の心も。正覺の一念にかへる。さらに機にをいて一稱一念もゝとゞまることゝなし。

※此一截は。十方三世より淨土ゐ往生をとくる機をあかすなり。卽ち讃文に。已今當の往生は。此土の衆生のみならず。十方佛國よりきたる。無量無數不可計なりとの玉へり。さて今の意は十方三世より淨土ゐ往生をとげんと欲するに。彌陀ゐ歸命したてまつる念のをこり。又口に南無阿彌陀佛ととなふるなり。此の本をたづぬるゐ。皆な是十劫正覺の御誓願。御回向ゐ催されてをこるところの一念なり口稱なり。故に機の方に。もよをすに似れども。佛意のはからひと云ふときは。ことく〳〵く十劫御正覺のところゐ。立かへるを以ての故ゐ。機の邊にい一稱も一念もなきなり。故に是をともいまる事なしとは云なり。

名體不二の。弘願の行なるがゆへに。名號すなはち正覺の全躰なり。正覺の體なるがゆへに。十方衆生の往生の躰なり。往生の躰なるがゆへにわれらが願行。ことごとく具足せずといふことなし。

※此一截い願行は佛邊に御成就ましくける。其成就の躰は。全く衆生の躰なり。此理をい

〔六十一〕名体不二の名義

いあらいし玉はんとて○名躰不二の判を出し玉へり○其故は願行と云外に求にあらず○南無阿彌陀佛○全く是れ願行具足の体なり 然に念佛の行者南無阿彌陀佛をとなふれば。名躰不二なるを以ての故に○行者全く願行具足となるなり。名体不二とはたとへば人厪物あつてくるしむ○あさ早々に日輪の東方ゟ出玉へるはじめには○乍赤たちまちに黄になりぬ○此日光に厪物をあてゝ照に○忽にうすきやむなり○ときゟ夕ぐれの酉のとき○亥の時ゟさかんゟ痛とき○明日まで待わびて○日出東方乍赤乍黄といへば其痛やむなり○又人狗にくらはれてくるしむ○虎の骨をあぶりてなづれば痛やむなり○若し虎骨なきときは掌をひらいて是をあぶりて○彼くらはるゝ處をなでて○口中に虎骨虎骨といへば患ところ速ゟいゆるなり○如レ是世間にも名の躰ゟ○即するとも云の例いなはだおほし〔論註安樂集等に見ゆ〕○況や大乗無漏の法○何ぞ名躰各別ならんや○小康法師○念佛を申させ玉ふに。聲し給へば口中より一佛出給ひ○二聲すれば二佛出給ひ○十聲千聲○其の聲ゟしたがひて佛出給へる事。なをし珠をつらぬくがごとしといへり○此 即 名躰不二の謂なり。

かるがゆへに○玄義にいはく○いまこの觀經の下品下生の○十聲の稱佛には○すなはち十願ありて○十行具足せり。いかんが具足せる。南無といふは○すなはちこれ歸命。またこれ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふはすなはちこれろの行なり。この義をもつてのゆへに。かならず往生をえんとうといへり。

是一截は○上に願行具足する事は○元名號にあると云をうけて○今は善導の釋に名號の中ゟ○十願十行具足せりと云ふ○文を引て證とし給へり。先づ善導此文を釋出し給へる事は○導師より百年あまり已前に○天竺より攝大乘論きたれり○此論をとつてひろむるゟ○觀經の下下品の文を○見あやまりて唯願の文なりといへり○故ゟ觀經ゟある南無阿彌陀佛は○往生の別時意趣と云ふて○直ゟ極樂に往生するゟいあらず○つねにわ往生するところの緣となるといへり○是を迦論家のあやまりと云て○本論にはあやまりなしといゑども此論を解せるもの○ときゟ善導出世して云○觀經の稱南無阿彌陀佛ゟ願行具足して○順次ゟ極樂に往生をとぐるなりとし此義をあらはさゞるゟ○今の釋をばうけたまへり○さて此釋文を解するゟ異流に心得らるゝと○當流の意と其義分別なり○其大數をいふゟ○異流ゟは南無と云ふは○

機の方に安心決定する願なり○故ゐ歸命も發願も廻向も機の所修と見なり○當流のこゝろはしからず○願行ともゐ佛意の方ゐ○御成就ましまさを南無と云ふなり○故ゐ歸命も發願も廻向も佛のかたゐ極めましまさと云ふなり 〔六十二〕歸命の多說 ✠さて歸命と云ふは種々の說あり一說に云○宗鏡錄二十に云○歸命是還源義○衆生六根從二一心一起○而背二自源一馳二趣六塵一○今擧二命根一惣攝二六情一○還二歸其本一心之源一○故曰二歸命一心卽具二三寶一矣○此ときは歸をかへると訓す○謂く我等一念あやまりて○一心の都より迷ひ出で○六塵の境に奔走す○六塵は六根のふるゝによりて○六識の了別するゐよつて○種々の惑業を生ずるなり○此の六塵六根六識の○をさまるところを命根と云ふなり○故に命根のまよひを治めて○又本の一心のところゐ皈せるを歸命と云ふなり○是ゐ禪門ゐをいて沙汰せり○又一說ゐ云○天台止觀一に云○慙愧懺悔以レ命自歸○弘決ゐ云○盡レ命无レ悔故已上○此ときは命をかへそと訓す○謂く菩薩の法ゐ不惜身命と云ふて○法のためゐは身命をなげうつなり ✠釋迦如來因位のむかし○婆羅門となりしとき○雪山ゐをいて修行し玉へるに○帝釋天○化して羅刹鬼となり○其ときゐ羅刹過去の佛の所說の偈を唱て云○諸行無常○是生滅法と○ときに婆羅門○是偈を聞て心ゐ歡喜して○卽ち羅刹ゐ向て云○汝ぢ偈を說事まつたくなし○諸我ためにつぎの句を說とありしかば○羅刹が云○我久飢て力なし故ゐ說事あたゝじ○若汝が暖なる肉○熱血を得て是を食せば○是を以て力として殘餘を說て○汝がためふせんといへり○婆羅門の云く安き事なり○身を以てはやこそべしといへり○因て後の半偈を唱て生滅々已○寂滅爲樂といへり○婆羅門是を聞て大によろこび○聞ところの偈を世の人のためとて○あたりなる石又ゝ樹の皮を剝て○かき付て高樹ゐのぼりて○羅刹の口の中に飛入り玉へるとき羅刹の舌○卽ち青蓮華と變じて○菩薩をさゝへて云く○我は是天の帝釋なりと云て退しとなり(涅槃經に見ゑたり)○此等を歸命と云なり○此類はなゝだ多し畧レ之已上○又一說に云○起信香象疏に云○歸命二義○一歸者是趣向義○命謂已身性命○生〔六十三〕釋迦因位ゐ羅刹にあふて身命をなげうつて半偈を聞の緣

靈所レ重莫二此爲一レ前○二歸是敬順義○命謂諸佛敎命○此明下論主敬奉二如來敎命一傳法利生上○是云二歸命一○已はしめの義は○前の天台止觀のごとし○次の義は歸はうやまふの義○命はみことのりと訓せり○是ゝ宗旨門の依用に相應せり○又歸命ゝ救我度我の義あり○さて當流の義の意ゝ○行卷ゐ云○爾者南無之言歸命○歸言至也又歸說也

〔六十四〕願と廻向との別

說字音又歸說也○說字（稅音悅稅二音皆也）命言（業也招引也使也敎也道也信也計也召也）是以歸命者○本願招喚之勅命也已上○さて此意は彌陀如來○御正覺成就まします〳〵て○十方衆生を我勅命のことくせよとの玉へるをうやまひたつとんで○佛願まかせを信し居たるを歸命と云ふなり。※發願廻向と云ふは○發願と廻向となり○此二つ如何差別なる○謂く淨影の觀經の疏に曰○直爾趣求說レ之爲レ願○挾善趣求說レ之爲二廻向一已上○往生要集に云○發願廻向有二何差別一答皆期所レ求名レ之爲レ願○廻二向所作業一趣二向於彼一謂二之廻向一已上○此等は機の方を修する○他力の中の自力の發願廻向なり○さて當流の正義はしからず○觀經隱說の密意によるを本ゆづりて見るに○佛の發願たり廻向たるなり○其の故は佛○御正覺のとき一切衆生を對して○あなたを發願し廻向したまへり○夫を今日の我等衆生に發願し廻向せりとなり○行卷に云○言二發願廻向一者○如來已發願廻施衆生行之心也已○阿彌陀佛といふ○佛の行者の所施の○發願廻向のをこるとき○二百一十億の諸佛の行の中に○ゑらび取り玉へる行を阿彌陀佛の四字の○果名ゐをさめをき玉へるを行と云ふなり○此願行卽一念領

〔六十五〕必得往生の辨并に必の字の釋義

解のときに具足するとなり○行の卷に云○卽是其行者○卽選擇本願是也矣○眞像銘文に云○卽是北行是卽法藏菩薩之選擇本願也○言二安養淨土之正定業因一意也矣 ※かならず往生をうとは○佛願他力の信にもとづき○口稱南無阿彌陀佛と○願行具足せるの行者は○必ず極樂世界ゐ往生することを得といへり○行の卷に云○言二必得往生一者○彰レ獲レ至二不退位一也○經言二卽得一○釋云二必定一○卽言由レ聞二願力一○光二闡報土眞因決定時刻之極促一也○必の言は審也然也分極也○金剛心成就之貌也已上○さて此釋のこゝろ○餘流と其心得別なり○其故は必得往生を○他流には順次ゐ約す○當流聖人の御料簡ハしからず○現生の得益を必得往生との玉へり○御釋の中に云○經言二卽得一釋云二必定一○此すなはち此土の益たることをあきらけし○十住論ゐ今身等との玉へるこゝろ皆是此土の益なり○然ば今師聖人の私の義ゐあらず○佛祖の妙文を依據とし玉へるなり○さて必の字ゐついて聖人審也然也分極也の字訓をまうけ玉ふ○是によつて義をしるべし○先審也とは審はあきらかと訓して○願行具足の行人ハ○往生しかとさだまりたる詞なり○謂く願行具足しぬれば○往生しかとさだまりたる詞なり○謂く願行具足しぬれば○往生

りぬると云義なり。分極也とは。是おついて分極 滿 極と云事あり。たとへば菩薩の萬劫の修行 成 就して。初地の聖位にいり。一品の無明を斷じて。一分の中道の理を證し。乃至第十地。等覺位までをば。分極證の位と云ふなり。さて最後品の無明を斷じて。妙覺朗然の位にいたるを滿極位と云なり。今も亦如レ是。願行具足の行人。はや此土おをいて往生 淨土の。人數にさだまりぬるを分極と云ひ。正く淨土に往生して。寶蓮華上お安在して。六通自在の妙用をふるまひ。快樂不退の益おあづかるを滿極位と云なり。されば世間おかならずと云ことは。當坐おきはむるを云ふにはあらず。後おきはむる事を今爰もとにて。定をくを必ずと云なり。然ば願行具足の者。後お淨土に往生そべき事を。今此土おをいてあらかじめ極め玉ふ。故おかならずと云ふなり。

下品下生の。失念の稱念に。願行具足することは。さらに機の願行に。あらずとしるべし。法藏菩薩の。五劫兆載の願行は。凡夫の願行を。成するゆへなり。

〔六十六〕失念の二義

此一截は上に願行具足の相をあかをお。善導の釋文を引て證據とせり。爰おい觀經下々品の文の意をあげて。道理を以て願行具足をあかせり。其故は下下品の機い。一生の造罪によつて。臨終おに苦受逼迫せらるゝ故お。彌陀の功德を念ずべきやうもなきに。善知識をしえて。南無阿彌陀佛と十聲となへしむれば。速に八十億劫の生死の罪を滅して。極樂お往生すると云へり。如レ是重罪の惡人。十聲の功德おて往生そることは。南無阿彌陀佛お願行成就の相を具足し玉はずんば何ぞやと。道理おまかせて判語し玉へるなり 失念とは善導の散善義に。下下品の苦受逼迫の相を釋して言。善友知二苦失一レ念轉教口稱二彌陀名號一矣。此釋の意は。下中品にて彌陀の光明神力。戒定慧。解脫解脫知見等の。種々の功德を說て聞しめ。正念おして往生をすゝめ玉ふなり。下下品い下中品おまさりて。重罪たるを以ての故に。彌陀の功德を念ずることあたはず。是によつて善友轉じかへて。下下品おては唯。南無阿彌陀佛とすゝめ玉へるなり。是を失念と云なり。此念の字おついて下中品の。光明神力等の意念をさそなりと。又一義おい此念は口稱念佛の念なりといへり。應レ知稱念といひ稱名念佛なり。卽ち令レ聲不レ絕具二足十念一。稱二南無阿彌陀佛一なりと云。五劫兆載の願行はとは。此の願行の下に成就の相はと云ことばを入れて見べきなり。惣じて如レ此のかきやうは。

和語の法おはなはだ多き事なり。能々しるべきなり。

阿彌陀佛の。凡夫の願行を成せしいはれを。領解するを。三心ともいひ。三信ともいふなり。

※此一節は上來。文證道理お順じて。願行具足の相をあかして。爰には如來の願行成就ましませしを。領解したるときの其の名目をあらはせる辭なり。天台の疏記の六お云はく此是領解段。近領三火宅一遠領三方便一。領里鄽切頴也理也。又項なり受なり。和おうけがふと訓ず。解は解了解知なり。今は南無阿彌陀佛い是。如來の願行御成就まし〳〵て。我等お施與したまへるそがたぞと領納解知するを云ふなり。其の領解の相を卽ち三心ともも。三信ともいへるなり。三心三信と云事。心得がたし。其故は古來三心は觀經の意。三信は大經の意なりと。三心三信何のかはりわつて。心と信とは釋せるや。謂く是は宗旨門おならひのある事なり。觀經の三心い顯說お約そればしかしながら定散自力の三心なり。是は今の領解の義にはかなはざるなり。若し隱說に約すれば。本願念佛の三信なり。卽今のこゝろなり。此義を簡別せんために。觀經おは三心と云。大經には三信

といふなり。但壽觀兩經ともお三心ともかけるところもあり。

阿彌陀佛は。凡夫の願行を。名に成ぜしゆへを。口業にあらはすを。南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに。領解も機にはとゞまらず。領解すれば。佛願の躰にかへる名號も機にはとゞまらず。となふれば。やがて。弘願にかへる。かるがゆへに淨土の法門は。第十八の願を。よく〳〵こゝろうるほかにはなきなり。

※此の一截い領解の相をあかす。是は領解そるところは。一往い機のなせやうお見ゆれど。本より機のをこそところおあらず。佛意の所成なるが故お。皆是佛願成就の躰にかへるなり。淨土の法門い第十八の願等とは。淨土門の教相さま〳〵にわかてり。謂く三心四修五念五行等なり。然ども結歸するところは第十八の本願。南無阿彌陀佛の一行なり一牧起請文お。但し三心四修と云ふ事のさふらうも。皆な是れ決定して南無阿彌陀佛とまうさんがためなり。

こもりさふらうなりとの玉へる此こゝろなり。上さればこそ黑谷聖人つねお玉へるやうは。源空がまなこお以。三心四修五念等といへるも。みな南無阿彌陀佛といへる此等のこゝろなる

べし。

如无量壽經四十八願中。唯明專念彌陀名號得生とも釋し。又此經定散文中。唯標專念名號得生とも釋して。三經ともにたゞこの本願をあらはすなり。

〇此一截は。上ゐ淨土の法門は第十八のはかはなきと云ふをうけて。今更に善導の釋を引て上のこゝろを助成せるなり 〇引文い定善義の中の第九阿彌陀佛觀の文なり。文のこゝろといへども。專ら第十八の念佛を以て極樂に往生そるなり。又觀經の中ゐ。定散二善の行門ありといへとも。專ら第十八願に皆玉ふ稱名念佛を以て。往生そると釋し玉へるなり。問定善義を見るに今引玉へる。兩文の中間ゐ彌陀經の文あり。すでに次下ゐ三經ともゐとあり。若是は脫文たる歟。又深意あるか。私ゐかんがうるに更ゐ脫文ゐあらず。深意ありと見なたり。其故は大經の釋ゐい唯明專念と云。觀經の釋には唯標專念とあり。唯の字の消そるところ。簡持の義と云て。餘をえらびすてゝ自を持を云ふなり。されば大經ゐい四十七願あり皆用ひず。唯往生の眞因い第十八の願の念佛なりと。簡持そ。觀經は。定散二善は。往生の眞因ならず。第十八の念佛なりと。簡持するを唯標と云なり。彌陀經にい簡持すべき事なく。唯念佛門ばかりなり。故ゐ引文するゐ及ばざるなり。爰を以て彌陀經の釋を引ずして。三經ともに本願念佛たることをあらはして。下ゐ三經ともにとはの玉へるなり。されば彌陀經の釋に云。如三彌陀經中一。一日七日專二念彌陀名號一得レ生。此釋の中ゐ唯の字なきにて。彌陀經は念佛往生の義邊を。論ずるふたらざる事をしるべし。

第十八の願をこゝろうるといふは。名號をこゝろうるとは。阿彌陀佛の衆生にかはりて。願行を成就して。凡夫の往生。機にさきだちて。成就せしきみ。十方衆生の往生を。正覺の躰とせしことを。領解するなり。

〇此一截い。上二段ゐ。淨土の法門は第十八の願に仮すると云ふふうけて。第十八の願をこゝろうると云は別の義ゐあらず。南無阿彌陀佛の御名なりとしるべし。此御名を心得しると云ふい。阿彌陀如來の凡夫ゐなりかはり玉ひて。一切衆生にさきだちて。凡夫の往生を御成

就ならしめ玉ふ。正覺の体なりと領解するが。全く第十八の願を心得たるといふ義なり。
かるがゆゑに。念佛の行者。名號をきゝ。あはれや。わが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずは。正覺とらじと。ちかひたまひし。法藏菩薩の。正覺の果名なるがゆへにとおもふべし。

〇是より已下。極樂よとおもふべしといふにいたるまでは。阿彌陀如來。衆生の往生をばあなたに。御成就なされし事をそゝめんがためなり。其中ゆ三つあり。今は其のはじめなり。謂く人みな名号を聞ば。此名号ゝ願行具足の南無阿彌陀佛は。正覺の果名の躰なりとおもふべしとなり。あはれとは云ふことなり。伊勢物語ゆあなやと云もあゝなり。但しあゝいよろこびとなげくとの二意あり。今い是よろこびのかたを云なり。又一義ゆ云く。あゝとは唯たすけの言ともあり。

また彌陀佛の形像を。をがみたてまつらば。此御すがたこそ。御正覺のときに我等が。往生をさだめ玉はりしなりと思べしとなり。〇薩埵とは具ゆ菩提薩埵と云なり。惣じて梵語のながふして。唱にくきときゝ畧言してつかふなり。佛陀耶と云ふを。下の二字を畧して。佛と つかふ。是を沒下と云て下を沒するなり。阿彌陀を彌陀と云ふときは沒上なり。今も亦爾なり。菩提の二字を略して。薩埵と云ふ是沒上なり。若又沒中沒下しては菩薩と云ふなり。

また極樂といふ。名をきゝ。あはれや。わが往生すべきところを。成就したひにけり。衆生往生せずば。正覺とらじとちかひたまひし。法藏比丘の。成就したまへる。極樂よとおもふべし。

〇是は第三ゆ極樂と云ふ名を聞ば。此の淨土こそ我等ごときの凡夫を。引入なされんとて御建立ましましぬと思ふべきなり。

機をいへば。佛法と世俗との。二種の善根なき。唯知作惡の機に。佛體よりり。恒沙塵數の功德を。成就する故に。われらがごとくなる。愚痴惡見の。

衆生のための。樂のきはまりなる故に。極樂といふなり。

㊀此の一截は佛は一切善惡の聖人凡夫のために。無量の功德を成就し玉ふといへども。本爲凡夫。兼爲聖人を以ての故に。今爰ゐも先づ凡夫のために。功德成就し玉へるといへり。機とは一切の罪業深重のものをさすといへども。善導の意によるゐ下三品の機なり。觀經玄義分ゐ云。此三品人無レ有二佛法世俗二種善根一唯知レ作レ惡。このこゝろより書たまへり。佛法とは大小權實等の法をさすなり。世俗とは孝養父母奉事師長等なり。智度論ゐ云世間善有二三品一。上分天道。中分人道。下分阿修羅等。善根とは毘婆娑論ゐ云。善根者不貪不恚不痴。一切善法從二此三一生。故名二善根一。如二一切惡法一。皆從二貪恚痴一生。已上恒沙塵數といふものゝ數多なるを云なり。具ゐは恒伽河沙と云なり。此河は無熱池より山る四河の一つなり。此河の沙。細少ゐして水とともゐながる。故ゐ數の多き事をいはんとては必ず恒河沙數と云ふなり。問四河ともゐ大河なり。何ぞひとへに恒伽を以て數多の義ゐたとふるや。答ふ章安の涅槃經の疏ゐ云。佛毎說法。指二恒河一爲レ數者。具二四義一故。一人多識故。二入者得レ福。三於二八河中一大。四佛所生處

上。已塵數とは是も數の多して無量なるを云なり。具ゐは微塵數と云なり。謂く佛躰に具足して玉ふ。三身四智十八不共等の。内證の功德。光明說法等の外用の功德の無量なるを恒沙塵數の功德と云なり。愚癡とは愚は說文に愚は戇也。從レ心從レ禺。禺猴屬獸之愚者上。癡ハ說文ゐ癡は不慧也。しかれば愚癡とは心をろかにして。猴のごとく智慧のなき者を云ふなり。集解中に云。不レ別二因果一。但作二惡業一故云二愚癡一。已智度論三十四に云。愚痴有二二種一。一者邪見愚。二者無明愚。是二種邪毒衆生難レ可二化度一。已上。今は二種の愚癡ゐ通ずといへども。愚癡惡見とわるとき邪見愚癡にかぎるなり。如レ是見る事ハ。彌陀の本願は本と重苦の凡夫のためなり。故に愚癡迷闇の衆生を。よく度し玉ふ彌陀如來なるを以ての故なり其の愚迷の相を十地論ゐ說て云。諸衆生常爲二愚癡闇冥一妄見二厚曀一无明黑闇所レ覆。入二大黑闇稠林一遠二離智慧光明一到二種々險道一矣

㊀樂のきはまりなる故に極樂といふなり。彌陀經ゐ云。北國衆生无レ有二衆苦一。但受二諸樂一故名二極樂一。已上。元照の云。更有二餘樂一不レ能レ過レ此。祇无二諸苦一已爲レ可レ樂。況具二諸勝事一其樂何窮故云レ極也。戒度ゐ云。且由二彼土依正二報

妙色妙聲。皆是法藏无作之功德之所莊嚴。稱レ性契レ理本无レ有レ極。今言レ極者無レ極也已。然ば樂といへども極樂と云ときは。此土の樂のごときはあらざるなり。然ば此土の樂と云は。つねゐ苦ゐかへるなり。今苦を樂と計そるものゝごときんば。たとへば重荷をゐなふもの肩をかへて一方のくるしみのやむを樂とするがごとく。又飲食是樂なりといへども飽まで食ときは還て病となるなり。列女傳ゐ云。陶答子が妻の曰く樂み極て必す哀み生と已上。此即ち樂そなはち苦ゐかへるなり。滑山警策に云。然則一期趨レ樂不レ知二樂是苦因一已上。いはく世諦の樂はこと〳〵く苦の本となるされば虛く信施をうけてたのしむは一旦のたのしみなりといへども。此の債を負たるもの何ぞ苦受の來ん事をうたがいんや。此の報によつて牛馬の主をうけて。くつゐづらをふくみ重荷をもつなんぞは。なを是かろきむくひなり。多生の業苦をうくることは其の數はかりなし。此等は樂といへども今生他生こと〳〵く苦の因とあるなり。今極樂淨土いしからず。證眞如の內證よりあらいる〳〵无苦无樂の眞樂なる故ゐ。一たび彼の土に生じてうくるところの樂は常住不退ゐして苦にかへる事なし。故に極樂と云ふなり。よつて今は苦に對するところの樂ゐはゐらざるとしるべし。問小經のごとくんば衆苦ゐ對して極樂と云ふ。何ぞ苦に對せざる極樂と云ふや。荅最も今の淨土。苦ゐ對する樂ゐあらずといへども。機をしてすゝめんために一往相對の判釋としるべし。然ば此土の八苦に對辨して以て淨土の無苦なることをあらはして衆生をして安しらしむるなり。謂く此土ゐいき生苦あり。此くるしみは。たとへば生たる牛の皮をいぎて墻壁の中ゐ逐いるゝがごとしといへり。淨土は蓮華化生たるを以ての故に生苦なし。又此土ゐは老苦と云て。漸々に閑行く年ゐしたがひて衰老して五躰のくるしみあり。是は何事ゐ此老苦あるぞと云ふゐ。春夏秋冬の四季のうつりかはる世に住そる故なり。然に淨土ゐ亦無四時春夏秋冬不寒不熱。常和調適と。經ゐ說給ひて雨風の轉變ゐあいざる故ゐ老苦なきなり。此土にい病苦あるなり。人として生れいづるより血氣の二つをうくるなり。是には病なしといへども。內には喜怒憂思悲恐驚の七つあり。外ゐは風寒暑濕燥熱の六つありて。內と外との邪氣ゐ感せられて病をうくるなり。淨土はしからず分段の生をうけず。內外のさいりなき故ゐ病苦をうけざるなり。又此土ゐは無常の死苦をうくるなり。是又老たるも若も。貴もいやしきものがるゝ事なきなり。淨土は壽命無

量なれば死苦をうくる事なし。又此土ゐは父母妻子又はしたしき中わかるゝ事あり。されば古人も死のわかれよりは生てのわかれ。分てくるしきものなりといへり。浄土ゐハ父母妻子なければ靴愛別離のくるしみなし。さて又此土にハ怨憎會のくるしみあり。怨はうらみ憎にくむ會ハあつまると訓ず。此土のならひハうらみふくむものといへども是非なく一處ゐあつまり居事あり。此のときはいかばかりたへがたき苦しみなり。たとへば姉姑繼子繼母なんどの一家ゐ住居せる等のごとし。浄土ゐは諸上善人俱會一處と云て。常住觀音勢至。文殊普賢等の諸聖人と手に手を取り。共に行。共にあそぶ。何の怨憎と云事かあらんとなり。又此土には生計の人事ゐくるしみて。且ゐハ私の宅をいでゝ南北にいとなみ東西ゐはしる。如レ是そる事。日をかさね月を積といへども一生足たる事なしむなしく過ぬる。此くるしみ一旦のなやみならず來生の苦果となるなり。浄土ハしからず一切能滿足の國界なる故ゐ。一事として心ゐかなはずと云ことなし。故ゐ求不得の苦なし。又此土の身ハ色受想行識を以て成せり。故ゐ一旦さかんなるかと思へどもおとよりもをとろへ行のくるしみあり浄土ゐ生ずるところの聖衆ハ。觀照空寂ゐして飲食を以て成そる身にあらず。故ゐ衰患あることなし已（浄土決疑集の）如レ是。樂ゐるを以ての故ゐ極樂と云ふなり。然に今此浄土を建立ましまそ事。ひとへに唯知作惡の衆生の。諸佛の浄土ゐさらはれたるを。引入したまはんとの義なり。

本願を信じ。名號をとなふとれよそなる佛の功德とおもふて。名號に功をいれなは。なとか。往生をとげざらん。なんどおもはんは。かなしかるべきことなり。ひしと。われらが往生成就せしがたを。南無阿彌陀佛とは。いひけるをいふ。信心おこりぬれは。佛躰すなはち。われらが往生の行なるがゆへに。一聲のところに。往生を決定するなり。

〔七十二〕他佛の辨別幷ゐひつしの字義

此一義は本願念佛の行者の。聽聞そるところの心得を云ふなり。初よりかなしかるべきことなりと云ふまでは。聞ゐやまることを釋し。ひしと云よりは正き行者の信を決定せる事を云なり　よその佛とは。十方の他佛の義ゐはあらず。阿彌陀佛を外ゐ存するなど云ふ義なり。但唯心の彌陀。己身の浄土なんどゝいへる他師の心得あり。今は此義ゐあらず。唯。本願ゐもとつき。全躰無二ゐして口ゐ南無阿彌陀佛と。となふるが。機法不二ゐして

其まゝの佛躰なる故に外にあるほとけを。今爰にとなふるとこゝろうべからずとなり。ひしと云或一義に非特と書といへり。よろしからざるをや必至なるべし。或云必の一字をもひ。つしとよませり。能く理にかなへるにや云。

阿彌陀佛といふ。名號をさゝげ。やゝて。わが往生とこゝろ。わが往生とこゝろにはすなはち。佛の正覺也とこゝろうべからず。

此一截は。上にも此のこゝろありといへども。今爰のこゝろは。名號を聞ば取もなをさず我が往生と存せよ。又我往生の躰は全く是れ佛の御正覺のところなりと。打かへし〳〵して。もと機法一躰たるところを示の段なり。

彌陀佛は。正覺成したまへるか。いまだ成じたまはざるかをば。うたがふべからず。ふとゝ。わが往生の成ずるか成ぜざるかをは。うたがふべからず。

此一截は。ふかく信をそゝめましますなり。正覺をうたがい我等が往生を成就し玉へるの能成の智覺をうたがふなり。然れば所成たる我等が往生立せる事あらんや。今いつよく信心をつのらせ玉ふの段なり。故に彌陀佛の上ゝたとひと云ふ語をきて見べきところなり

一衆生のうへにも。往生せぬことあらばふべからず。こゝをこゝろうるを。第十八の願をもひわくとはいふなり。

此一截ハ第十八の誓約のもとをいへり。其故は願文に十方衆生とちかひたまひしゆゑ〳〵。佛は正覺なりたまへる故に。若し一衆生なりとも本願に心をかけたらんもの往生せずば。御正覺をば遂玉はじとなり。然ゝ御正覺すでゝ成し玉へり。衆生の往生何のうたがふ事あらんやとなり。因て十方衆生一機としてすて玉はず。皆往生せしめ玉ふ事願王のこゝろなり。然ば衆生の往生するを見ていゝ。御正覺のまことなることをしり。御正覺まことなるを以て衆生の往生のむなしからざる事をしるべし。問ふ二つながらあきらかならず。一には衆生の往生のむなしからずと。一ゝは御正覺まことなるなり。答往生むなしからぬ事。處處の傳記ゝ載て是あり。又御正覺まことなること空師の撰擇集ゝ問答決疑してのべ玉へり往てしるべしこゝるうる已下ハ結語なり是ハ何より結するぞと云ふに。上の本願を信じ名号となふるとも已下の結勸たるべし。

まことに。往生せんとおもはゝ。衆生こゝろ。願をゝもをこし行をゝはげむ

へきに。願行は。菩薩のところにはげみて。感果は。われらがところに成ず。世間出世の。因果のことわりに超異せり。和尚はこれを。別異に弘願とほめたまへり。

答此一截は。上來願行具足せると云ふにうけて。願行具足する事は聖道淨土。通じて是あるに。聖道は願行ともお機の方お成そるなり。是ハ一代の通法度と云ふて道理のなすところなり。さて淨土門。彌陀不共の別願と云ふハ。彼とハ同じからず。衆生のなすところの願行の因業をば。法藏菩薩十劫正覺のみぎりに。あなたお成じ玉ひぬ。さてうるところの果ハ我等衆生のところにあるなり。此即ち因果不隨順お。隨順せる事。餘門になきところの善惡彌陀超世の別願ぞと云ふ事をあらはせなり

問されば聖道の意ハ。他のなすところの善惡の業因を自のうくると云ふ事なく。又自のなすところ他おむくふ事なし。法句經お云く。神自能救レ神。他人安能救。自行レ善知二是最能自救一矣。此即ち他作自受をゆるさゝるの證文なり。又大乘義章お云ふ。佛法無有二自作他受一。亦無二他作自受一。雖レ無二自業他受一。非レ無二彼此互相緣助一。是は他作自受。自作他受をゆるさずといへども。たがひおたそけとなることをばゆるせり。但し今彌陀他力の別願は。他力の中の他力おして餘門に混せざる法門なり。故お彌陀の教願おをいては。不可思議の妙用なるを以ての故に。一代通漫の丈尺を以てはからひ難ずる事なかれと云。世間出世の因果とは。世間と出世間とそへて云に。天台止觀の中お十界をあかせり。於は世ハ即ち隔別の義なり。間は間差の義なり。是は有漏の法なり。此の有漏世間を出過するを無漏出世間と云ふなり

答世出世間の相そへて云に。天台止觀の中お十界をあかせり。於中。六凡四聖と云て。初め六は世間の因果。後の四つハ出世間の因果なり。六凡とはいわゆる地獄餓鬼畜生修羅人間天上なり。四聖とは聲聞緣覺菩薩佛果なり。一に地獄の因果とは謂く不善の業。放逸の主として十惡等の諸罪等をつくるを因として。等活等の八大地獄。及び一百三十六地獄に墮在するは是果なり。二ハ餓鬼の因果とハ不善業たる。慳貪嫉妬を主として。無財等の三種九種の餓鬼道に墮在そるは是れ其の果なり。三にもろ〳〵の不善業たるを以て因として。中品の十惡等をつくり。或ハ愚痴をあるじとして。中品の五逆十惡等をつくり。或ハ愚痴無慚にしていたづらお。信施をうけ。或ハ他物をうけてむくひかへさゝる等は是れ其因なり。此因によつて禽獸等の七類。羽毛等の四種の生をうくるは果なり。四にはもろ

〳〵の不善業たる○憍慢心を主として諂曲矯心を以て布施をなし○或ハ常に他ゐすぐれんと欲し○或は人をかろしめて己が身をたかぶる事たとへば○鳶の高く虚空ゐあがりて下し見がごとく又外には仁義禮智信をあらはして○下品の善心をこしぬるを修因としては○修羅道の果をうくるなり○五ゐ諸〳〵の散善業たる○五戒を主として○もろ〳〵の善業をなすは人道の因なり○是を以て須彌の四州に生ずるハ是れ其の果なり○六ゐもろ〳〵の散善業たる十善を主として○もろ〳〵の善業を修するは是れ其因なり○さて四王○忉利等の六天に生ずるは是果なり○又四禪八定を修そるは因なり○色界○無色界に生ずるは果なり已上○是は六凡有漏世間の因果なり○七に四諦十六行相等を修するは聲聞の因なり○三道四果をうるは聲聞の果なり○八ゐ十二因緣を修そるは緣覺の因なり○證菩提を成そるハ緣覺の果なり九に六度万行を修そるは菩薩の因なり○後に成佛を期するは是菩薩の果なり○此外菩薩の因果○其の種ゐはし且〳〵畧レ之○十に一斷一切斷○一理一切理にして地位の漸次をからず○諸乘一佛乘と談じて佛因○卽ち佛果の妙術なりと云ふを佛乘の因果と云なり○已上四を出世間の因果と云ふなり已上○今いはゆる出世間の因果○毫釐もたがふ事なし善導釋して云〻若作二苦因一卽

感二苦果一若作二樂因一卽感二樂果一○如二似以印印レ泥印壞文成二不レ得レ疑也一已上○みな是自業自得の謂なり○故ゐ因をば春さく華ゐたとへ○果をば秋みのる菓ゐたとふるなり因果は一具の前後したるものなり○然を阿彌陀佛の別願いしからず○願○行の因は佛邊ゐありて○うるところの果は衆生のところにあり○是を超異とは超と異と相違釋なり○異ハ別異なり○其故ハ超は超越超過の義なり○與世超異○我建超世願これなり彌陀の本願は諸佛になきところの超世の別異願なる故になり○一代通途のをしへは○因果ともに機に修し機ゐうるなり○如レ是をしへ聖道門ゐ曾なきところなり○讃文ゐ○聖道門の人いみな○自力の心をむねとして他力不思議ゐ入ぬれば○義なきを義とすと信知せりとの玉へるも○此等の別異のこゝろなり○和尚これを別異の弘願とはめ玉へりとは○和尚は善導大師をさすなり○觀經玄義分に云○安樂能人顯二彰別意之弘願一○言二弘願一者如二大經說一○一切善惡凡夫得レ生者○莫レ不下皆乘二阿彌陀佛大願業力一爲中增上緣上也○此文のこゝろなり○但し和尚は別意と釋し今は別異とあり○然れども義を以て解するゐ一家の釋は別異の意と云ふ義なり○

衆生にかはりて。願行を成ずること。常没の衆生をさきとして。善人にをよぶまで。一衆生のうへにもおよばざるところあらば。大悲の願満足すべからず。

〔七十五〕涅槃七種の機并ニ隨釋

〇此一截は上來に彌陀の願行成就の相を。或は機法一躰と云。或は名躰不二の沙汰等を。十方衆生等と云て。みな凡夫に約しての玉へども。今愛ニ別して衆生ニかはりて。願行成就ましくし機をあげ玉ふに悪人凡夫のみにあらず。善人ニも及ぼすとなり。是れ併ながら本爲凡夫兼爲聖人の宗旨たるを以ての故に。今も常没の衆生をさきとし善人ニをよぼすとはいへり 〇常没の衆生とは凡そ衆生を云に七種の差別あり。一ニ常没。二には暫出還没。三には出已則住。四ニは出已遍觀二四方一。五には遍觀已行。六には行已復住。七には水陸俱行くと已上一に常没と云ふは。たとへば恒河の中ニ大魚あつて。大悪業の身をうけて其の身重を以ての故に常に深ところニをるを常没と云なり。是をば一闡提の人にたとふるなり。二ニは暫出還没とは。此大魚たま〳〵浅ところへいで〳〵日月等の光明を見といへども。本と身ニもさを以ての故に又もとの深さところへしづむなり。是れ過悪の人にたとふるなり。三には没しをはりて出。いでをはりて住して。ふたゝび深にかへらざるなり。是は聲聞の三賢。四善根のものにたとふるなり。四には入りをはりて即ち没す。没しをはりて還て出。いでをはりて即ち住して。あまねく四方を見なり。是は四果の聲聞ニたとふるなり。五ニは入りをはりて即しづむ。沈をはりて便ち出。いでをはりて即ち住す。住しをはりて四方を見四方を見をはりて即ち去る。是は縁覺ニたとふるなり。六には入をはりて即ちさりてあさきところニ住す。是れ菩薩ニたとふるなり。七ニは入りそでに向の岸ニいたり。大山にのぼり更ニをそるゝ事なくもろ〳〵の。怨賊をはなれて大快樂をうくるなり。是をば佛にたとふるなり（涅槃經三十七）。此即ち彌陀の本願は斯のごときの機にてもすてたまはずと云ことなり。されば一衆生なりともらし玉はゞ。大悲の本願満足といふ義にはあらざるなり 〇或

〔七十六〕齋の桓公の仁白鳥にはとこその沙汰

人にたとふるなり。三には没しをはりて出。いでをはりて住して。ふたゝび深にかへらざるなり。是は聲聞の三賢。四善根のものにたとふるなり。四には入りをはりて即ち没す。没しをはりて還て出。いでをはりて即ち住して。あまねく四方を見なり。是は四果の聲聞ニたとふるなり。五ニは入りをはりて即しづむ。沈をはりて便ち出。いでをはりて即ち住す。住しをはりて四方を見四方を見をはりて即ち去る。是は縁覺ニたとふるなり。六には入をはりて即ちさりてあさきところニ住す。是れ菩薩ニたとふるなり。七ニは入りそでに向の岸ニいたり。大山にのぼり更ニをそるゝ事なくもろ〳〵の。怨賊をはなれて大快樂をうくるなり。是をば佛にたとふるなり（涅槃經三十七）。此即ち彌陀の本願は斯のごときの機にてもすてたまはずと云ことなり。されば一衆生なりともらし玉はゞ。大悲の本願満足といふ義にはあらざるなり 〇或

齊の桓公の仁白鳥にはとこその沙汰

ときニ齊の桓公のいはく。一物なりとも朕がめぐるところのいたらざる事あらば寡人（桓公）咄々たりと。爰ニ白鳥（蚊のこと也）營々とよびまいれども翠紗の幬（蚊屋）をつくりてふせぐ故ニ白鳥必ずうゆる。是寡人が仁のいたらざるところなりとて。蚊帳をひらいて蚊の入てくらふにまかす。於レ中禮をしる蚊は公の肉をくらはずして退ぬ。さて足ことをしるものゝ公の肉をくら

ふて去りぬ。また足ことをしらざれは公の肉をあくまでくらふて。已れが腹潰やぶれて死すといへり（金樓子に出たり）世間にをいて仁慈ある人ハ。一切ゐめぐみをほどこせり。況や三世諸佛の法王たる大悲の弘願。何ぞ一切衆生ゐ及ほし給はざらんやと云。

面面衆生の機ことに。願行成就せしとき。佛は正覺を成し。凡夫は往生せしなり。

㊣此一截ハ凡夫の往生と。佛の正覺と不二なることをあかす。謂く。世人おもはらく正覺ハさきに成し給ひ。此の覺成の功熏ゐよつて凡夫。後ゐ往生すと前後に立て見なり。一往は理ゐかなふといへども。それはそれ權門のわつかひなり。實大乘のこゝろはしからず。千里の功は一歩にあり。初一念の處より外に二念はなきなり。故にしる初め凡夫往生のためゐ發玉へる願躰の外に。凡夫往生の理はなきなり。

かゝる不思議の名號。ゐしきこゝざるところあらは。正覺とらじと。ちかひたまへり。

㊣此一截ハ。佛意の方に願行具足の名号を成就し玉ひて。衆生の往生をさだめ玉ふといへども。此の名号の聞へざること一世界としてなきと云ことをのべ給へり。但し作者の私の了簡にあらず。其證ある事なり。第十七の願是なり。又三誓の偈に云。我至レ成二佛道一名聲超二十方一究竟靡レ所レ聞誓不レ成二正覺一已。爰を正信偈には重誓名聲聞十方との給へる是なり。

われらすでに。阿彌陀といふ名號をきく。しるべし。われらか。往生すでに成せりといふことを。

㊣此一截ハ。上のごとく名号の聞ざるところなしといふいはれをしるせり。謂く我等いま此名号を聞く往生成就せりと云事あきらけきものをやと云。

きくといふは。たゝおほやうに。名號をきくにあらす。本願他力の不思議をきゝてうたがはさるを。きくとはいふなり。

㊣此一截は名号の聞やうを云なり。いかゐ佛の方ゐ願行成じ給ふ。名号をかまへ給ふといへども。聞ざるときは其詮なきなり。されば此土ゐハ耳聞悟道を以て先とせり首經の中ゐ二

十五の圓通ある。ときゐ佛文殊ゐ勅して評せしめ給ふゐ。文殊の云く此の土にをいていい觀音の聞聲悟道を以て勝たりと云へり。今も亦しかなり。念佛の行者ゐをいて聞ゐ非ば本願不可思議の法ゐあふ事あらんや。されば聞法の徳あさからざるぞや。華嚴經ゐ云。寧受二地獄苦一得レ聞二諸佛名一矣。故ゐ又云。一得レ聞二佛名一決定成二菩提一已。況や彌陀の本願をや。然るも彌陀の本願。他力の教法ゐをいては。唯一往の聞ゐいあらざるなり。敎行證ゐ云。經言レ聞者衆生聞二佛願生起本末一無レ有二疑心一是曰レ聞也已。又曰言レ聞者白レ信二於如來智之名一也云。

みなをきくも。本願より成してきく。一向に他力なり。

☒此一截は聞と云ゐついて。聞のもとをいふなり。謂く今大やうに聞にはあらず。本願他力の不思議をきいてうたがはざる事は。一往い機のもよをしによりて聞に似たりといへども。功をもとゐをして見るに佛願の廻施し給へるによつて聞なり。然ば願行成就して我等に施與し給へるも他力なり。又名号を聞く機となれるも他力なり。故ゐ爰を一向とはひとへに佛意ゐ依と云義なり。

〔七十八〕彌陀の像に向ひ名号をとなふるの要術

たひと。凡夫の往生。成じたまひたりとも。ろの願成就したまへる。みなをきかずは。いかでか。その願成せりとしるべき。かるがゆへに。名號をきゝても。形像を拜しても。わが往生を成したまへる。みなをきゝ。われらをわたさずは。佛にならじとちかひたまひし。法藏の誓願むなしからずして。正覺成じたまへる。御すがたよとおもはゞさらんは。きくともきかざるごとく。みるとも見ざるがごとし。

☒此の一截は名号を聞と形像をかみたてまつるとの二つを擧て。今爰ゐは形像を拜そるの一つをしめして名号を聞の理をしらせり。言こゝろは如來ををがみたてまつりても。唯西方極樂淨土の敎主とのみ思ふゐては其の詮なき事なり。此御すがたこそ我等をたすけんと思めして。五劫兆載永劫の御苦勞ましくくて。一切衆生の往生を御成就あそばしゝなりと。如レ是存じて名号を聞ばまことの。名号を聞ものなり。しからずば名号を聞と云ふゐはあらざるなり。此ときゐ何と名号を聞となふるとも往生ゐ不定なるべし。是をきくともきかざるがごとく見とも見さるがごとしとなり。此類をば清淨

〔七十九〕宿善開發の歡喜心を生ずるの辨

覺經ゐは宿善なく三惡道より始て來て。佛ゐ向ても更ゐ信なきものなりといへり。乎等覺經にのたまはく。淨土の法門をとくをきゝて。歡喜踊躍し。身の毛いよたつといふは。そゞろによろこぶにあらず。わゐ出離の行をはげまんとすれば。道心もなく。智慧もなし智目行足かけたる身なれば。たゞ三惡の火坑にしづむべき身なるを。願も行も。佛躰より成して。機法一躰の。正覺成じたまひけることの。うれしさよと。おもふとき。歡喜のあまり。をどりあがるほどに。うれしきなり。大經に爾時聞一念とも。聞名歡喜讚ともいふは。このこゝろなり。

〇此一截ゝ前の段ゐ對せるの釋なり。前は無宿善の機について名号を聞とも其の詮なきことをあかし。今ゝ宿善開發の機をあげて。名号を聞く事のよきことをあらはせるなり。今の文ゝ覺經の取意なり。善導定善義ゐ取意して言く。淸淨覺經に云。若人聞レ說二淨土法門一。聞已悲喜交流。身毛竪者當レ知此人過去已曾修二習此法一。今得二重聞一卽生二歡喜一。正念修行必得レ生也矣。具ゐゝ本文四卷にあり。淨土の法門とゝ二

意あり。一には一代經諸をさせなり。其故は如來出世の本意は念佛の法門を說がためなり。故に一代藏經ゝ淨土門のための權假の方便なる故に。二には惣して諸經の中に散して念佛の法門を說玉へるを云なり。歡喜とゝ二字ともによろこぶと訓ず。爾とも身ゐ歡ひ心に喜ふとしるべし。信の卷ゐ云。言二歡喜一者形二身心悅豫一之貌也。此すなはちふかくよろこぶ義なり。華嚴經ゐ云。念佛功德無量故。得レ生二廣大歡喜心一矣。踊躍とは二字ともをどると訓ず。是も亦身と心との二つにかけて見るへきなり。そゝろとゝ擯言とも坐言とも辛とも書なり。今ゝ權言の義よろしき歟。擯言とは世俗ゐたはことゝ訓也。然は人によろこふに似たれとも。眞實ならざるをそゝろとは云なり。故に今は眞實ゐ身毛もいよだつはどよろこぶと云義なり。智目行足とは智度論に云。智目行足到二淸涼池一矣。今は隨宜轉用す。謂く今ゝ道心の行の足もたゝず。三界を出離せべきの智慧の目もなきと云義なり。三惡火坑とは善導の釋ゐ云。三惡火坑臨臨欲レ人上。已。此語意を以てかけり。此卽罪惡の凡夫たる我等ぞと云ふ義なり。大經ゐ云とは二文ともゐ本經ゐは正く此文なし。一家の往生禮讚の文なり然るを大經ゐ云と云事。其例ゐることなり謂く諸師天親の無性論を引て

攝大乘論といへり。又慧心論註を引て淨土論と云がごとし。此卽本末もと一致なるを以ての故なり。但し相傳の一義に云。善導の疏は全く佛經と同し觀經疏四ヵ云く。一何一字不レ可二加減一。欲レ寫者一如二經法一應レ知矣。選擇集に云。條二錄觀經文義一之刻。頗感二靈瑞一屬預二聖冥加一。然造二經科文一。擧レ世而稱二證定疏一。人貴レ之如二佛經法一已。今善導の釋たりといへども。全く佛經と一意たり。故ヵ大經と云なり。

よそに。さしのけては。なくして。やがて。わが往生すでに成じたる名號。わが往生したる御すがたとみるを。名號をきくとも。形像をみるとも。いふなり。このことはりをこゝろうるを。本願を信知するにはいふなり。

此一截は名号を聞。佛をかむと云事。外ヵあると見べからず。宿善開發して佛をがみたてまつり。名号を聞ときは全く我等が當躰。佛のありさまなり。如レ是なるを名号を聞も。のとも佛をがみ見る人とも云ふなり。此義は上ふも粗ありといへども。別して爰に上を結んでの玉へるなり。但し聖道門唯理唯性の住意にしづみて。心外ヵ佛躰を求べからすといへ

るふは。少分も似べからずとしるべし。

念佛三昧にをいて。信心決定せんひとは。身も南無阿彌陀佛。こゝろも南無阿彌陀佛なりと。おもふべきなり。

此一截は正く是れ信心領解の相をしめす。念佛三昧とは觀佛經に云。念佛三昧者見二佛色身一了了分明一。亦見二佛心一。一切境界一已。智度論ヵ云。譬聞人及菩薩。修二念佛三昧一非二但念二佛身一。當レ念二佛種種功德一已。此等の念佛は諸佛ヵ通ずるなり。但し樂邦文類にハ諸經ヵあるところの念佛は。本意より見れは皆是彌陀念佛なりと云り。又天台十疑論に云。念佛三昧無漏善根所起已。是れ正く彌陀念佛なり。今爰にいふ念佛三昧ハしからず。安心決定たる口稱念佛三昧なり。上來ヵいふところの機法一躰。又ハ名体不二。又は願行具足の稱名念佛と云ふ是なり。三昧とは又は三摩提と是れ定の異名なり。蓮宗寶鑑ヵ云。祖師の序に曰。思專想寂志一不レ撓。氣虛神朗無二幽不一レ徹。入二斯定一者昧然忘レ知。塵累頓消澹情融朗。非二天下之至妙一熟能與二於此一矣。此卽ち念佛三昧定なり。如レ是念佛三昧の名義はないだ多し且く略レ之。問此等

〔八十二〕身の字義

のごときんば。今日散亂麁動の凡夫ゐもへめがたきは念佛三昧なり。今此の念佛三昧い常沒凡夫の所修なり加何通せんや。答三昧此ゐい等持と翻ず。是は等く持を等持とはいへりいふこゝろい心一境ゐたもつを云なり。此念佛は凡聖貴賤等。同一ゐ修したもつを以て念佛三昧と云なり。信心決定とは今の題の安心決定の信心なり。信心とは色々あれともすべて二つあり。一ゐい自力の信二ゐは他力の信心なり。此は是他力の信心決定なり。決定の相は上ゐあり

と云。

〔八十一〕人の身をは。地水火風の四大。より成ひて成す。小乘には。極微の所成といへり。

此の一截はじめには人身の所成をしめし。小乘等は一往小乘の說によるゐ。地水火風い亦是れ極微塵のつもりて此躰をば成そるなり

人身とい惣して人身とい地水火風の四つあつまりて身といなるなり。字書ゐ云。身總三括百骸一者已百法鈔ゐ云。身者積聚之義也矣。故ゐ身をゐつまると義訓せるなり。然とも地水火風の四つとゝのはざれば。此身をゐつめ成する事なし

たとへば乾ける麥の粉。又は灰なんをを合せかためんとすれともかたまらず。ときゐ水を以て糅とき和合せるなり。すでに和合せりといへとも其まゝすて置は爛壞せるものなり。故ゐ火を以てあぶるときはやぶれくさらぎるものなり。さて此まゝなるときい長ずることなし。故ゐ風を以て吹かはかすとき増するものなり。世ゐ五穀をうゆるに風のあたらざるところは草木生長せさるものゝことし（寶積經のこゝろなり）故に地水火風の。かりゐあつまりたるを人身といふ云なり

是を又四大と云ふ事は。地水火風の四は法界ゐ遍滿して廣大なるなり。いふこゝろは法界遍滿の地水火風があつまり。此身となる故なり大論ゐ云。如二佛說一四大無二處不一レ有。故名爲レ大矣。圓覺經に云。所謂髮毛爪齒乃至皆皈二於地一。唾涕膿血乃至皆皈二於水一。煖氣皈レ火。動轉皈レ風。已上みな是一身ゐ虛空界あつまる故ゐ四大といふ云なり。故ゐ一身の血相を表して地水火風の四大をは云なり。謂く此身相のごときんば頭の圓い天ゐかたどり。足のけたなるをば地ゐのつとるなり。内ゐ空なるところのあるい即ち是れ虛空界なり。腹のあたたかなるは春夏ゐのつとり。背のごときは秋冬ゐのつとり。四躰をば四時にかたどり。大骨十二は十二月なり。小骨三百六十い一年三百六十日なり。鼻口より出る氣息

〔八十三〕四大の名義並ゐ表相

四大所成の細釋

ば山谷の風にのつとり。兩眼い日月なり。兩眼の閉開するは晝夜にかたどり。髪は晨辰なり。眉は北斗なり。咏は江河。骨は玉石。皮肉は地土。毛は叢林。五藏は天にあつては五星。地にあつては五嶽なりといへり（宗鏡錄二十四にわり）如レ是廣大遍滿の四があつまりて。此身を成するといへども。今一往小乘の意よりみるに極微塵のあつまるところといへり 囚極微とい倶舍の頌曰。極微微金水兎羊牛隙塵蟣虱麥指節の後後增七倍。二十四指肘。さて此意は金の內をとほりてさいりなき塵を金塵と云ふ。微塵を七つあわりて其の一つを極微塵と云ふなり。さて小乘毘曇宗のこゝろは。此身分を空しくたきぬるお極微塵はさありといへり。故お此宗お法体ともに少いあるといへり。今爰お小乘淺劣の法を引く事は。大小乘の勝劣を論ずるおはあらず。一身のくだきて極微塵と云ことをうけて。此身を極微塵にくだきて見たるとも。報身阿彌陀如來の入そみたまはずと云ことなし。いんための言便なり。若し大乘の說お以ば。万法い唯心の所變にして皆是れ虛僞の相なり。故お今の所用お便よからざるを以ての故お擧用ざるなり。

身を極微にくだきてみるとも。報佛の功德の。ろまぬところはあるへからず。されば機法一躰の。身も南無阿彌陀佛なり。

囚是一截は四大所成の身を。極微塵お打くだきてみるに。阿彌陀佛の功德入りそまぬ事はなしといへり。今いふこゝろい眞宗念佛の行者。佛願他力お乘して身もこゝろも佛陀おまかせて南無阿彌陀佛ととなへ居たるは。心肝五臟。佛の御名ならざる事なし。故に是を機法一躰の南無阿彌陀佛なりと云ふ。報佛の功德とは外にもとむべからず。萬德所歸の南無阿彌陀佛是なり。

こゝろは煩惱隨煩惱等具足せり。刹那刹那に生滅す。こゝろを刹那にもはりてみるとも。彌陀の願行の遍ぜぬところなければ。機法一躰にしてこゝろも南無阿彌陀佛なり。

囚此一截い次上お四大所成の身を打くだきみるお。南無阿彌陀佛ならずと云ことい爰お色身のみおあらず。心法をくだきて見るに。又南無阿彌陀佛ならずと云ことなしとなり 囚煩惱隨煩惱とは。煩惱は止觀お云。煩惱是昏煩之法惱亂心神。又與レ心作レ煩 今ニ心得ニレ惱。弘決に云。三毒是能煩心神是所煩。次分レ字解煩爲ニ能煩一惱爲ニ

所惱一已。惣して是を俱舎唯識のこゝろ六あり。貪欲と瞋恚と愚癡と憍慢と疑貳と惡見となり。隨煩惱とは瑜伽論を云。從二煩惱一生故。親二近煩惱一故。隨二惱亂心一故。名二隨煩惱一是を二十種あり。唯識論の頌を云。隨煩惱謂。忿恨覆惱嫉慳誑諂與二害憍一無慚及无愧掉擧惛沈不信。並懈怠放逸。及失念散亂不正知已。刹那生滅とは圓暉師の云。刹那者是時極少也。衆緣和合法得二自体一頃。又解對法諸師作二如レ是說一。由如下壯士一度彈指頃六十五刹那上。如レ是名爲二一刹那一量一上已。言は煩惱隨煩惱ともにといまる事生滅し行なり。首經に云。刹那刹那念念之間不レ得二停住一上已。瑜伽論に云。有情世間刹那刹那各各肉身任運壞滅上已。ちりとゝ打破なりとうの字は畧なり。此例の和語の中ゝはなゝだ多し鳥立なんどのごとし然ゝ色心二法ともゝ佛功德の入そみ。みたずと云ことなし。

彌陀大悲のむねのうちに。かの常沒の衆生。みち〳〵たるゆへに。機法一躰にして。南無阿彌陀佛なり。われらが迷倒のこゝろのそこには。法界身の佛の功德。みち〳〵たまへるゆへに。また機法一躰にして南無阿彌陀佛なり。

※此の一段ゝ上ゝ凡身即佛身に入みちたるを以て機法一体の南無阿彌陀佛と云ひ下は凡身ゝ佛身入り玉ふを以て機法一躰の南然阿彌陀佛と云なり。宗鏡錄ゝ云。諸佛法身入二我身一猶若二磨尼珠一。諸佛法身入二我躰一。我身常入二諸佛軀一。然雖二五入一而无二所入一。若有二所入一應レ有二能入一。即滅二二法一上已。此說ありといへども是は理性平等に約して是を云ふ。今はしからず本と凡身佛身二つに立て上ゝ尊く佛を信するのところゝ。佛身と凡身と一体の得益ある事をおかす。故ゝ別なり。但し今の機法一躰のところは。事理性相の分別を以て論ずる事なかれ。唯是れ不可稱不可說のところなり。迷倒とは迷惑顚倒なり。常沒の衆生と全く同なり。法界身は彌陀をさすなり。下にいたりて解すべきなり。

淨土の依正二報も。またしかなり。依報は。寶樹の葉ひとつも。極惡のわれらが。ためならぬことなければ。機法一躰にして。南無阿彌陀佛なり。正報は。眉間の白毫相より。千輻輪のあなうらにいたるまで。常沒の衆生の。願行成就せる。御かたちなるゆへに。また機法一躰にして南無阿

〔八十六〕白毫相並に輪相の引文

彌陀佛なり。

○此一截ハ遠く淨土の境を取つて機法一躰の理をあかす○是に二つ○一ハ依報に約し○二に正法ヲ約すれば○淨土の依正を論ずるヲ○天親の往生論によるヲ○依報に十七○正法ヲ十二あり○實は是依正ともに無量なり○淨土等の十四字は上をうくる結前生後の言なり○問淨土の依正二報何ぞ機法一躰の證となるや○答ふ淨土の妙境界相は佛心の所現なり○佛心無漏なれば所現の土無漏なりといへる是なり○然に佛心ハ何ぞや謂く大慈悲心是なり○此の大慈悲心より建立し玉ふ淨土なるが故に○淨土こと〴〵く是衆生のためならずと云ことなし○示現自利利他との玉へる是なり○寶樹の葉とは依報の中ヲ一つを擧て自餘をしらせり○眉間白毫相より千輻輪とは○一身の衆相の中に始終を擧玉へり○此ハ三十二相の中の隨一隨二なり

○白毫相とハ演義鈔ヲ云○放眉間光等者表レ離二二邊一故於レ体不レ計二有無一邊○於レ義不レ着二常無常等諸法相邊一○於レ行不レ習二苦樂二邊一○於レ果二邊○於レ教不レ說二世出世二邊一○於レ諦不レ道不レ住二邪正二邊一○於レ人不レ執二因果二邊一○於レ證不レ見二眞俗二邊一○是故爲レ衆放二眉間光一矣。千輻輪とハ足下の相なり○大品ヲ云○從二足下千輻輪相中一放二六百千万億光明一矣。蓮嚴經ヲ云○世尊從二兩足輪下一放二百億光明一照二此三千大千世界一矣。此二相は三十二相の中なり○然は惡佛の所具なり○今は淨土報佛の正報をあかす。まことヲ不在なるヲ似たれども○是は一往正報の相をあらハすのみ○例せハ上ヲ小乘の極微塵を取て沙汰せるがことしとなり。

〔八十七〕道心の二字並に四威儀の註

われらが○道心二法○三業四威儀○すべて報佛の功德の。いたらぬところなければ。南無の機と阿彌陀佛のみな。南無阿彌陀佛なり。

○此一截ハ行者の平生の作畧ヲついて。機法一躰の相をあかすなり

○道心とは道と心との二法なり○道は所修の行法なり○心は能修の心法なり○道は佛道なり○諸法無行經ヲ云○色性卽是道○色性佛道之一也矣。又云菩提とは此ヲハ道と云ふ卽ち佛果の名なり○謂く衆生○心をおこして佛果を成せんと欲するを發菩提心と云なり○三業は身口意なり○謂く三業の所修○行者のはげまし修せるヲハらず○如來所施の願心にもよをされてをこるとこ

ろなり。聖人讃文ゐ諸佛三業荘嚴して。畢竟成佛なることゝ。衆生虛誑の身口意を。治せんがために。この玉へる是なり。よく〳〵しるべし。四威儀とゝ行住坐臥是を四威儀と云ふ左傳に云有レ威而可レ畏謂二之威一儀。いはく行者の平生の身もち作法を以て四威儀と云なり。一家善導の釋ゐ云。一心專念彌陀名号。行住坐臥。不問時節久近。念念不捨者。是名正定之業。順彼佛願故。已。此文ゐついて流義にしたかふて執見ある事ゐてさふらう。今當流の意は佛意所發のなすところと見るなり。此釋文ゐもとつきて見るゐ。行住坐臥のふるまひ。行者の所作たりといへども。身もこゝろも南無阿彌陀佛となり得たる行人の行住坐臥。報佛の功德のいたらざる事なしとなんの玉へるなり。念念みな南無阿彌陀佛なりとは。天台止觀に云。歩歩聲聲念念在二阿彌陀佛一云云此の語によるといへども大同少異あり。最も用捨あるべし。天台は他力の自力に約するの釋なり。今は他力の中の他力なりまさゐしるべし。

されば。いづるいきいるいきも。佛の功德ゐといひしひとは。常に水觀なしゝかば南無阿彌陀佛なり。縛曰羅胄地と

こゝろにひかれて。身もひとつの池となりき。その法にそみぬれば。色心二法。ろれになりかへることなり。

此一截は色心二法不二の例を擧て。以て下の身もこゝろも南無阿彌陀佛といへん山序なり

縛曰羅胄地とは此云二金剛智一南印度摩賴耶國之人也。父婆羅門善二五明一。爲二建支王師一。智生數歲。日誦二万言一。年十五開二悟佛理一。遂出家。隨レ師。中印度那蘭陀寺學二阿毘達摩等一。兼學二小乘諸論一。十餘年。歩遊二經律論三藏一。聞二支那佛法崇盛一。乃泛レ船而來。開元七年達二於廣府一。次年至レ京。勅迎舍二大慈恩寺一。廣弘二秘密一。建二曼荼羅法一。尋徙二薦福寺一。大智道顒大慧也一行二禪師一。不空三藏皆師二事之一。智所レ譯經一行多預焉。一行掌二其壇法儀制一。開元二十年八月十五日。於二洛陽廣福寺一。命二門人一曰。白日圓時。吾當レ去矣。遂禮二毘盧遮那佛一旋遶七匝。退坂二本院一。焚レ香發願。頂二戴梵夾一。並新譯教法一。付屬訖。寂然而化。壽七十一。臘五十一。十一月七日葬二龍門南伊川之右一。第子不空奏

〔八十九〕月光童子水因悟道

みことのりをはうしてくゐんちやうこくしとなりぬちうしよじらうとうせんに奉レ勅 謚二灌頂國師一勅二中書侍郎杜鴻漸一撰二紀德碑一傳意也已上高僧○此の外に諸佛に見えたり○然とも金剛智三藏の水觀を修せられし事いまた見ず○是によりて密家に入て是を聞くにつまびらかならず○若又別人にあるか是又しらざるところなり○唯博學の君子を待のみ○但し水觀を修する事い元首經より出たり 〆そのかみ月光童子○比丘たりしとき水觀せしとき○室中に安禪せるお月光お弟子あり○窓より此の室中をうかゞひ見るお清水みちくてあり○弟子をもへらく是つねお見さるところなりとて○一つの死のわれたるを以て水中おなげいるゝお死○水おあたりて墜をなして入ぬ○さて弟子はしりぞきぬ○ときに定より出ぬるに○にわかお心いたみぬ○其とき弟子比丘の前おきたりて上の窓より死傑をなげいれし事をかたるなり○比丘告て云○汝お更お清水を見い即ち門をひらきてさきお入し死礫をとり去るべしと○如レ此 約言しをはりて又定お入玉ふお○弟子門をひらき見るに清水の中お本の死傑を見る○此とき此をとり去りぬ○然して比丘○定より出玉ふに故のごとくして心痛なかりきと已上經文 是れ其の水觀のはしめなり○是おならふて以後も水觀を修せし人おりとなんいへり○張無盡か云○漢州綿州縣有二水觀和尚故跡一矣 〆されば唐の高

〔九十〕法進水

僧傳をみるお○法進といへるは水觀を修せるなり○人をして水觀ををしゆるに先づ繩床に安坐して水觀を修せしめ○繩床の上を見たるおことくくく清水たり○家人白石二つをひろふて水中おなぐるなり○さて法進水觀よりいでゝ所住の玉女寺にかへるお背痛ことををぼふ○家人お其の故を問に右のことくかたる○さて翌日又彼か家おいたりて白石を去るべしと云ふて○又坐禪せしに家人往て見るお又もとのごとく清水となる○即ち水中お右の白石あり○此の石をとる○是より定を出ぬるに苦痛さらになしと云云 此等の諸縁を見るお皆是色心二法不二なる故なり○異本お常 水觀と云て○二文字のなきあり○よろしからざるをや○色心二法異本に色身正法とあり○又色心正 法とあり○ともおよろしからずいふこゝろい上おこゝろにひかれて身もひとつの池とあり○是を下にことはりて色心二法とはいへり。

念佛三昧の領解ひらけなは。身もこゝろも。南無阿彌陀佛なり。かへりて。その領解。ことばにあらはるゝとき。南無阿彌陀佛とまうすか。うるはしき弘願の念佛にてあるなり。

○此一截は口稱念佛の功能をあかすなり。かへりてとは上の念佛三昧の領解と云は。唯た是れ心念のところなり。此心念自ら口あらはして南無阿彌陀佛となふる故に。心念かへりて口稱にあらはるゝを云ふなり。是をうるはしき念佛とはいはめ玉へり。うるはしき美の字なり。又麤の字なり。ほめたる詞なり。歌書の中ゐ多く此のことばをつかふなり。大やうはめたるの詞に用ゆるなり。されば第十八の本願念佛と云ふは信心領解の上に口あをのづからあらはるゝ南無阿彌陀佛なりと。これこそ眞實の念佛そとはめたるなり。

念佛といふは。かならずしも口に南無阿彌陀佛と。となふるのにみあらず阿彌陀佛の功德われらが南無の機にをいて。十劫正覺の刹那より。成しいりたまひけるものをといふ。信心おこるを念佛といふなり。さてこの領解をことはりあらはせば。南無阿彌陀佛といふにてあるなり。

○此一截は上ゐ念佛三昧と云ふをうけて。凡そ念佛と云ふい。諸師解すらくは念は是れ意念を躰とそと云ふて。觀念の念佛なんどゝいへり。是を善導懷感等佛意をさぐりて念唱是一の釋をまうけ玉ひて。念佛は是れ稱佛の義なりといへり。是ゐついてをしなめて念佛い是れ口

稱の義と心得なり。今又解そらく必そ一途ゐ念佛は口稱のみゐあらず。信心領解をも又た念佛と云ふなりと云ふ。

○此一截は十劫正覺の御こゝろをあかそゐ。其義無量なりといへとも。今畧して四の故を擧玉へり。一には大慈悲を本とせり。二には愚鈍の機を先とし玉へり。三には名躰不二の故ゐ四ゐは相卽互入の義。一ゐは大慈悲を本とし玉へる故とは。佛心者大慈悲是。以無緣慈攝諸衆生のこゝろ是なり。然ゐ大慈悲は諸佛通用の法たりといへとも。彌陀如來は正道大慈悲出世善根生の超世別願の敎主なる故に。專て大慈悲を本とし玉へるは彌陀なりと云ふなり。二には愚鈍を度し玉ふを先とし玉ふとは。本爲凡夫兼爲聖人のこゝろなり。一家の釋は諸佛大悲於三苦者一。心偏愍三念常沒衆生一。是以勤修二淨土一。亦如三溺レ水之人急須二偏救一。岸上之者何一用レ濟。爲已。この釋の意なり。三には名躰不二とは前ゐつ

くすごとく名のところを躰を具足する事。機に自知する理事無導のところにありといへども愚迷作惡の凡夫佛願を託そるとき不知不覺の機の上にをいて此理にかなふ事。更を十劫正覺の彌陀の誓願より外をはなきなり。四に一相即互入の義をあかすとは。謂く佛体も名を躰をもむくと云ふときは。阿彌陀如來相好圓滿の躰の中には。あらゆる三身四智十力四無畏十八不共法の内證の功德。又神通光明等の外用の功德ことく〳〵具足し玉へり。此佛躰の功德全く南無阿彌陀佛の御名に具足せり。是ををもむくと云ふなり。爰を以て名のところを躰の功德を具足せりとの玉へり。已上四の故は佛のこゝろなり。此をなはち下の平信のものもとなふれは往生するぞといはんの由致なり。

なにと。はかばかしく。しらねども。平信のひとゝもなふれば。往生するなり。されども。下根の凡夫なる故に。そぐろに。ひら信も。かなふべからず。そのことはりをきゝひらくとき。信心はをこるなり。

此一截の上の四の故をよつて信するの機をあらはすなり。なにとをとの佛願生起のことはりをも。わきまへしらざるを何とは云ふなり。いかゝ〳〵しらねとは。世俗をものゝはしくをも心得ぬを云なり。さて今のこゝろの佛願生起のことはりをもしらねども。唯眞平に眞實に信すれば淨土に往生をとぐるなり。しかれとも下根下劣の衆生なる故に。そゝろなる平信心ならば往生かなふべからずとなり。そゝろの平信とは上をいふごとく。眞實ならざるをそゝろとは云ふなり。そのことはり已下の平信ならざる眞實信心の行者を云なり。

念佛をまうすとも。往生せぬをば。名義に相應せざるゆへにこころ。疊

此一截の上に三種を立るなり。一には眞實の平信心往生すへからず。三には佛願のことはりを能く聽聞して信そるは尚是れ往生そるなり

信心往生なり。二には眞實ならざる平

是に次て又念佛まうすとも。名義相應とをよりて。往生の定不定を沙汰せり。今爰に釋せられさふらふ懷師の註解せらるゝとは。異義たるに似たれとも更を別異いなきなり。まつ懷師のこゝろは論註に云く。有下稱名憶念而无明由存而不レ滿二所願一者上。何者由下不二如レ實修行一與二名義一不中相應上故也一云何爲下不二如レ實修行一

與三名義二不相相應。謂不レ知二如來是實相身是爲佛身一。又有二三種不相應一。
一者信心不レ淳若存若亡故。二者信心不二相續一餘念間故。上此中ハ二義あり。今は初の義を以て合釋せり。名義とは名は名号。即ち十八の願の心なり。義は光明。即ち十二の願の心なり此の二つは如來大悲の願の本なり。故ゆへに聖人の光明壽命の誓願を大悲の本とし玉へるとの給ふ是なり。善導の以光明名号攝化十方と釋し玉へるも又此意なり。今すでに爾なり阿彌陀佛の成し玉へる。南無阿彌陀佛の功徳力ゐよつて往生をえると思ひとりてまうす念佛。全く總師の名義相應との玉へると絲毫もたがふ事なし。故ゆへ引き用て今の意を釋せり。功徳力とハ彌陀如來。無量の功徳の中ゐ別して衆生のため力用たるは光明名号の二つなり。故ゆへ功徳力とハ云なり。

領解の信心を。まとばにあらはすゆへに。南無阿彌陀佛の六字を。よくこゝろうるを。三心をいふなり。

此一截ハ領解の信心をことばにあらハしてこゝろえたるの三心と云ことを擧なり。領解の上の口稱念佛を以て六字をよくこゝろうるとハ。如來の我等衆生にはやこし玉ふ御名なりと領解して其上に口に南無阿彌陀佛ととなふる此即ち六字を能く心得たる人なり。此をまことの三心といふなり。今此のところをは下を上ねとりて見るときは。よくきこえるなり。謂く南無阿彌陀佛の六字をよくこゝろうるを三心と云ふとは。領解の信心をことばゐあらハしてまうす念佛なりと云但し此の願行につい多くは。願は機の方。行ハ佛意ゐありと沙汰せり今はしからず。願行ともゐ。佛意ゐあり としるべし。さて三心とは觀經と諸經とにあり。觀經に云。一者至誠心。二者深心三者廻向發願心。已上大經には至心信樂欲生我國已上。今此の觀經の三心ゐ自利と利他との二種あり。大經の三心ハ唯是利他の三心なり。廣多なる故に之レ畧。今いふところの三心は利他の三心としるべし。

かるがゆへに。佛の功徳ひしと。わが身に成したりとおもふて。口に南無阿彌陀佛ととなふるが三心具足の念佛にてあるなり。

此一截は三心具足の相をあかす。異流には竪の三心。横の三心なんどゝ云て。竪の三心は

觀經の三心と云ふなり。是には具不具の判釋あり。横の三心は大經の三心なり。是は一向ゐ三心具足せり。此の説ありて當流の正義にあらずなんどゝいへる人あり。其のいはれなきゐわらず聖人の御詞ゐ此義なきを以の故なり。但し義にをいては大やうたがはざる批判なり。然とも竪の三心の下に少相違せるの義あるゐや。是も聖人の觀經の三心をは。顯説の前にては定散自力の三心なりとの玉へり。此ときい自力のはげましゐてあるの間つ虚假疑心不廻向の一二三度等の具不具の義なきにいわらざるべし。唯今家聖人親鸞ごときんば。定散自力の三心をば捨て用ひ玉はず。偏へに利他の三心を以て御勧化なり。されば諸文に眞實信心ゐざるをば。一心かけぬと思ふべし。一心かけたる人はみな。三信具せずと思ふへしとの玉へり。今の心よくかなへりと見えたり。今私ゐかんがうるに。彌陀如來十劫正覺のとき。方行を御成就まし〳〵て此の萬行を六字の中ゐをさめ。此の六字の果分を一切衆生ゐ施與し玉へるを我等凡夫。此のことはりを聽聞して。さては佛功徳をばうけ得たりと。身にも心ゐもよろこびて。眞實心に是を信して口にをのづから南無阿彌陀佛ととなふるなり。此の中に自ら三心具足するなり。我身ゐ佛功徳を成せる事い。如來より廻施し玉ふと存そるは是廻向心なり。此の廻向心は佛のはぢこし玉ふ心なる故ゐ。彌陀廻向にして。機ゐをいては不廻向なりと信ずるは是深心なり。此深心。內心外相共ゐいつはりかざらざるは至誠心なり。故ゐ南無と信そる仮命の一念のところに三心具足そるなり。善導の釋に云。必須二決定眞實心中一至誠廻向一作二得生想一心廻向此心深一信由若二金剛一不下爲二一切異見異學別解別行人等一所動亂破壞上深心此の御釋を以て思ふゐ。三心本と佛意より衆生ゐはぢこし玉ふところゐ。そなはりてありぬ。然ときは行者此の所施の名号をとなふるときは。自然と三心具足となるなり。よく〳〵心得あるべきの安心なり。

自力のひとの念佛は。佛をばさしのけて。西方にをき。わが身をばしらなふるゆへに。佛と衆生と。うとく〳〵しくして。いさゝか道心おこりたるときは。往生もちかくをぼへ。念佛も申ものうく。道心もさめたるときは。往生もきはめて不定なり凡夫のこゝろとしては。道心をおこすことも。まれなれば。つねには。往生不定の身なり。

〔九十四〕證空上人機法二体の例文

○此一截は利他眞實の信心ならずして○機法一体の領解なき○自力機情の念佛は○往生不定なることを示そなり○佛をさしのけて西方ゐをくとは○彌陀如來の西方極樂淨土ゐましまさそと云ふ事○經釋ともにあきらかにして○又是ゐよつて西方淨土に往生をとげよとすゝめまします事も○又經釋ともにあきらけきなり○今是を論ずるにはあらざるなり○爰ゐ沙汰し給へる事は○機法一躰の領解のことわりをしら給へるの下なり ○證空上人の云○ねぶりて一夜をあかそも報佛修德のうちにあかし○さめて一日をくらすも彌陀内證のうちゐくらそ○機根つたなくとも卑下そべからず○佛に下根を攝するの願いまそ○行業ともしくともうたがうへからず經ゐ乃至十念の文あり○はげむともよろこばざるもよろこばし○正因圓滿のゆへに○いたづらゐ機の善惡を論して○佛の强緣をわそるゝことなかれ○不信ゐつけてもいよ〳〵本願を信し○懈怠ゐつけてもまそ〳〵大悲をあふくべしと云云○此等のをもむきを以て思ふに○佛心凡心○更にへたゝる事にはさふらはず○此の料簡をはなれて念佛まうそ人をばをしなべて○自力念佛と云ふて往生不定なり○ いさゝか等閑已下ゝ○是自力の念佛者の往生不定の相をあかせり○ いさゝかよりをばへと云までを何をきりてよむべし○謂く自力念佛の行人○少道心のをこりたるときは○往生もやかてならんと思へるなり○念佛もものうくよりは道心のをこらざるときの事なり○加樣なる念佛者は往生不定なるものなり○下ゐつねには往生不定なりとあるつねゐと云字○此の段の眼なり○いふこゝろは自力念佛ゝ機情のはげみなる故に○眞實の信をとげつむる事はなりがたし○隨風東西猶如蓬毛の凡夫たるを以ての故に○若し道心もまめやかゐをこり○自然は他力ゐもとづき○念佛もいやましゐ申さるゝときゝ命をはる事もさふらはゞ往生をとぐる事もあるべし○常住不退の念佛往生の人とはきゝめがたし○故につねゐは往生治定の行人とはいひがたし○さて機法一躰の領解ひらけぬる○金剛堅固の念佛者ゝ○念念不捨者の稱名にして○一たび信をゑたるより○二たび退轉する事なく○平生より往生の業成せる人あり○故につねより往生のさだまる○利他眞實の人ゐ對して自力念佛のものをつねには○往生不定の身なりとはの給へるなり○

もしや〳〵とまてとゝ○往生は○臨終まて○おゝひさだむることなきゆへに○口にとき〳〵名號をとなふれども○たのみがたき往生なり○たとへ

〔九十五〕自力念佛の相をあらはす

へばとき〳〵人に見參みやづかひするに似たり。

※此一截い自力念佛は。佛と機とへだゝる故に。往生のさだまらざる事を示なり。若は不定のことばなり。是について一のたとへを以てをしへ給へり。若や若やと往生の則を待こゝろい。臨終のときまことの信ありて往生をとげんとの用心なり。是によりて折節ふい臨終のときのためふとて。唯たしなみにのみ稱名の聲をあぐるなり。然ども死の緣ぃ無量ふして いかなる死ふかあいん。されば自力念佛は是れ賴みかたき往生なりといへり。見參みやづかひとは侍臣たるものは。常ふ主君の前には居せぬものなり。より〳〵にまみゆるなり。今自力念佛者の口稱念佛のをこるは主君ふ見參したるがことく。又念佛の聲をあげざるは私の家ふあつて。いとなみをなすに似たり。見參とは見い露なり顯なり。あらはるゝと訓ず通して現の字なり。目視の字ごゝろにはあらざるなり。參は廣韵に覲也と註してまみゆると訓ず或はまじはりうく〳〵る。みつなんどゝ訓ずれとも。今のこゝろふあらざるなり。謂く主君に追從して。往生の御恩を。かうむらんするやうに。おもふほどに。機の安心と。ほとけの大悲と。はなれ〳〵にて。つねに佛にうとき身なり。このくらゐにては。まことにきはめて。往生不定なり。

※此一截い上のたとへのこゝろをうけて合するなり。謂く主君につかへるものは其心の常にをたやかならざるなり。其ゆへは朝ふは裏寢ふあづかり。夕ふは鉄鍼ふをのゝくならひなればふ。君臣合道するふ似たれとも。そこゞゝろいはなれ〳〵なるものなり ※白樂天の云。爲レ君薰二衣裘一君聞二蘭麝一不二馨香一爲レ君盛二容飾一君見二金翠一無二顏色一已上是は白氏文集に大行路の文と云て。臣あつて君のめぐみふあつかりて。朝ふい寵恩ふあづかるかと思へは。いや暮には其忠をとろへて殺事たとへば。美女の寵をとろへて衣裳に無物するも。容飾をかひつくろふも甲斐なくして過行がことしといへりされば。行路の難ことは山水の險よりもなをけはしきは。人の情のうつりかいることは手をうちかへす間ふありといへり。今自力念佛の行者もしかなり。佛意ふかなはず本願にたがふたるを以ての故ふ。佛と機とへだゝるなり。如レ是なるものは往生はきはめて不定なるなり。追從とは面諛せるを云

〔九十六〕行路難の詩

なり。きはめてとは此ことは又た此の段の眼なり。いふこゝろは上ゐ一往。自力念佛をゆるすやうに見ゆれとも。實は是れゆるさ事なし。故ゐ窮極の文字ををき玉へり。一家善導の自力雜善ゐ與へて一二三五の往生をゆるし玉へともし猶て是を云ときは千中無一。萬不一生と釋し給ひて。自力往生と云事い一人もなき事なりと云。

念佛三昧といふは。報佛彌陀の。大悲の願行は。もとよりまよひの衆生の。心想のうちに。いりたまへり。しらずして。佛躰より。機法一躰の。南無阿彌陀佛の。正覺に成したまふ。こと此の一截は上に機法一躰の道理を領解せす。唯自力念佛を以てせり。今は本願の旨ゐかなひ。機法一躰の念佛者たることをあかす。大悲の願行。衆生の心想のうちゐ入りそみ玉へるなり。我等は是をしらざれとも。佛躰のかたに機法一躰の南無阿彌陀佛を御正覺のときゐ成就ましく〳〵て。我等衆生ゐあたへ給はると信知するを。眞實の念佛三昧とは云ふなりと云しらせしてより已下い。報佛の願行。衆生の。心想ゐいり給へることを云ふなり。

願行みな。佛躰より成すことなるがゆへに。をがむ手。となふる口。信

すること〳〵ろ。他力なりといふなり。

此一截は上ゐ信の一つを擧け。爰にい三業の行を示せ。卽ち信行と次第せるなり。此れ卽ち彼此三業不相捨離のこゝろなり。文にあきらかなり。

かるがゆへに。機法一躰の。念佛三昧を。あらはして。第八の觀には。諸佛如來。是法界身。入一切衆生心想中とどく。

此一截い上ゐ三業相應して機法一躰なるにうけて。其證文をあらはすなり。念佛三昧とは上ゐも是ありておきらけさといへとも。當面ゐ云ふときは第八觀の於現身中得念佛三昧是なり。其ゆへは此文をば諸師をしなべて。觀像の念佛三昧なりといへり。然ゐ此等は佛出の本意にかなはざる一途の執見なり。今家聖人は善導法然の心ゐかなひ。特に從藍而青のまなじりをめぐらして見給ふに。此は是れ機法一躰。領解の念佛三昧なり。御本書に云。言二於現身中一得二念佛三昧一者。卽是顯下定觀成就之益上以レ獲二念佛三昧一爲中觀益上卽以二觀門一爲二方便一之教一也已。諸佛如來等とは此文ゐついては諸佛いろ〳〵ふ沙汰せらるゝなり。爲緣等は法身佛に約して釋せり。或い報佛と云ひ或は應佛なりといへり。今師聖

〔九十七〕法界の三義

人のごときんば。顯說おょれば應身佛なり。隱說によれば報佛なり。諸佛い等同に約して彌陀を以て諸佛と云ふなり。法界身とい法界の衆生をさそ。法界者一切衆生之本躰也矣。身は佛身なり。いふこゝろは衆生。佛おもふとき佛。法界衆生の心の中ゐ入り給ふ故に。能入佛身と。所入の法界とを。とり合て佛名として法界身と云ふなり

善導の定善義に云。言二法界一者有二三義一一者心遍故解二法界一二者身遍故解二法界一三者无障导故解二法界一正田二心到一故身亦隨到。身隨二於心一故言二是法界身一也。言二法界一者是所化之境。即衆生界也。言レ身者是能化之身。即諸佛身也矣。華嚴經に云。如來眞身本无二。應レ物隨レ形滿二世間一。諸佛境界不思議。一切法界皆周遍已。入一切衆生心想中とは。定善義に云。言二入衆生心想中一者。乃由二衆生起レ念。願レ見二諸佛一。佛即以二無导智一知。即能入二彼想心中一。現し但諸行者若想念中。若夢定中見レ佛者。即成二斯義一也已上。今發にかざらず第八第九の観門にをいては。特更に天台智禮淨影嘉祥等の諸師。種種に解釋せらるれとも。一家善導の三味發得の素意のごとくおはおらず。是によつて今も善導の御意に順してなを祖意をくんで註解を加へ給へり。其義次下に見ゆたり。

これを釋するに法界といふは。所化の境。すなはち。衆生界なりといへり。定善の衆生ともいわず。道心の衆生ともいわず。法界の衆生をもつて所化とす。法界といふは。所化の境。衆生界なりと。釋することなり。

此一截は。引ところの經の文ゐ隨て。法界身の名義を釋し給へり。即ち善導の定善義の釋を以て解せり。然とも今の選者祖意の妙釋をあらはせるなり。いはゆる善導觀像の機をなづくるゐ。十三定善の隨一なる故に定善の衆生となづくる歟。しからずば菩提心をおこして此の觀門をなす故ゐ。道心の衆生と釋し給へること祖意深妙なるをや。其ゆへいかんぞと云ふゐ。若し此の機を定善とも道心とも一途ふさためたまへい。十方衆生の誓約ゐたかふ故ゐ。唯法界衆生と釋し給へる事。まことふうき文の綾得て信すべきものをやと云。

まさしくは。こゝろいたるとゆへに。身もいたるといへり。彌陀の身心の功德。法界衆生の。身のうち。こゝろのうちに。いりみつゆへに。入一切

〔九十八〕倩娘離魂のもがたり

衆生心想中にとくなり。こゝを信ずるを念佛の衆生といふなり。

此一截は入一切衆生心想中の文を釋し給へり。此意は佛身衆生の心想の中に入給へるとを釋するに色心二法不二の謂を以てせり。楞伽經に云。如來藏自性清淨輪二三十二相一入二於一切衆生身中一已智昇禮讚義に云。彌陀身心遍二法界一影現二衆生心想中一矣。今まを思ふに心は無障導なる故に法界にいたる事其さはりなし。身も是れ質導なるものなり。左右なく何ぞ法界に遍入するやといはん。伏難あるべし。此を通ずるに身心不二なるを以て解知せるなり。

いにしへ張鎰と云ものあり。衡陽と云ところに家居す。彼にむすめあり倩娘と云ふ瑞美なる事世ゝすぐれたり。張鎰が外甥ゝ王宙と云あり。是も容美なるなり。鎰かつてたはふれて云。後には倩女をば汝ゝ妻わいすべしと。さて鎰後悔して賓僚の賢者あり。此と妻あはせんとす。倩女是を聞てたのします宙も大にうらめり。さて王宙上國にをもむき去りね。そでゝ舟にのりて行くこと數里ばかりにして夜半なるに。岸の上ゝ人の行聲を聞く。是をとへば倩女なりと云ふ。王宙大ゝよろこんで是を船中ゝかくしをき。翌の國ゝ入り去て五年のほどを經たりき。其の間に二子を生せり。ときに倩女父母のことを思ひいだして云く吾れむかしは父母の義をすてゝ愛ゝきたりて五年を經たり。今まは國にかへりて父母ゝ逢たてまつりたきと云ふ。王宙聞ていかゝもくるしき事なしとて。即ち舟にのりて共に衡陽ゝかへる。倩女をは舟中にをきて。宙ひとり舅の張鎰がところゝ行て。むかしの恩義をそむきたる事をゆるし給へとと云。鎰をどろいて云。それは何と云ふむすめぞやと。宙が云。倩娘なりと。鎰か云。倩娘は汝ゝ愛を去りしより以來。いまに病で閨の中ゝありぬと。又宙が云倩女は舟中ゝありと。よつて諠いそぎて使をつかわして舟中の女を呼きたるに。閨中の倩女と舟中の倩女と一女となりて二女なしと（類説の離魂記前燈新話の意なり）此れ卽ち意いたれは身いたるの義なり。本と身心不二なるを以てなり。いはゆる有漏凡夫の上ゝも身心不二なるを以て如來ゝ身心各別ならんや。今勸進せるこゝろは佛の身心行者の身心ゝ入みち給ふ。然れは行者の身心ゝ佛の功德みたすと云ことなし。如レ是道理を信知そるを念佛の衆生とは云なふりと云。讃文ゝ五濁惡世の有情の。選擇本願信すれば。不可稱不可說不可思議の。功德は行者の身にみてりとの給へる。實に此意なるをやと云。また眞身觀には。念佛衆生の三業と。彌陀如來の三業と。あひはなれず

と釋せり。

〔九十九〕善導佛意にかなへる妙釋

※此一截もまた第九阿彌陀佛觀を引て機法一躰の證とし給へるなり　※眞身觀とい正く是れ觀經をさすなり。然ゐ觀經に彼此三業不相捨離の文なし。第九觀の中ゐある光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の文について。善導定善義ゐ親緣近緣增上緣の三義をまうけたまへる中の。第一の親緣の下ゐ三業相應の釋あり言。一明二親緣一衆生起レ行口常稱レ佛佛即聞レ之。身常禮三敬佛一佛即見レ之。心常念レ佛佛即知レ之。衆生憶二念佛一者佛亦憶二念衆生一彼此三業不二相捨離一故名二親緣一也已上此釋を以て今の意をあかせり。然ば眞身觀の釋とあるべし。何ぞ唯眞身觀と云て佛說に三業不離の義あり。と云や。答一家の釋を以て經ゐ用ゆる事。前にありしるべしさて經の光明遍照等の文を。諸師の解釋いろ〳〵にさたせり。まづ大意の意得やうは第九眞身觀の眞中ゐして說玉へる文なる故に。觀念佛の衆生を照し玉へりといへり。最も韋提希の心も觀念佛の機を照攝し玉へりと思ふなり。此等は觀經顯說の前と云ふて釋迦彌陀二尊出世の本懷ゐいあらざるなり。爰に善導大師。念佛三昧發得し。佛意ゐかなひ經の幽遠深妙なるとをさぐり得て光明遍照等の文について三緣を釋せり。全く經の意なり。他師のしらざるところなり。今も此義をあらはさんために眞身觀と云て。釋の字を畧せり。深きこゝろあるをや信ずべし仰ぐべし。但し下に釋せりとあるときゝ。偏ゐ一家の釋とばかりも見なり。

〔百〕佛願他力の證文經論にあるの辨

佛の正覺は。衆生の往生より成し。衆生の往生は。佛の正覺より成ずる故に。衆生の三業と佛の三業と。まつたく一躰なり。

※此より已下。微塵のへだてなきことなりと云ふにいたるまでい。所引の眞身觀の文ゐしたがひて。義を以て機法一躰を釋し玉へるなり。さて此釋は何れより據どころとして設け玉ふや。文義に順じて釋せるや。謂く經論ゐたしかに證文ある事ゐさふらう。まづ經ゐい無量壽經ゐ云。無レ有二虛僞諂曲之心。和顏愛語先レ意承問。勇猛精進志願無レ倦專求二清白之法一以惠二利群生一。悲二敬三寶一奉二事師長一。以二大莊嚴一具二足衆行一。令諸衆生功德成就二この文の中ゐ初の四句は阿彌陀如來。御自分ゐ身口意の三業を成就ましまそその文なり。和顏い身業なり。愛語は口業なり。先レ意承問い意業なり。佛此の三業をして衆生ゐあたへ成就せしめ玉ふを。令諸衆生功德成就とは云なり。此とき佛の三業と衆

生の三業と無二無別にして。更にかはる事なきなり。此の意を本として往生論ゐ。三業莊嚴の相をおかし玉へり。是を鸞師釋し玉へり。言く凡夫衆生身口意三業以レ造レ罪輪二轉三界一無レ有二窮已一。是故諸佛菩薩莊二嚴身口意三業一。用二治衆生虛誑三業一也已上。此こゝろを和讃にの玉はく。諸佛三業莊嚴して。畢竟平等なることは。衆生虛誑の身口意を。治せんがためとの玉まふと。皆是佛の三業と衆生の三業と。相いなれざるの意なり。於レ中諸佛と衆生と等同に約して彌陀をさゝなり。

佛の正覺のほかに。衆生の往生もなく。願も行もみな佛躰より。成じたまへりと。しりきくを。念佛の衆生をいひ。この信心のことばにあらはるゝを。南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに。念佛の行者に。なりぬればいかに。佛をはなれんとおもふとも。微塵のへだてなきことなり。

☒此下は機法一躰の念佛の行者の德用をあらはさゝなり。はなれんとおもふとは。かならず信心決定の念佛者ゐをいて。はなれんとおもふ念をおこすことなしといへども。金剛堅固の信心をつよくはめしめ玉ふ勸誘のことばなるべしと云云。

佛のかたより。機法一躰の。南無阿彌陀佛の。正覺を成したまひけるゆへに。なにとゝはゝばゝしからぬ。下下品の。失念のくらゐの稱名も。往生するは。となふるとき。はじめて往生するにはあらず。極惡の機のために。もとより成したまへる往生を。となへあらはすなり。

☒此一截は上ゐ眞身觀を釋するゐ。佛正覺のとき衆生の往生を成し玉へると云詞ゐ順じて。佛。正覺を成し玉へるとき。衆生の往生を成せると云ことを。觀經下下品のこゝろを以て道理によつて釋し玉へるなり。☒言はく下下品の機は極惡深重ゐして。諸佛の化導のなきものなり。愛と慧心取意しての玉はく。極重惡人無二他方便一唯稱二彌陀一得レ生二極樂一となり。今作者是を以てかんがへ玉へるやうは。如レ是ものゐも似ず。罪ふかき惡人唯彌陀をとなへたる一分ゐして。やすくと往生そる事は今日いじめて稱名念佛したるゐいあらじ。さだんで知んぬ十劫正覺のときゐ。加樣なる惡人凡夫の往生をあなたゐ成せしめ玉ふ故なりと。妙なる料簡をあらいし玉ふなり。はかばかしからぬとは。一分の解知才覺のなきものをいふ。今い下下品の機と云ふも惣じて一切の惡業深重をさす

なり。然るに愛に、五逆の人としるべし。又大經の。三寶滅盡の衆生の。三寶の名字をだにも。はゞかしく。きゝぬほどの機が。一念となへて往生するも。となふるとき。はじめて。往生の成するにあらず。佛躰より成ぜし願行の薫修が一聲稱佛の。ところにあらはれて。往生の一大事を成するなり。

此一截ハ。上ハは觀經下下品の機ゟついて。衆生の往生を佛正覺のとき成し玉へるゟ相ひ次て。三寶滅盡のときの機の念佛して極樂ゟ往生をとぐると云ふを以て是れ亦た道理ゟ順して釋し玉へるなり

謂く法滅百歳のときは。三寶こと〳〵くほろびいて〻誰。教化する人もなく刀兵をこりて取ものふる〻もの皆兵器となりて。たゝかひをなし或は疾病をこりて。人みな病ひの床ゟふし。或は饑饉をこりて飲食すべきものも希なり此三つのわざはいをこりぬるとき。唯くるしみのみにして法を聞べき念もなく。又をしゑなせる能化のなき時節なるに。唯一聲南無阿彌陀佛ととなふれば。其のまゝ極樂に往生す。如レ是時分の機の往生する事。今ハじめて稱名念佛するの德用にはあらそ。十劫正覺のときに佛意の邊ゟ。凡夫の往生を御成就なされしか萬習そる故なりと云 三寶滅盡とは前ゟ具にしるせるかことし。

今ハ往生禮讃の万年三寶滅。此經住百年。爾時聞二一念一。皆當レ得レ生レ彼と釋し玉へるより書り。萬修とハ萬ハ香草也。香萬也。修ハ修習の義なり。起信論に云。萬習義者如下世間衣服實無二於香一。若人以レ香而萬習故則有中香氣上。いはく阿彌陀如來御正覺のとき。凡夫の往生を御成就ましく〳〵し香萬か。今日ゟはる〳〵と云事なり。

かく。こゝろふれは。われらは今日今時往生すとも。わがこゝろの。かしこくて。念佛をもまうし。他力をも信ずる。こゝろの功にあらず。勇猛專精にはげみたまひし。佛の功德。十劫正覺の刹那に。われらにをいて。成したまひけるが。あらはれもてゆくなり。

此一截は上來いふところの凡夫往生は。佛意のかたに成せしめ玉ふと云を結そるの下なり。文相別異なし。勇猛とはいさみたけしと訓して菩薩の精進力の修行を云なり。演義鈔ゟ云。佛勇猛自勵策修錄二摩其心一得二成正覺一爲二勇猛一耳已專精とハ純一無雜の義なり。精ハ增韻ゟ專一なり。故に專精ともゟもつはらと訓ず。增一阿含經ゟ云。若有二比丘一正

〔百三〕宿善開發の機お遲速あるの述

レ身正レ意結跏趺坐繫レ念在レ前無レ有二他想一。專精念佛觀二如來形一未二曾離
二目使レ念二如來功德一已此も餘おこゝろをめぐらさゞるを云なり。をいてとはためおと
こゝろをかよはして見るべし。

覺躰の功德は。同時に。十方衆生のうへに。成ぜしかども。昨日あらはす人もあり。今日あらはす人もあり。已今當の三世の往生は。不同なれども。弘願正因の。あらはれもてゆくゆへに。佛の願行のほかに。別に機に信心ひとつも。行ひとつも。くはふることはなきなり。

㊟此一截は機法一躰の領解の機お遲速ある事をあかす。謂く佛の御方に一切衆生の往生を御成就ましますすなわち。平等おして凡夫。聖人。道俗男女のへだてなく。過去未來現在の差別いなけれども。うくる機分に差別あるおよつて過去現在未來の三世の不同い出きたるなり。例せば養得自爲二孝父母一と云て。春雨い花のためおは父母となりて。花をさかそるおは差別いなけれども。早く開くあり遲くありて時分一同ならざるがごとし。法華なんどにも大通智勝佛のときゝ又覆講法華のときゝ結緣おりしといへども。開悟の機一同ならざる等のごとし云覺躰と。い始覺の佛躰なり此の相全く名おあらはれて南無阿彌陀佛と云ふ是なり。弘願正因とは第十八願の至心等の眞實の信心なり。至心信樂願爲因との玉へる是なり。又涅槃眞因信爲レ本の玉へる等なりよく〳〵しるべし。

〔百四〕正行用不の妙術

念佛といふは。このことはりを念じ。行といふは。このことはりを恭敬するゆへに。佛の正覺と。衆生の行とが。一體にしてはなれぬなり。したしといふも。なををろかなり。ちかしといふをも。なをとほし。一躰のうちにをいて。能念所念の躰のうちに。論ずるなりとしるべし。

㊟此一截い初よりはなれぬなりまでは。念佛と行とを云ふて機法一躰のことはりをあかしたしと云已下い機法不離の相をあかせり。兩處のこのと云ふ言は佛の正覺のとき。一切衆生の往生を御成就したまいらせ玉ふを。このことはりともこのうれしさをも云なり ㊟禮拜とい五念門。五正行の一なり。古來是おつゐて自他流の心得ある事なり。其故は異流のこゝろい五念門。五正行に共お各往生をゆるすとなり。又は口稱念佛の助業なりともいへり。此等をば聖人い雜修なりとて大おきらひ玉へり。さて當流のこゝろは口稱念佛のほかに禮拜

等の行法をなす事は○機法一体の信心領解の上ゐ○口にあらハして稱名念佛して往生治定と覺悟したるとき○佛恩のほどをうれしやありがたやと御禮報謝のためゐ禮拜をもし讀經等をもするなり○是を卽ち眞實信心の念佛往生の人なりとはめしめ玉へり○禮拜とは已が頭を以て地につけ佛足ゐつく〻思をなしさて○兩手を以て禮し拜を云なり○但西域記に九等を出せり○一にハ發言問訊す○二ゐハ俯レ首示レ敬○三ゐは擧レ手高揖す○四には合掌手拱す○五ゐハ屈レ膝○六には長跪す○七ゐは手肘據レ地○八にハ五輪俱屈○九ゐハ五躰投地と已上此の中に第九の五体投地と云ふが致恭のきハまりなり○今も第九にあたる歟○此外に內典外典の中に禮拜の品品あり○繁が故に畧せるなり

〔百五〕恭敬兩字の辨別

▣恭敬といふ二字共にうやまうと訓ず○但し恭と敬と其の意少しかはるなり○字書に云○貌レ在レ恭○在レ心爲レ敬○此のときは形ゐうやまうを恭と云ひ○心にうやまうを敬と云なり○又云貌多心少爲レ恭○心多貌少爲レ敬と○是は共ゐ身と心にうやまふ義なれども○多少の別ありといへり○然といへども性理字義の意は○身心各別なるに似たれども元不レ離なりといへり○言恭就二貌上一說○敬就二心上一說○恭主レ容○敬主レ事乃至○恭只是敬之見二於外一者○敬只是恭之存二於中一者○敬與レ恭不二是二物一如二形影一然○未レ有二內無レ敬而外能恭者一○亦未レ有二外能恭而內无レ敬者一已○此等の義ありといへども○今のこゝろハ禮拜は身業恭敬は意業なり○十地論に二種の恭敬あり○一には身正恭敬○二には心正恭敬なり○したしと云ももなをろかとは三緣の中に親緣をあげていへり○ちかしといふもなをとはしとは近緣をもつて以いふなり○さて此のこゝろハ▣禪門ゐ此の佛の字をまうさば○三日口をすすげといはれしを○或る人示して云○其口をそゝぐといはいまだけがれたるをはなれぬと云ふ事なり○是ハ別ゐ沙汰あり○無門関に云○達摩西來不レ說三文字一○直指人心見性成佛○說箇直指已是迂曲○更言二成佛一耶當不レ少○今のこゝろも此等の語勢のやうなるものぞ○彌陀と衆生としたしさといへばいまだうとき意のあるなり○又ちかしといへばいまだとはき意のあるなり○今の機法一躰のところは親みの近きのと云ふの沙汰はなきなり○能念所念とは○能念は行者のかた○所念は佛躰なり○爰ゐ差別を論ずるゐは非ず○能禮所禮○性空寂自身他身躰無二と云る語勢なり○然とも意ハ少別なり當ゐ知べし。

〔百六〕禪門佛の字頭語

安心決定鈔 皷吹本 終

安心決定鈔鼓吹求

往生論に。如來淨華衆。正覺華化生。といへり。

〔此一截は天親の往生論を引て機法一体の理をあかせり。まづ論をあけて次下の細釋を以て義をしらせ玉へり。〕往生論とは或い一論とも或は淨土論とも云ふなり。此論は三經申論と云ふて。無量壽經。阿彌陀經。觀經の三經の要をとりて。通じ申てつくり玉へるなり。此の論の中に五念門をあかせり。是は第四の觀察門に二十九種あり。是ゐ又三種あり。三種の中ゐ依報に十七種あり。於レ中。第十三の眷屬功德莊嚴の下の偈頌なり。此莊嚴のこゝろは阿彌陀如來。因位ゐをいて有る國土を見玉ふに胞衣血水の中を以て身の器とし。或い不淨のところより生ずるを生のはじめとし。或は生じ來りて貴賤の差別あり。或は三枕九棘等の高家ゐ生るゝといへども。其の性猶狂なるあり。或は竪子もの〳〵腹より生して卓犖の才と云ふて才能の人にそぐれたるあり。然に高家のもの〳〵猶狂たるゝ種姓をよばれ。そしりをうけていたまし〳〵又いやしきもの〳〵子。才能ありて高き位にのぼるあり。是亦種姓をよばれて。ときの面目をうしなふなり。是ゐよりて阿彌陀如來。淨土を建立して衆機を引て生せしめんに。

こと〳〵く蓮華化生して上下貴賤の差別なく。みな是蓮華の中より化生してそしらるゝ事もなく。又はめらるゝ事もなく。一味平等ならしめんとなり。如來とは阿彌陀如來なり。淨華衆とは淨土の聖衆をさすなり。淨華とは正覺のときの無漏清淨の心蓮華のひらけたるを云ふなり。淨土ゐ往生したる新往齋住の聖衆。ことごとくつくり此の淨華の中より生じ。還て此の蓮華に坐そ。所坐そでゐ淸淨なる故ゐ。能坐の人天ゐまた淸淨なり。能所依正不二にして。共に淸淨なるを以ての故ゐ淨華衆と云ふなり。正覺華化生とは惣して此土に四生あり。一にゝ卵生。二ゐは胎生。三には濕生。四ゐは化生なり。六道種種ゐ生ずといへども此四生のはかはなきなり。此化生と今の化生と同異いかん。謂く別なり。天台文句に菩薩處胎經を引て言はく蓮華生者。非三胎卵濕化之化生一非レ化而一言レ化耳已上。已上のこゝろは淨土に往生して。うくるところの生ゝ蓮華化生にして。眷屬平等ならしめて稱讃毀謗のあやまりあるまじきとなり。今愛のこゝろいしからず。他力の信心を得たる此土の行者の上ゐをいて。此偈を解釋して機法一躰の義をあらいせるなり。淨土の德義を以て此土の念佛の行者に與へ釋し玉ふ事。聖人御了簡の中ゐ。いな

はだ多しまさにしるべし。

他力の大信心を。ひたるひとゝを。浄華の衆とはいふなり。これはおなじく。正覺のはなより。生ずるなり。

此より已下。四海みな兄弟なりといふなりと云までゝ所引の論文を釋して機法一躰のこといりをしめせり。但し通途の判とゝ大おちがへり。今爰には浄華衆を釋す他力の大信心とは謂く今爰のこゝろは唯の信心にあらず大信心なり。是又自力の大信心ゝはあらず他力の大信心なり。

さて此他力の大信心とは。いかやうなる事ぞと云ふに。上來いふところのごとく。佛正覺のとき我等衆生の往生をさだめ玉はるなり。是ゝよつて今日願力ゝもよをさされて大信心領解の身となる。此の當躰をかんがうるに。今はじめて信じぬるにあらず。阿彌陀如來の正覺の清淨の心蓮華の開ぬるときより。極玉ゝるところの往生なり。如レ是心得る行者を機法一躰を領解する人とゝ云なり。然ば今時念佛の衆生。南無阿彌陀佛とゝ機法一味の御名をとなふるときゝ身も心も南無阿彌陀佛なり。此即正覺のときの心蓮華より生ずる衆なりと云義なり。去ゝよつて他力大信心の行者をば全く是れ如來とひとしとの給へる

なり。華嚴經ゝ云。聞二此法一歡喜信心無レ疑者。速成二無上道一與二如來一等已涅槃經ゝ云。大信心者即是佛性。佛性即是如來。已上此こゝろを讃文ゝ信心よろこぶそのひとを。如來とひとしとときたまふ。大信心は佛性なり。佛性すなはち如來なりとの給へる。今の意なるをや。

正覺華といふは。衆生の往生を。かけものにして。もし生ぜずば。正覺とらじと。ちかひたまひし。法藏菩薩の十方衆生の。願行成就せしとき。機法一體の正覺。成したまへる。慈悲の御こゝろの。あらはれたまへる。心蓮華を。正覺華とはいふなり。

此より已下ゝ是れ正覺華を釋するなり。正覺とい本願の不取正覺の。そでゝ成し給へるときの名なり。されば本願の誓約は十方の衆生の往生。若一人なりとも成就せざる事あらば。我れ佛躰を得じとありしゝ今まさしく願行成就の正覺を成し給へるなり。此の御慈悲のはぢのあらはれたる心蓮華を正覺華なりと云なり。其の正覺のとき心蓮華のひらけたるところをば自受身と云なり。此の心蓮華のひらけたるが行者の口聲に南無阿彌陀佛ととな

〔百九〕當体の蓮華幷に十界互具法數のたゝみ

ふるが○卽心蓮華のあらはるゝと云ものなり○故ゝ願行成就の誓あらはれて機法一体を領解して金剛堅固の信心の上より○口ゝ此の南無阿彌陀佛をとなふるところ卽ち佛心淸淨の蓮華のひらけたると全く是れ名体不二なり○故ゝ正覺華のはかゝ淨華衆生と云ふいなきなり 卍心蓮華と云事○宗々ゝ沙汰せらるれども○至極を云ときは人人所具の理体をさして云ふなり○此理体の心蓮華のひらくるを悟とも凡夫とも云なり○天台宗のごときんば一念三千○三千一念の法數のあつかひあり○凡そ諸法ひろしといへども十界のほかいなきなり○十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺菩薩佛果なり○此の十界○互に十界を具すれば百界となる○百界に 各十如是を具すれば千界となる○是を過去現在未來の三世に配合すれば三千となる○此の三千何よりをこるぞと云ゝ○我等が心性の一念よりあらはるゝなり○ されば殺生等の業因○一念をこれば地獄道あらはれ○或は乃至四諦十二因緣等をこせば聲聞緣覺等の果を感ずるなり○ されば三千といへども唯だ我等が一念の胸中よりあらはるゝ事なり○此の十界を當体の肉蓮華と云なり○又は八葉の心蓮華とも云なり○十界を八葉ゝとる事○眞言ゝわい蓮華部三味の下ゝわかせり○又禪門ゝわい毘盧

〔百十心蓮華の證文〕

の依正も○凡下の一念をこへずなんどといへり○其の故は地獄と佛界とを合してみるなり其相は蓮華部三味の印像のごとしと云。然に此等の宗旨ゝをいて此心蓮をひらかんと欲して月をかさね○歲をつみて修行し○或は三密瑜伽の牀にふして觀念し○或は坐禪工夫の繩床ゝのぼりて旦暮ゝ參すれども○此の心蓮をひらく人希なり○今爰ゝ他力の大信心を得たる行者○今日彌陀の本願にまうあひたてまつりて○往生一定と領解せし事○其の遡洄を思ふに十劫已前に○我等が往生成就のために○如來の御方に淸淨の心蓮華をひらかせ正覺なりしが唯今の衆生にあたへ給はるゝよりて○機法一体の行者となりぬ○故に是を淨華衆といはるゝなり此ときゝいたりて○凡身佛身不二の衆生たるを以ての故に○心蓮ひらくる人とは云なりまことに仰ぎ信ずべきは彌陀大悲の誓願なりと云。

これを第七の觀には○除苦惱法ととき。下下品には○五逆の衆生を來迎すと○蓮華をとくなり。

卍此一截は觀經の中より○兩處の文をいだして正覺華の證とそるなり○凡そ觀經ゝ定散二善あり○定善門の中ゝ十三の觀法あり○是は淺深次第なり○故に先つ此土の日想觀○水想觀

の假觀を修して○さて淨土の寶地寶樹寶池寶樓閣の四觀を修して後○第七觀ゐ阿彌陀如來の安坐ゐします寶蓮華を觀するなり○是れ阿彌陀佛を直に觀ずる事かなわざる故に○まづ如來の坐し給へる蓮華を觀ずるなり○韋提希○此の觀成しぬれば○彌陀觀音勢至の三尊○蓮華ゐ坐して空中に現じ給へり○韋提此蓮華ををがみたてまつると○除苦惱法と云ふて三途の苦惱をのぞけりといへり○或人の云く韋提希の無生法忍を得たるとゐ○除苦惱法の文是なりと云云又散善門の中に九品あり○第九下下品の中ゐ蓮華來迎の義あり○經に云○此人苦逼不レ遑二念佛一○善友告言汝若不レ能レ念者○應レ稱二無量壽佛一○如レ是至心令二レ聲不一レ絕○具二足十念一稱二南無阿彌陀佛一○稱二佛名一故於二念念中一除二八十億劫生死之罪一○」命終之時見二金蓮華一○猶如二日輪一住二其人前一○如二一念頃一卽得二往一生極樂世界一已○兩處ゐいづるところの蓮華○別ゐ外ゐ求るゐあらず○十劫正覺の曉天ゐひらき給ふ心蓮華なり○此の外ゐ九品の處々等○又は大經小經の中に說給へる蓮華し皆是如來の心蓮華なりとしるべし○今は觀經の中ゐをいて其一二を出して○餘をしらせ給へるなり○これとは上の心蓮華をさすのことばなり○

佛心を○蓮華と○たとふることは○凡夫の煩惱の泥濁に○ろまざるさとりなるゆへなり○

〔百十一〕蓮華不染游泥にそまざる引證

○此一義は正覺華とは○心蓮華のことなりと云ふゆへを釋し給へり ○されば佛菩薩の內證は淸淨ゐして○五塵六欲の中ゐまじはるといへども○一切衆生の煩惱の泥濁にそまざるなり○古人も雖レ在二塵中一不レ染レ塵といへり○古詩ゐ大道本來無二所染一と云○此等の道理によつて佛心を蓮花の淤泥ゐそまざるにたとふるなり○無量壽經ゐ云猶如蓮華於二諸世間一無汚染故已法華經に云○不レ染二世間法一如二蓮華在一レ水矣○皆是佛菩薩の心性蓮華の泥水にそまざるにたとふるなり○世俗の典にも蓮華の淤泥ゐそまざる事をいへり○周茂叔か云○予獨愛蓮之出二淤泥一而不レ染濯二淸漣一而不レ妖○中通外直不レ蔓不レ枝○香遠益淸亭亭淨植可二遠觀一而ざむく」とよめりあざむくといふ愛ととりてよろなり○皆是蓮華のにごりにそまぬと云の義なり○又蓮華について彌陀經ゐ微妙香潔の四字を以てほめ給へり○細釋ハ株宏の疏鈔の中

ゐるり。須ㇾとならば往てまさにしるべし。なにとして。佛心の蓮華よりは。生ずるぞといふに。曇鸞この文を。同一に念佛して。別の道なきがゆへにと。釋したまへり。

㊀此の一截は淨華衆をいへるおつきて是は正覺のときの心蓮華より生ずる故おㇾ名くといへり。是義を爰おㇾ不ㇾ審していはく。何事おㇾ念佛の衆生。如來の心蓮華より生ずるといへるとなり。此答として鸞師の本文の下の註解に。同一念佛無別道故の釋を以てせり ㊀但し此のおそのうしやうのせ釋おついて。靴見かいるなり。通法諸師のこゝろは。本末の文のこゝろによつて解せり。論註おㇾ云く。凡是雜生世界若胎若卵若濕若化眷屬若于苦樂萬品以ㇾ雜業一故。彼安樂國土莫ㇾ非ㇾ三悪阿彌陀如來正覺淨華之所ㇾ化生。同一念佛無二別道一故。通夫四海之内皆爲二兄弟一也。眷屬無量焉可二思議一矣。この本末のこゝろは此の娑婆世界は業因多種なるを以ての故おㇾ。所生の果また多種なり謂はく胎卵濕化等の四生をうくるなり。さて安樂國土おㇾ往生すればをしなべて。如來淨華の中おㇾ化生せるなり。故に化生は淨土に約せる也。又同一念佛と云ふも。極樂の聖衆は唯是同一おㇾ念佛せるなりと。是およつて極樂國中の人天ハ。こと〴〵く蓮華化生なる故おㇾ兄弟なりともいへり四海とは極樂界中をさして云なり。此は是れ通途の所談なり。然おㇾ今家聖人。幷に此書のときんば。此土の念佛の衆生おㇾ約して判せり。如レ是了簡は。聖人御製作の中おはなはだおはし。爰に同一念佛無別道故の釋を引けるといへども。いまだ其素意しりがたし。大意は次下の言おしるせり。今私おㇾ云く佛正覺のときおㇾ心蓮華のさとりひらけたる砌。一切衆生の往生を成就したまひて我等おㇾ施與せり。此の心の領解して機法一躰の行人となりぬれば。是何れより生ずるぞと云ふに。如來の心蓮華より生ずるなりとしるべし。さて心蓮華成就のそがたい何にものぞと云ふに。即願行具足の南無阿彌陀佛是なり。然ときい機法一躰の行者の所修は。唯南無阿彌陀佛より外に更おなし。是を同一念佛無別道故とは釋し給へるなり

（此義予論註の勘化歟釋に釋せりしるべし）

善惡の機ことに。九品くらゐかはれども。ともに他力の願行をたのみ。おなじく正覺の躰に皈することは。かはらざるゆへに。同一念佛して。別の道なきがゆへにとなり。

〔百十三〕九品の行業實い是念佛たるの証

○此一截は上ゟ同一念佛無別道故の釋を引といへども○いまだ其の故を釋せるの義なし○今引文のこゝろを釋せるなり ○謂はく九品の機ゟ善惡ありて。行法の鈍利華開の遲速等ありといへども○實ゟ是願行をたのみて南無阿彌陀佛に結阪して○此御名をとなへて極樂ゟ往生するなりされば○九品かいるゟ似たれども皆これ南無阿彌陀佛なり○故ゟ同一念佛等と云ふなり○問九品の行法多種なり○又九品といへども○實は是無量無數品なりといへり○何ぞ九品の機○願行具足の南無阿彌陀佛なる故に○同一等といへるや○答是に二重の意得のあるなり○一ゟは空師の御こゝろは○五逆の廻心上上品に通ず○又讀誦の妙行○亦た下下品ゟ通ずといへり○此ときは九品の行業は佛け○機をそてじとて自ら散善門を閉けりといへども○是はこれ假門の說にして錦上ゟ花をしくのてだて○小兒の啼を止る方便のたぶらかしなり○故ゟ實ハ是九品ともに念佛の一行なり○總師の本則三三之品○今無一二之殊のこゝろ是なり○愚禿鈔に曰○瓶按二觀經三心往生者○是則諸機自力各別之三心也○爲レ阪二大經三信一也○勘二誘諸機一欲レ使レ通二入三信一也○三信者斯則金剛眞心不可思議信心海也已故ゟしる九品の行業かはるゟ似たれどもつゐには第十八の本願念佛ゟ通入するなり○今二義の中に後の義を正とそべし○善惡とは善機は上中六品の機をさとなり○惡機とハ下三品の機なり○これとゟをは殊異とかく九品の機○各別なるを云ふなり○一義にゟごりて每の字になをあり○よろしからざるをや○もとは共の字なり上の異の字ゟ對するなり。

また○さきに往生するひとも○他力の願行に歸して往生し○のちに往生するひとも○正覺の一念に歸して○往生す○心蓮華のうちに○いたるゆへに○四海みな兄弟なりといふなり。

○此一截は三世の往生そるもの○心蓮華ゟよるとのみいへり○問他力の願行と正覺の一念と同なるや異なるや○答全く一同なり○謂く他力の願行とハ如來十劫正覺の一念のときに成就し給ひぬるなり○故に正覺の一念のほかに他力の願行成就の相いなきなり○是によつて他力の願行と○正覺の一念とは○言ばの左右せるとしるべし○心蓮華のうちにいたるとハ○前よりの書くだしの如くならば心蓮花のうちより生ずと云ふべし○何ぞ爰ゟはいたると云ふや○謂く極めて云ふにいたると生ずると

一同なり○心蓮華のひらくるときは十刼已前のむかしなり○今日往生とくる衆生は十刼のむかし心蓮華のひらけるときの御成就ゐよるなり○故に今日より立かへり○十刼むかしの心蓮華の開覺のところゐいたると云ふなり○爰ゐいたりて見るに全く心蓮華より生ずる衆生なりといへり○然ば三世の衆生○一人として心蓮華より生ぜざるものはなし○故ゐ一天四海の念佛の衆生は○同一の蓮華化生なる故ゐ○なをし兄弟のごとしといへり○爰を以てしる○今の蓮華化生は此土の義としるへし○六要鈔ゐ云○言二四海一者非二淨土相一閻浮同行同一佛子勸二其相親一稱二兄弟一兼標レ可レ爲二來生一○但會二一處親厚一而耳矣○四海といへ一天下をさすのことばなり○博物志ゐ云○天地四方皆海水相通○地在二其中一蓋無レ幾也○七戎六蠻九夷八狄形類不レ同○總而言レ之謂二之四海一皆近二於海一也矣○兄弟とい吳氏が云○兄弟同出二於父母一○故形分而氣同矣○此の語もと論語顏淵の篇に出たり 圀言司馬牛憂人皆有二兄弟一我獨亡○子夏が云○商聞レ之矣死生有レ命富貴在レ天○君子敬而無レ失○與レ人恭有レ禮四海之內皆爲二兄弟一君子何患乎無二兄弟一也已上孔子の門弟に司馬牛と云ふ人あり○或ときいはく世の人みな兄弟あり○我ひとりなきは何事ぞとなげき思て居なり○但し彼に司馬桓魋と云ものを兄に持たれども○是ゝ孔子なんどをも殺んとしけるやうなる徒ものなり○其の外○方々にありて悪逆をなし〳〵ものなり○故に兄弟ありといへども○是は兄弟と云ゐゝあらずとてうれいなげくなり○其ときき子夏と云ふもの〳〵云く汝なんぞ兄弟なき事をなげくぞや○人とまじはりて悲敬にして禮儀あるときゝ○四海の內みな兄弟なりといへり○今司馬牛が兄弟なきとなげくは○同く父母の氣をうけて形を分て出生するを云なり已上○今爰ゐ隨義して轉用せば○子夏がいへるに能かなへるふや○謂く四海に人多といへども○聖道自力の修行して○斷惑證理せんと欲しなんとするはなをし他人のごとし○さて聖道をすて淨土に歸し○雜行を修せず雜修をかたはらゐして○專修念佛の一行にもとづきて身もこゝろも佛陀の境ゐまかせまひらせて○機法一躰の行者ゝ四海の內ち何はゞへだゝるとゝ云とも皆兄弟なり○彼は悲敬禮儀を父母ゐたとへ○其道を行ものを同く兄弟といふなり○今は心蓮華をもとゝして○是を父母として信心領解の人を兄弟とゝ云ふなり○

〔百十四〕司馬牛兄弟なきをうれうるの細釋

佛身をみるものは佛心をみたてまつる○佛心といふは○大慈悲これなり○

〔百十五〕見佛の多說

㊉此一截は第九眞心觀の文の意なり○經ゐ言く○以レ觀二佛身一故亦見二佛心一○佛心者大慈悲是○以二无緣慈一攝二諸衆生一○此文を以て機法一躰の義を成するなり ㊉天台觀經の疏ゐ云○眼見二佛身一卽見二佛心一身由レ心起故○見レ身卽見レ心○由レ見二身心一想轉明故得レ見二佛心一佛心者大慈悲心是矣○此等の經釋を見るに觀門の見佛なり○當面のこゝろはしからず○散心念佛の上の見佛なり○問此眞身觀は意念定善を以て躰とす○此文を何ぞ散善念佛の證とするや○答ふ觀經顯說の文尺を以てはからふべからず。今は密說の前ゐ三緣の釋を引ところのごとし。然ば此の見佛は散善念佛のものゝ見佛とするべし○問散善見佛いかんぞや○答ふ是に重重ある事なり○念佛の衆生繪像木像等にむかふて○をがみたてまつるを見佛と云なり○西方要決ゐ云○但想二尊容一當レ見二眞佛一○此のこゝろなり○又は念佛全く是れ見佛なり○寶積經に云○應レ修二念佛一爲二見佛一とある是なり或は念佛の行者正く佛身を見るなり○般舟三昧經に云○持佛力○三昧力○本功德力○用二是三事一故得レ見レ佛已今いゆる機法一躰の念佛の行者見ところの佛躰ゝ佛心を見なり○若し餘行自力の人の佛身は像身を見のみにして○佛心を見るゐはあらざるなり○其故は佛心に

〔百十六〕三種慈悲幷無緣の細釋

相應せざる故なりと○今正く佛心をみると云は○眼見ゐはあらず心見ゐあらず○機法一体の當体をさして云なり ㊉大慈悲とは○惣じて慈悲ゐ三つあり○一には衆生緣の慈悲○又は小慈悲と云なり○是は二乘凡夫の慈悲なり○二ゐは法緣の慈悲○又は中慈悲となづく○是は菩薩の慈悲なり○三には無緣の慈悲○又は大慈悲ゐ云なり○是は佛の慈悲なり○今は佛の無緣の大慈悲と云は○經に大慈悲是以無緣慈との給へる是なり○無緣の慈悲とは平等の大慈悲是なり○其無緣平等の慈悲の体はいかんぞと云ふに例せば海潮の無念ゐして時をたがへざるがごとく○又天鼓の無思ゐして韻を發するがごとし○首經には珠玉へるなり○又法華經ゐ云○佛平等法○如一味雨○隨衆生性○所受不同とある等なり○たとへば雨ゝ無念にふれども草木面面にうるをひをうけて○柳ゐはみどりとあらはれ○花にはくれなゐとなるがごとし○古人のをしなべて一味の雨ゝそゝげども○柳いみどり花はくれなゐとよめるがごとし○謂く無緣の慈悲の平等なるは○雨のごとく草木の色々にうるをひをうくるは○一切衆生の益をうるゐたとふるなり。

佛心は○われらを愍念したまふことを○骨髓にとほりて○ろみつきたまへ

り。たとへば。火の炭に。おこりつきたるがごとし。はなたんとするとも。はなるべからず。攝取の心光。われらをてらして。身より髓にとほる。

〔百十七〕

骨髓の慈悲幷ゐ皮骨の三等

☒此一截い上ゐ佛心と云ふは大慈悲と云おうけて。此佛心の行者の内證ゐ入みちて。佛心凡身不二なる相をあらはして。機法一躰の理を示なり。骨髓等とい智度論に云。是大慈遍二滿十方三世衆生一。乃至毘蟲慈徹二骨髓一心不二捨離一已守護經ゐ云。二乘悲如レ割二皮膚一。菩薩悲如レ割二胎肉一。如來大悲深徹二骨髓一已此等のこゝろよりて徹到骨髓の釋をばまうけたまへり。髓は骨中脂也と云て。骨の中に脂膏あるを云なり。火炭のたとへは起信論。往生論註ゐ見にたり。具には予が論註の勘化講釋ゐあり。さて今のこゝは炭に火のつきたるをば爐と云なり。此爐の當躰をば炭といいんとすればこと〳〵く火なり。又火といいんとすれば其躰は炭なり。炭とやいいん火とやいいん。更ゐ辨別しがたし。機法一躰の念佛の行者。全くしかなり。若是を流轉の凡夫といはんとすれば。身も心も南無阿彌陀佛なる故に佛心ならざるところなし。然ば此者は佛体かとそればいまだ流轉の凡夫身なり。凡身かとをもへば心肝五臟ことごとく是佛身おたがはず。佛躰とやいはん凡身とやいはん。たゞ

ん。なをし爐のごとし。故ゐ火炭を以てたとへ玉へり。攝取心光等とは佛心をなをいち行者の骨髓ゐ染つきたまふ相をあかせり。觀經に云。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨矣。觀念法門に云。但有下專念二阿彌陀佛一衆生上彼佛心常照二是人一攝護不レ捨矣。此等の經釋のこゝろより書玉へるなり。心光とい佛慈悲の御心の光明に行者の心光相應したるとき照し玉はるを心光とは云なり。六要鈔に曰く。言二心光一者此非下光分二身相心想一其体各別上。只就二義門一宜レ得二其意一。以二佛慈悲攝受之心一所二照觸一光名二之心光一。是念佛行相二應佛心一。其佛心者慈悲爲レ体。是以經云下佛心者大慈悲是。以二無緣慈一攝中諸衆生上。已心は。三毒煩惱の心までも。佛の功德の。そみつきたまはぬところはなし。機法一躰なるところを。南無阿彌陀佛といふなり。

☒此一截は上に骨髓の中までそみつきたまふと云ふ。是は色法ゐ約して形あり。爰は心法に約して形なし。然ば佛心は是れ衆生の色心二法の中に入。そみつき玉いぬと云事なしとなり三毒煩惱とは三毒は貪欲。瞋恚。愚癡の三つなり。此の三つを毒といへるは。毒い害なりそこ

なふともやぶるとも訓す。謂く貪瞋癡の三つ。衆生の身神を傷害するを以ての故ゐ三毒と云なり。三毒全く煩惱なる故ゐ持業釋なり。但し三毒はせまくみゐかきり。煩惱いひろく一切ゐ通ずるなり。如來滅經に云。世尊告二金剛慧一言我以二佛眼一觀二一切衆生一。貪恚癡諸煩惱中の有二如來智如來眼如來身一。結跏趺座儼然不レ動已上此文も今のこゝろゐ大やうかなへるゐや。機法一躰なるところを南無阿彌陀佛といふ事。前々ゐ釋せるがごとし。

この信心おこりぬるうへは。口業には。たとひ。ときゝ念佛すとも。常念佛の衆生にて。あるべきなり。三緣のなかに。口につねに。身につねにと。釋するのこゝろなり。

㊣此一段は上來。機法一躰の義をいへるゐつきて。今爰ゐ機法一躰のことはりを能々領解しぬるを。此信心おこりぬるとは云なり。さて此領解したる信心の行者は。たとひ事の緣ゐふれて。ときゝ念佛申を事のわらんゐ。是は常念佛の行者ゐてある故ゐ。身口意の三業に念佛はたえぬなり。それにつきて彼此三業不相捨離の釋をひけり。具なる釋に云。衆生起レ行。口常稱レ佛。佛卽聞レ之。身常禮二敬佛一。佛卽見レ之。心常念レ佛。佛卽知レ之。衆生憶二念佛一者。佛憶二念衆生一。彼此三業不相捨離已。今是に口常身常等の常の字を以て機法一躰の義を釋するなり。先つ口常身常の常の字のこゝろゐ。通途の諸師のこゝろるゝやうは。機のかたの常ゐと云なり。此の義い觀經の密說をしらず。又善導の素意にかなはざるなり。其の故は常住不退の行法は菩薩の上ゐも容易つとめがたきなり。況や今時輕毛たる凡夫。常住ゐつとめうる事あらんや。故ゐ爰の口常身常等は佛邊の常住なり。然ゐ是は機の所修なり。今機の方ゐ口常住。身常住等と云事は機法一躰の故なりと。此義をつのらんために三緣の釋を引玉へるなり。口に常ゐ身ゐ常ゐとは一家善導の本文の中ゐ三業を擧玉へり。故に次下ゐも佛の三業とあり。然るを今身口の二業のみ出せる事は。是は脫文なるか又意あるか。謂く脫文ゐあらず意ある事なり。其の故は三業の中ゐ意業は心內ゐしてかくれて見えず。身口の二業は身外ゐしてあらはれて見ゆるなり。されば身口の所修い見聞ゐしてしるゝ故に。ゐらいれて懈怠の相のしれやすきをとつて常念佛の衆生の事をしるせるなり。

〔百十九〕彌陀五智の配屬

佛の三業の功德を。信ずるゆへに衆生の三業如來の佛智と。一躰にして佛の長時修の功德衆生の身口意に。あらはるゝところなり。

○此一截ハ上の三業不離のことわりを云なり。いふこゝろハ佛の三業御成就まします事は。佛智の內證よりあらわるゝなり ○佛智ハ是れ阿彌陀如來の根本智なり。實智なり。又は自證智なり。又ハ中道智なり。此卽ち五智の中の佛智なり。三業は是れ如來の枝末智なり。權智なり。又は化他智なり。又は空假智なり。此卽ち五智の中。不思議智等の四智是なり。然ハ佛智所成の三業を信すれは。佛け根本智にかなふて佛智と相應そ。佛智そてゐ長時不退なり。然れハ彼此三業不相捨離なるときハ。行者の所修全く是れ長時不退なり。故ゐ衆生の三業ゐあらわれて。口ゐ常に身ゐ常に意に常ゐ念佛するなり。此三業相應に約して機法一躰の理をつのるなり。長時修とは四修の中の一つなり。但しかならず四修の中の長時修とは見るべからす。唯是佛智常住なるとしるべし。然ども四修の中の長時修と云ふも佛智の長時修なり。予か選擇集本義にしるせるかごとし。

また唐朝に。傳大士とてゆゝしく大乘をもさとり。外典にも達して。

〔百十一〕傳大士の傳

〔百二十〕眞丹十七代の名

ふとき人おはしき。

○此よりたかふましきにいたるまでは。傳大士の傳を引て機と佛と全く一体なるの例を取て。今の意ゐ合してしらせ玉へり。此一截いまづ傳のこゝろを擧なり。唐朝とは傳大士は本。在家ゐして梁朝の人ゐて。達摩大師と同時なり。梁の武帝のために金剛經を講せし人なり。今唐朝とは其代を取て云にいあらざるなり ○凡そ眞丹の代を云ゐ夏殷周秦漢魏晉宋濟梁陳隋唐宋元明淸の十七代なり。於レ中。代のひさしきは周と漢と唐となり。故に久ゐ約して眞丹を周の漢の唐のなんぞ〳〵云なり。今唐と云ゐ唐の代の時分。日本にもろ〳〵のものをこしわたされしなり。是によつて唐の字をもろこしと和訓せるなり。此等の義ゐよつて惣して眞丹を大唐とは云なり ○傳大士とは稽古畧に云。齊明帝建武四年五月八日。生二武州義烏縣双林鄉傅一。宣慈家壬辰十六歲娶二劉氏一有二子二人一。曰二善一建善成。梁普通元年年二十四泝二水於稽亭塘下一。西城沙門嵩頭陀引レ之臨レ水。觀レ影圓光寶蓋。法從甚盛。心感二悟之一。遂於二松山之頂一因二雙桐一樹一創レ菴居。名曰二隻一林一爲二妻妙光一。普延普度。敷二演佛法一。苦行七年室二大通二年二弟

子日衆○大士欲レ導二群品一乃化二妻子一顯レ身昉設二大會一○大通六年大士遣下弟子傅翕二詣レ闕奏上レ書○有レ詔赴レ闕国十二月到二建康一○帝聞二大士神異一預二諸門一○大士以二木槌一扣二一門一諸門悉啓○直入二善言殿一帝問二師事一從レ誰答曰從無レ所レ從○事無レ所レ事○帝爲設レ食竟上二鐘山定林寺一○詔令二資給一○大同五年大士再入レ都三月帝召見二壽光殿一共論二眞諦一○帝又請レ講二金剛經一○大士揮レ案一拍而起○帝不レ喩再請レ講乃至○大士一日頂レ冠彼レ納レ履○帝問是僧耶○士以レ手指レ冠○帝云是道耶士以レ手指二納衣一辭レ闕而還大同十年大士設二大法會一○普爲二衆生一懺二滅罪苦一速得二解脫一○大士以二佛經目繁多人或不レ能二遍閱一乃建二大層龕一中心立二一柱一啓二八面一面寫二諸經一謂二之輪藏一○立レ願曰登吾藏門者○生生世世不レ失二人身一○發二菩提心一者能推二輪藏一○即與下持二誦諸經一功德上無レ異今之輪藏設二大士之像一始レ此也○大士於二陳宣帝一大建元年四月告二普建普成等二法師等一曰○我從二第四天一來爲度二衆生一○汝等愼二護三業一精二勤六度一○行二懺悔法一免レ墮二三途一○至二十四日一入二于涅槃一壽七十三闍維收二舍利一頂骨非二雙林一已○此はかに往々お傳あり○一々あぐるにあたはず○大要一つなり○ゆゝしきとは優の字なり優は勝なりと云てすぐると訓せるなり○或いゆたかとも訓して寛大なる義ゐも用ゆ○又い唯はむる詞にもあるなり○何も今いかなふなり○然ともすゝる〻義よろしき歟○儒釋の兩教に通達し玉へる事○世人にそぐれ玉へる故にとなり○大乘とは二種あり○一にい權大乘○二ゐは實大乘なり○今は實大乘なり○賢首の五教ゐよるゐ○第四の大乘頓教なりの外典といふ佛教のはかをさして云なり○惣していふに西天の外道十八部の經○眞丹の老子○孔子○莊子等の教は皆是佛教の外なり○是を外典と云ふなり○故に澄觀法師い儒道の二教をも外道といへるなり○但し今い老孔等のをしゑを外典と云なり○然ども外道の外と外典の外とい其意少し異なれども大意い同きなり○謂く濟レ神言二之內一浮圖之說○救レ形言二之外一周孔之教○謂二之內外一已さて傳大士外典ゐ通達し玉へる事ゐ諸傳記の中ゐ見ゆす○洽記の君子を待のみ。

ろのことばにいはく。あさなゝ〻○佛をいだいて臥すといへり。これは聖道の通法門の○眞如の理法をさして○佛とともにをき。ゆふなゝ〻○佛をい

〔百二十一〕傅大士理佛と同く坐臥するの偈

といふといへども。修徳のかたより。おもへばすこしも。たがふまじきなり。

○此一截は傅大士の語を以て配合して。機法一躰の理をしらせり禪林類聚の九に云。雙林の傅大士の偈ゐ云。夜夜抱レ佛眠。朝朝還共起。起坐鎮相隨。語默同居止。纖毫不二相離一。如二身影一相似。欲レ識二佛去處一。祇這語聲是。已此の偈のこゝろなり。てれと云より已下佛智とともにふそと云までい。傅大士の語を引合せる作者のことばなり。聖道門の通法門と云は。傅大士の佛といはれたるは人人所具の天眞佛を云なり。是い聖道門ゐ通して沙汰せる理佛也。眞如とは唯識論に云。眞謂眞實顯レ非二虛妄一。如謂如常表レ無二變易一。已上是は權門の說なり。若し實教の說によらば起信論ゐ云。一切法不レ可レ說不レ可レ念故名爲二眞如一。已上修得のかたよりおもふといへ。傅大士の佛といはれたるは法身の理佛なり。是を性德と云なり。今の佛といふは修因感果の報身。他受用の事佛なり。是を修德と云なり。性德修德元と不二なり。此邊より見るときは傅大士の佛と共ゐ朝暮ゐいねをきるといはるゝと。今の機法一躰とすこしもたがふ事なしと云。修性不二といへ指要鈔ゐ云。修

治造作卽變造三千。性謂本有不レ改。卽理具三千。今示下全レ性起レ修則諸行無作全レ修在レ性。則一念圓成上。是卽修外無レ性。性外無レ修。已上融故稱二不二一。已。

攝取の心光に照護せられ。たてまつらば。行者も。またかくのごとしあさなゝ報佛の功德をもちながらをき。ゆふなゝ彌陀の。佛智とともに臥す。

○此一截い傅大士の語と例合せるなり。上ゐ引合せらるゝやう。彼此三業不相捨離と云よりい傅大士の例をとれり。今又心光護念の益ゐあつかる人も又同じ事といへり。故に又如レ是といへるなり。角いへども理にいたりては二同なり。其故は三業相應の行者にあらずんば。心光護念の益はなきなり。攝取の心光等とは。前に觀經及び觀念法門。六要鈔を引がごとし。爰を和讚に云金剛堅固の信心を。さだまるときをまちえてぞ。彌陀の心光照護して。ながく生死をへだてけると。此讚のこゝろを眞佛上人の云。行者金剛堅固の信心を決定すると。きを。阿彌陀如來はまちえよろこびたまひて。すないち心光をいなちて行者をてらしまもり

〔百二十三〕

たまへば。いきたはまなことゞるとき。この穢土をいで極樂ふ往生して。この娑婆世界ゝふたゝびかへらざることを。ながく生死をへだてけるといふなり上已今心光照護の益ふあづかる行者は。身もこゝろも佛願に乘ずるなり。此ときは行者の内證こと〴〵く佛心佛智とならざる事なし。故に又傅大士の例ふ合して沙汰せるなり。

うとからん佛の功德は。機にとほければ。いかゞはせん。眞如法性の理は。ちかけれども。さとりなき機には。ちからおよばず。

⊠此よりかなしみたまふらんまでは。機法一躰の領解なきあやまりを云なり。今此一截ハ理道の法ありといへども。機教相應せざる事を示して次下に正きあやまりを云なり。うとからんとは疎の字なり。諸佛の功德は甚深なりといへども。今時末代の衆生にはうとし。其故は下根最劣の機ふは修しがたければ。是とはきなり。金屑落レ眼成レ翳と云ふて。金のすりくづはよきものはなけれども。眼ふいるれば。翳と云病を生ずるなり。諸佛の法も亦しかなり。甚深微妙なる功德ありといへども。機ふをいてかなはざるときは。かへつて行者のためふ害となりぬ。是等ハ是機ふとはきなり ⊠眞如法性の理はちかしとハ。眞如法性は人人具

人人所具の理性迷人の前にハ還て疎遠たるの引文例證

足。個個圓成ふして我等が當躰をはなるゝものふはあらざるなり。然ども迷る前には千万里をへだつるなり。古語に云。不レ離二當處一常湛然。覓即知君不レ可レ見上已或忘レ父迷二貧里一。褁レ珠送二塵劫一のたぐひならくのみ。されば俗典ふも此等のこゝろあり。前漢東方朔が傳ふ云。正二其本一萬事理、失二之毫釐一差以二千里一矣。何況や佛教をや鑑智禪師の云。毫釐有レ差天地懸隔といへり。さればいふしへ演若達多と云るあり。朝早々に北の屋陰にいたりて。鏡をとりて己が面像を見ふくらきを以ての故に頭みゑず。驚はしりいでゝ人々に問やう。我頭なし定めて知んぬ。夜の中ふ山の神か里の神か來て頭をとりぬるかとおぼゆるなり(首に出たり)。此即ち己が身ふ具する頭を外にもとむるは。是さとらざるが故なり。眞如法性ハ人間は云ふ及ばず。蝦蟇蚯蚓蠢々含靈こと〴〵くそなへずと云ことなし。上來引ところの諸義ふよるふ眞如法性は自巳をはなれず。ありといへどもまよふてしらざるときは。千万里のへだゝりとするなり。眞如と法性と一躰の異名なり。攝大乘論ふ云。一切法皆眞如爲レ性。若緣二眞如一即是覺二了一切法性一上已。般若經に云。一切法性不レ可二分別一說爲二眞如一矣しかれば眞如法性は一理の異名ふして全く同なるものなり。

わがちからぞ。さとりもいらぬ。他力の願行を。ひさしく。身にたもちながら。よしなき自力の執心に。ほだされて。むなしく流轉の故郷にかへらんまとか〳〵すべきことなり。

此一截ハ行者自力の迷心にかゝはりて。他力の願行をわきまへしらざる事を示すなり。

いはゆる彌陀如來法藏因位のむかし。二百一十億の諸佛刹土の中より。撰擇し玉へる逈世の別願を建立し玉ひて。他力易行の法門を我等衆生にあたへ玉はれども。十劫正覺のみぎりより。今日にいたるまで信せず行せずして詮なき自力おのみかゝはりて流轉せり。選擇集の第一章のこゝろを思ひ合そべし。此たび他力本願にあひながら。むなしくして又三途の故郷おかへらん事ハ口をしかるべしとなり。ひさしく身おたもつは佛け。十劫正覺のとき我等に廻向ましくしより。此の身にいうけ持ぞも。唯今まで信しあらはす事あたはずして流轉せるとなり。例せば大通智勝佛より一切衆生お結緣ありといへども。漸く釋迦如來の出世にあひて。法說。譬說。因緣說によりて得悟したるもあり。又いまおまよへるもあるがごとし。よしなしとは無ご由來ごと書なり。兼好がよしなしごととかけるも同しことばなり。草元集に云。

〔百二十四〕

麻をおふてなふて金銀をとらざるの物語

「君をたのみ思ひくらせるうたゝねの。よしなきことはうつゝならまし」。自力の執心にはだされとは。金剛の信心にくらき故おの。自力にのみ執著せるハ猶しばられたるがごとし。はだをかくなり。たとへば馬なんどの足をしばるをはだすと云なり。又絆の字をもかくなり。まことに諸佛のため。法王たる。他力本願の念佛を聞といへども。自力の法の習得たる事をすてがたくしては。むかしより今にいたりて流轉せること 八たとへば麻をつゞりて黃金をとらざるがごとし。往昔おゝ二人あり生計（身すぎ）のためおゝ他國に行て財物をもとむるおゝ漸く麻をまうけ得てになふて國にかへるおゝ中途に白銀あり一人右の麻をすてゝ白銀をとりておなふ。一人の云はく。是まで擔きたる麻をすてんも無下おをしき事なりとて銀をとらずして過ぎ行ぬ。又中途おして黃金すてゝありぬ。一人是を見て右の白銀をすてゝ黃金をおなふて去なり。又一人の云く遠國よりになひ來ものを。今更すてんもをしき事なりとて。麻をになふて共に國にかへるなり。ときおゝ二人の父母是を見て。黃金をになへるは其家富貴おして思のまゝおゝ父母をやしなへり。又麻をおなへるは父母をやしなふ事もかなはず。一生まづしかりきとなり（增一阿含經に出たり）今自力執情のものも。麻をおなふて金銀をとらざるもの

ゝことしと云云。

釋尊もいかばかりか衒來婆婆八千返の。甲斐なきことをあはれみ。彌陀もいかばかりか。難化能化のしるしなきことをかなしみたまふらん。

☒此一截は二尊出世の本意にそむきぬる事をかなしめることを示なり。謂く釋迦如來。娑婆世界に八千たびまで出興し玉へる事は。何のためぞと云ふ差別にあらず。一切衆生に彌陀如來の他力本願の念佛をすゝめて。淨土に往生せしめんとの義なり。然に本懷にたがふて自力執情にのみかゝはりて。彌陀他力の願にもとづかずして流轉せるなり。此卽ち釋迦の御苦勞ましく〳〵し甲斐なかりきとなり。釋尊とは佛は是れ三界の獨尊たり。故ゐ釋子の尊重そるところなり因て釋尊と云なり。梵網發隱に云。爲二釋子一之共宗一故云二釋尊一已上娑婆八千返とは梵網經ゐ云。吾今來二此世界一八千返。爲二此娑婆世界一坐二金剛華光王座一乃至摩醯首羅天王宮。爲二是中一切大衆一略開二心地法門一竟已上甲斐なきとは何事も苦勞をなして詮なきこと。又は思ふたがふたるをかいなしとは云なり。是によりてする事の末とはりて。とげてうれしをかいわるとは云なり ☒されば古かく

や姫のいはく。石上の中納言ゐは燕のもたる子やを貝を取てたまはらば曾合せんといふときゐ。石上の諸孝はつばくらめを多殺とも子安貝といふものなし。直ゐ巢をさぐれともなし。此ときに貝なのわざやといへり（竹取物語のこゝろなり）是よりいゝいだせるといへり。又彌陀如來因位ゐして五劫ゐ思をつくし兆載永劫の御修行ましく〳〵し事は諸佛の悲願ゐもれたる衆生を化度し玉ひんとのためゐ。あらゆる御辛勞ましく〳〵しを。難化能化といへるなりされども此本願ゐもとづかざれば彌陀如來の御辛勞のしるしもなきとなり。さればはかり思ふゐ彌陀釋迦の御本意にかなはざる衆生あるときは。さだめて二佛はかなしみ玉ふらんと。作者のこゝろならくのみ。

もし。一人なりとも。かゝる不思議の願行を。信ずることあらは。まことに。佛恩を報ずるなるべし。

☒此一截は前の不信にして。自力迷心ゐかゝはるものゐ。對して今ハ不思議の願力を信そる機をあかすなり ☒此卽ち釋迦彌陀の大恩を報そるものなりといへり。今まことにと云ふが字眼なり。其故は佛恩を報ずるゐ品品あるべし。金銀珠玉をいだして報ずるあり。又た已

〔百二十七〕 專諸が報恩

か身を牀座となして恩を報じ。或は身を火中に入れ。或は深淵ゐ身を投なんとして佛恩を報するあり。此れ等は眞實の佛恩報盡と云ふゐはあらず。まことの報盡と云ふい二尊の本懷のごとく。彌陀如來の不可思議の誓願により て。願行具足の名号を我等ゐ與ましまして。深く信してうたがいなき行人をまことの佛恩を報ずる人なりといへり。されば智度論ゐ云。不レ知レ恩人甚二於畜生一といへり。故ゐしる人としてわきまへずんばあるべからず。世俗なを恩を報ずることあり 〔図〕いおしへ專諸と云ものあり。伍子胥か恩をうけしなり。ときに吳の公子光と王僚と中あしくして。互にころさんとしけるが公子光。子胥に言く何とぞして王僚をたばかりころしたまはれと云。子胥又專諸ゐ此の事をかたる。專諸伍子胥が恩をかうむりたるを以ての故に。安き事なりとうけがふて。專諸一つのはかり事をなして王僚をむかへり。王僚專諸が宅ゐ入りぬるゐ。專諸匕首と云ふて少き劍を魚の中ゐ入てすゝむ。王僚しらずして食そところを。匕首をとりて王僚をころせしとなり（淡甚に出）まことゐ情爲レ恩使。命緣レ義輕といへる此義なるをや。人倫の恩すら。如レ是。況や佛恩のあさからざる報せずんばあるべからず。

かるがゆへに。安樂集には。すでに他力の乘ずべきみちあり。つたなく自力にかゝはりて。いたづらに。火宅にあらんことを。おもはざれといへり。

〔図〕此一義は。上に佛恩を報せよといへるゐうけて。安樂集を引て。他力佛恩のことはりを證しすゝめ玉へるなり。集に云。語二後學者一既有二他力可レ乘。不レ得下自局二已分一徒在中火宅上矣。

このこと。まことなるかな。自力のひがおもひを。あらためて。他力を信ずるところぞ。ゆめ〳〵まよひをひるがへして。本家にかへれともいひ。歸去來魔鄉には。とどまるべからずとも。釋するなり。

〔図〕此一義ゐ安樂集の釋をうけて。自力のひがめる思をひるがへして。他力を信せよとなり。此意をそ〳〵むるとして。善導の往生禮讃と定善義との釋を引なり。此ことばことなるかなとは安樂集の釋をさすなり。努力等。歸去來等の釋ゐ自力をすて。他力を信して極樂に往生せよとの勸進の釋なり。直ゐ安樂集の釋のこゝろをの玉へるゐてはなきなり。善導二處の釋

〔百二十八〕極樂ハ淨土の中の本國たるの要術

文○淨土ヲ往生セヨトアルハ自力ヲスヽテ他力ヲ信セヨト云ニアラズシテ何ソヤ○故ニ今ノ作者○理ヲ順シテ爰ヲバ書タまへルなり○ゆめ〳〵等トハ往生禮讃ニ云○努力翻レ迷還ニ本家一ト○努力トハ努勉也○力勤也○文選李陵答ニ蘇武一書ニ曰○努力自愛○つとめつとむるを努力と云なり○故ヲ努力をつとめつとむと訓するなり○是をゆめ〳〵と訓ずる事は本朝の俗語ヲして○少と云ふところ○又ハ夢ヲもしらぬと云ところヲ用なり○此の和訓にしては今のこゝろヲかなはざるなり○古き書本の中に努力とかきて兩点にしてゆめ〳〵ともつとめつとむともあり○然はつとむと訓ずべきものなり○精進勤行の義なり○翻迷とは迷ひをひるがへしてさとりヲ入と云の語なり○今いしからず自力執情の迷をひるがへして○他力の願船ヲ乘じて自然悟道の法にもとづき○極樂の本家にかへれとなり ☒本家とは極樂をさとなり○或ハ本國とも法王家とも云なり○言ハ極樂ハ是諸佛のためには本師本佛の土なるが故に○經ヲハ超踰十方○一切世界とも○又ハ令我作佛國土第一とも說玉へり○又楞伽經に云○諸有法報身應身○及反化皆從ニ無量壽極樂界中一出已上此等の義ヲ約して本家と云なりかへるといふ○前にハ流轉の故郷ヲかへるといふ○今ハ本家にかへると云ふ○

兩處の還の字○大に相違す如何んか意得んや○謂く前は唯今までハ三途にまよふてあるなり○今爰ヲ他力本願の念佛にあふといへども信せず行せずして○又本の三途にかへるなといへる義なり○故に今の還本家の還は一切諸佛のためヲも本國故郷たり○然ば流轉の故郷にゑかへるはせま〳〵本家に還はひろきなり○皈去來と云ハ此の歸の字と還本家の還の字と全く同くして極樂にかへる義なり○定善義に云○歸去來魔鄉不レ可レ停○曠劫來流二轉六道一盡皆經○到處無二餘樂一唯聞二愁歎聲一○畢二此生平一後入二彼涅槃城一○已上樂邦文類ヲ云○幻住居士擬二淵明歸去來一○歸去來兮西方淨土云○歸元直旨ヲ云○歸去來者乃西方淨土之謂也矣○是ヲついて古來より不審ある事なり○いはゆる一切衆生ははじめて○淨土に往生す何ぞ皈去來といふんやとなり○是を答ふるヲ或る師は能化ヲ約そるなり○謂く善導は是れ彌陀の化身にして○假ヲ此土に出生し玉ひて○一切群生をみちびきて淨土にかへり玉へる義なり ○又或る義ヲは迷悟ヲ約そ○謂く起信論等のこゝろヲよるヲ○悟は自なり迷は他なり○穢土の迷の他國より○淨土の悟の本國にかへる義なり○此の義味ありといへども○前の還二本家一下ヲ註そるでと〳〵○元來是我法王家と云ふと